

茨城県教育財団文化財調査報告第429集

# 柴崎大堀遺跡 柴崎大日塚

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XX

平成 30 年 3 月

独立行政法人都市再生機構  
首都圏ニュータウン本部  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第429集

しば さき おお ほり  
柴崎大堀遺跡  
しば さき だい にち  
柴崎大日塚

中根・金田台特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XX

平成30年3月

独立行政法人都市再生機構  
首都圏ニュータウン本部  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部による中根・金田台特定土地区画整理事業に伴って実施した、つくば市柴崎大堀遺跡、同市柴崎大日塚の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、柴崎大堀遺跡においては、中世の土塁を伴う長大な堀跡を確認し、当時の大規模工事の一端が明らかとなりました。また、柴崎大日塚においては、つくば市周辺に見られる大日如来の石造仏や石塔が出土し、当時の信仰を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成30年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 野 口 通



# 例 言

1 本書は、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部（平成23年6月まで独立行政法人都市再生機構茨城地域支社）の委託により、公益財団法人茨城県教育財団（平成23年度まで財団法人茨城県教育財団）が平成21・26・27・28年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市柴崎字大堀903-2番地ほかに所在する柴崎大堀遺跡及び茨城県つくば市柴崎字大日952番地ほかに所在する柴崎大日塚の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

## 柴崎大堀遺跡

調査 平成21年10月1日～10月31日

平成27年2月1日～3月31日

平成27年9月1日～11月30日

平成28年9月1日～11月18日

整理 平成29年4月1日～7月31日

## 柴崎大日塚

調査 平成23年9月1日～10月31日

整理 平成29年4月1日～7月31日

3 発掘調査は、平成21年度が調査課長池田晃一のもと、平成23年度が調査課長樫村宜行のもと、平成26年度が調査課長白田正子のもと、平成27・28年度が副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

## 平成21年度

首席調査員兼班長 白田正子

主任調査員 酒井雄一

調査員 作山智彦

## 平成23年度

首席調査員兼班長 皆川 修

主任調査員 齋藤和浩

主任調査員 船橋 理

## 平成26年度

首席調査員兼班長 寺内久永

次席調査員 作山智彦

調査員 根本康弘

## 平成27年度

首席調査員兼班長 駒澤悦郎

次席調査員 木村光輝 平成27年9月1日～10月31日

調査員 根本康弘 平成27年9月1日～10月31日

調査員 内堀 団 平成27年11月1日～11月30日

調査員 海老澤稔 平成27年11月1日～11月30日

平成 28 年度

首席調査員兼班長 駒澤悦郎

次 席 調 査 員 木村光輝

調 査 員 根本康弘

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、以下の者が担当した。

次 席 調 査 員 盛野浩一 平成 29 年 4 月 1 日～7 月 31 日

調 査 員 皆川貴之 平成 29 年 4 月 1 日～4 月 30 日

5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

盛野浩一 第 1 章～第 3 章第 3 節 5，第 4 節，第 4 章

皆川貴之 第 3 章第 3 節 6

6 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等の資料は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。但し、胎蔵界大日如来像は、つくば市教育委員会にて保管されている。

# 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、柴崎大堀遺跡については $X = + 11,600 \text{ m}$ ,  $Y = + 26,080 \text{ m}$ , 柴崎大日塚については $X = + 12,040 \text{ m}$ ,  $Y = + 25,880 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C..., 西から東へ 1, 2, 3... とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c...j, 西から東へ 1, 2, 3, ...0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SA - 土塁 SD - 堀跡・溝跡 SE - 井戸跡 SK - 土坑 SS - 石器集中地点

HT - 方形竪穴遺構 TM - 塚 TP - 陥し穴

遺物 M - 金属製品 N - 自然遺物 (人骨片) Q - 石器・石製品 T - 瓦

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉  石器使用痕  油煙

● 土器 □ 石器・石製品 △ 金属製品 ▲ 自然遺物 (人骨片) - - - 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社) を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 遺構の主軸は、長軸 (径) 方向とみなした。長軸・長径方向は、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した (例 N - 10° - E)。

- 7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

柴崎大堀遺跡

変更 SK49 → SK44, SD 9 → SD 6

柴崎大日塚

変更 SH 1 → HT 1



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
柴崎大堀遺跡・柴崎大日塚の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 柴崎大堀遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
石器集中地点	14
2 縄文時代の遺構と遺物	22
陥し穴	22
3 平安時代の遺構と遺物	25
土 坑	25
4 室町時代の遺構と遺物	26
(1) 堀 跡	26
(2) 土 塁	35
5 江戸時代の遺構と遺物	36
土 坑	36
6 その他の遺構と遺物	37
(1) 土 坑	37
(2) 溝 跡	44
(3) 遺構外出土遺物	45
第4節 まとめ	47
第4章 柴崎大日塚	53
第1節 調査の概要	53
第2節 基本層序	53

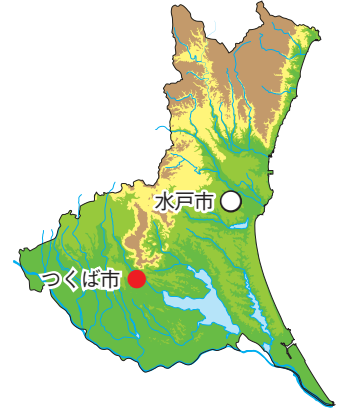
第3節 遺構と遺物 .....	56
1 室町時代の遺構と遺物 .....	56
方形竪穴遺構 .....	56
2 江戸時代の遺構と遺物 .....	58
塚 .....	58
3 その他の遺構と遺物 .....	65
(1) 井戸跡 .....	65
(2) 土坑 .....	66
(3) 遺構外出土遺物 .....	68
第4節 まとめ .....	70
写真図版 .....	PL 1～PL16
抄録	
付図	



# しばさきおおほり しばさきだいにち 柴崎大堀遺跡・柴崎大日塚の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

柴崎大堀遺跡と柴崎大日塚は、つくば市の東部に位置し、桜川<sup>さくらがわ</sup>右岸の標高 26 m の台地上に立地しています。中根・金田台特定土地区画整理事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成 21・26～28 年度の 4 回に分けて柴崎大堀遺跡の 10,897㎡について、平成 23 年度に柴崎大日塚の 758㎡について発掘調査を行いました。



## 柴崎大堀遺跡の調査の内容と成果

調査では、旧石器時代の石器集中地点 1 か所、縄文時代の<sup>おと</sup>陥し<sup>あな</sup>穴 6 基、平安時代の<sup>どこう</sup>土坑 1 基、室町時代から江戸時代にかけて利用された両側に<sup>どるい</sup>土塁を伴う<sup>ほりあと</sup>堀跡 1 条、江戸時代の土坑 1 基などが確認できました。調査の主体となったのは、遺跡名にもなっている大きな堀跡で、調査した範囲だけで 320 m 以上を確



調査区遠景（北東から）



堀跡に堆積した土砂の様子



堀底の土坑から出土した江戸時代の土器類

認しました。堀の幅は広いところでは約 15 m あり、深さは土塁の頂上から最大で約 6 m あります。台地が狭くなったところを横切るように掘っており、戦乱の時代に台地の上を通過して攻めてくる敵を迎え撃つための施設であったと考えられます。また、途中で堀の幅を広げており、鉄砲の使用などといった戦い方の変化に対応した痕跡がうかがえます。戦乱の時代が終わり江戸時代になると、堀の底が墓として利用されていました。それも江戸時代に入ってしばらくの間だけで、その後は堀跡も埋まってしまい、調査を行うまでは山林となっていました。

## 柴崎大日塚の調査の内容と成果

調査では、室町時代の<sup>ほうけいたてあない こう</sup>方形竪穴遺構 1 棟、江戸時代の<sup>つか</sup>塚 1 基などを確認しました。塚は、もともと古墳と考えられていましたが、調査の結果、埋葬施設ではなく江戸時代の塚であることが分かりました。塚に<sup>まつ</sup>祀られていたのは<sup>たいぞう</sup>胎蔵界大日如来像で、特徴的な表情の石仏です。この石仏は、茨城県の南部及び西部に 50 体ほど確認されているもので、寛永の 6 年間に集中して造られたことが知られています。発掘調査によって出土したのは初めてのことで、江戸時代の信仰の形を確認することができました。



胎蔵界大日如来像

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

つくば市では、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが、2005年に開業した「つくばエクスプレス」の沿線開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に名称を変更）が事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長は茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度及び平成26年2月17日に柴崎大堀遺跡の現地踏査を、平成11年10月14日に柴崎大日塚の現地踏査を実施し、平成11年11月9日・10日に柴崎大堀遺跡と柴崎大日塚、平成28年6月7日及び7月15日に柴崎大堀遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成11年12月10日、茨城県教育委員会教育長は都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に柴崎大堀遺跡と柴崎大日塚が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成19年1月11日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知をした。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成19年1月31日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年2月19日、平成23年2月16日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、平成26年2月28日、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部長は茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成21年3月11日柴崎大堀遺跡について、平成23年2月28日柴崎大堀遺跡及び柴崎大日塚について、茨城県教育委員会教育長は独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。平成26年3月10日、茨城県教育委員会教育長は独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部長あてに、柴崎大堀遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年10月1日から10月31日まで柴崎大堀遺跡の発掘調査を、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年9月1日から10月31日まで柴崎大日塚の発掘調査を、公益財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成27年2月1日から3月31日、平成27年9月1日から11月30日、平成28年9月1日から11月18日まで柴崎大堀遺跡の発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

柴崎大堀遺跡の調査は、平成21年度から平成28年度にかけて、4次に分けて実施した。平成21年度は平成21年10月1日から10月31日まで、平成26年度は平成27年2月1日から3月31日まで、平成27年度は平成27年9月1日から11月30日まで、平成28年度は平成28年9月1日から11月18日までの合わせて9か月間である。柴崎大日塚の調査は、平成23年9月1日から10月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

### 柴崎大堀遺跡

工程	期間	平成26年度		平成27年度			平成28年度		
	平成21年度	2月	3月	9月	10月	11月	9月	10月	11月
調査準備 表土除却 遺構確認	10月								
遺構調査									
遺物洗浄 写真整理									
撤収									

### 柴崎大日塚

工程	期間	平成23年度	
		9月	10月
調査準備 表土除却 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 写真整理			
撤収			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

柴崎大堀遺跡は、茨城県つくば市柴崎字大堀 903-2 番地ほかに、柴崎大日塚は、茨城県つくば市柴崎字大日 952 番地ほかに所在している。

つくば市は、茨城県の南西部に位置し、北部は筑波山塊に接し、東側約 5 km には霞ヶ浦がある。市域の多くは筑波山を北端として、その南東側に広がる標高 25 m ほどの平坦な筑波・稲敷台地上にある。この台地は、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川によって区切られており、東から花室川、蓮沼川、小野川、谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れている。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり、地質的には海成砂層の成田層を基盤として、その上に砂層・砂礫層の竜ヶ崎層、さらに泥質粘土層の常総粘土層、関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている<sup>1)</sup>。

柴崎大堀遺跡は、つくば市の北東部、桜川右岸の標高約 26 m の台地上に位置している。調査区域の東側は、桜川低地に向かって開析された谷地形で、低地との比高は 17 ~ 21 m である。西側は花室川の支流によって開析された緩やかな小支谷が入り込んでいる。柴崎大日塚は、柴崎大堀遺跡の西にある小支谷に沿って 600 m ほど北上した標高約 27 m の台地平坦部に位置している。両遺跡とその周辺は、山林や畑地として利用されていたが、近年開発が進み、その状況も変わりつつある。

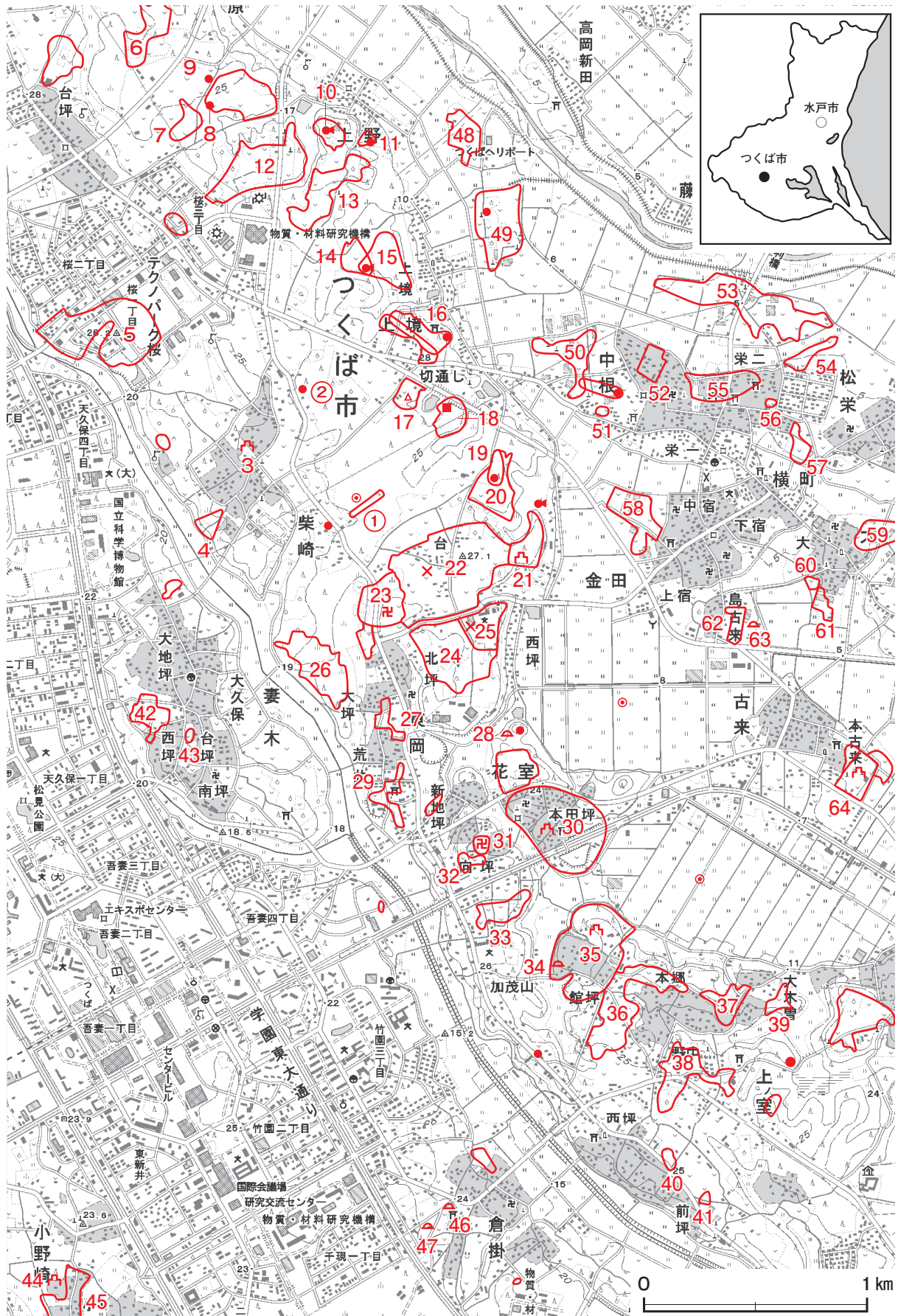
### 第2節 歴史的環境

柴崎大堀遺跡、柴崎大日塚が所在する桜川および花室川流域には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』<sup>2)</sup> に登録されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は、上野古屋敷遺跡<sup>3)</sup>〈13〉、中根中谷津遺跡<sup>4)</sup>〈18〉、東岡中原遺跡<sup>5)</sup>〈26〉で、石器集中地点が確認されている。中でも東岡中原遺跡では、ナイフ形石器、尖頭器、搔器、彫刻刀形石器、楔形石器、石刃、石核などが、多層位にわたって出土しており、これらは県内の旧石器時代を考える上で重要な資料となっている。また、花室川左岸の北条中台遺跡<sup>6)</sup>や、柴崎遺跡<sup>7)</sup>〈5〉からもナイフ形石器や尖頭器が出土しており、当該期の人々の活動の痕跡を確認することができる。花室川の川底からは、ナウマンゾウやニホンアシカの化石が出土しており、旧石器時代の人々が狩猟対象としていたことが考えられている<sup>8)</sup>。

縄文時代の遺跡は、多数確認されている。柴崎遺跡では、早期の炉穴が確認されている。上野陣場遺跡<sup>9)</sup>〈12〉、上野古屋敷遺跡、東岡中原遺跡では、前期の集落跡が確認されており、当該地域に人が定住し始めたことを示している。中期に入ると、集落の規模が大きくなり、遺跡数も増加している。北条中台遺跡や、花室川下流左岸の下広岡遺跡<sup>10)</sup>では、大規模な集落跡が確認されている。後期には、周辺地域で貝塚が形成されるようになる。上境旭台貝塚<sup>11)</sup>〈17〉や桜川下流域に存在する国指定史跡の土浦市上高津貝塚<sup>12)</sup>では、後期から晩期にかけて形成された貝塚が存在する。これらの貝塚からは、土器などの遺物のほか、動物の骨などの自然遺物も多量に出土しており、当該期の生業活動を推測する上で良好な資料となっている。また、上野陣場遺跡、上野古屋





第1図 柴崎大堀遺跡・柴崎大日塚周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1 「上郷」「常陸藤沢」）

表1 柴崎大堀遺跡・柴崎大日塚周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	柴崎大堀遺跡	○	○				○	○	33	花室儀量台遺跡		○		○	○	○	○
②	柴崎大日塚						○	○	34	上ノ室タテ坪塚						○	○
3	柴崎片岡上館跡				○	○	○		35	上ノ室城跡		○		○	○	○	○
4	柴崎南遺跡		○		○		○	○	36	上ノ室ハマイバ遺跡				○	○	○	○
5	柴崎遺跡		○		○	○	○	○	37	上ノ室十枚遺跡				○	○	○	○
6	栗原五竜遺跡		○		○	○	○		38	上ノ室野中遺跡		○		○	○	○	○
7	栗原大山西遺跡					○	○	○	39	上ノ室薬師山遺跡					○	○	○
8	栗原十日塚古墳				○				40	上ノ室中坪後遺跡				○	○	○	○
9	栗原愛宕塚古墳				○				41	上ノ室中畑遺跡		○			○	○	○
10	上野天神塚古墳				○				42	妻木坪内遺跡					○	○	○
11	上野定使古墳群				○				43	妻木宮前遺跡					○	○	○
12	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	○	44	小野崎館跡						○	○
13	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○	45	小野崎宿遺跡						○	○
14	上境作ノ内遺跡		○	○	○	○		○	46	倉掛天神塚						○	○
15	上境作ノ内古墳群				○				47	倉掛千現塚						○	○
16	上境滝ノ台古墳群				○				48	上境北ノ内遺跡					○	○	○
17	上境旭台貝塚		○		○				49	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○
18	中根中谷津遺跡	○	○			○			50	中根不葉拔遺跡		○			○	○	○
19	横町古墳群				○				51	中根宮ノ前遺跡					○	○	○
20	横町庚申塚遺跡		○		○	○	○	○	52	中根屋敷附館跡					○	○	○
21	金田城跡						○		53	中根遺跡				○	○	○	
22	金田西遺跡		○		○	○	○	○	54	松塚鷺打遺跡					○	○	○
23	九重東岡廃寺					○	○	○	55	栄土器屋遺跡					○	○	○
24	金田西坪B遺跡		○		○	○			56	栄屋敷付遺跡					○	○	○
25	金田西坪A遺跡					○			57	松塚高畑遺跡				○	○	○	
26	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○	○	58	金田竜宮橋遺跡					○	○	○
27	東岡南遺跡					○	○	○	59	大白畑遺跡				○	○	○	○
28	花室後田塚						○	○	60	阿弥陀寺跡						○	○
29	東岡天神前遺跡					○	○	○	61	大南遺跡				○	○	○	○
30	花室城跡		○	○	○	○	○	○	62	古来北ノ崎遺跡					○	○	○
31	花室寺畑廃寺						○		63	古来島ノ前塚						○	○
32	花室寺山前遺跡					○	○	○	64	古来館跡		○	○	○	○	○	

敷遺跡、上境旭台貝塚、東岡中原遺跡からは、縄文時代に作られたと考えられる陥し穴が確認されており、台地上が狩猟の場としても利用されていたことが分かる。

弥生時代の遺跡は、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡、やや上流にある玉取向山遺跡<sup>13)</sup>で、後期の集落跡が確認されているが遺跡数は少ない。

古墳時代になると遺跡数が急増し、桜川周辺の微高地や台地全域に広がっている。桜川右岸では、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡で前期と後期、東岡中原遺跡で中期、柴崎遺跡で後期の集落跡がそれぞれ確認されている。古墳は、全長80mで当地域最大の前方後円墳である上野天神塚古墳〈10〉や、上野定使古墳群〈11〉が存在している。この他、栗原十日塚古墳〈8〉、栗原愛宕塚古墳〈9〉をはじめ、桜川右岸台地縁辺部に、円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境滝ノ台古墳群〈16〉、埴輪片・石棺破片が確認された横町古墳群

〈19〉などが知られている<sup>14)</sup>。上境作ノ内古墳群〈15〉の1号墳では、発掘調査により石棺と被葬者の骨が確認されている<sup>15)</sup>。これらの古墳群のうち、上野天神塚古墳が前期古墳である以外は、いずれも後期古墳である。

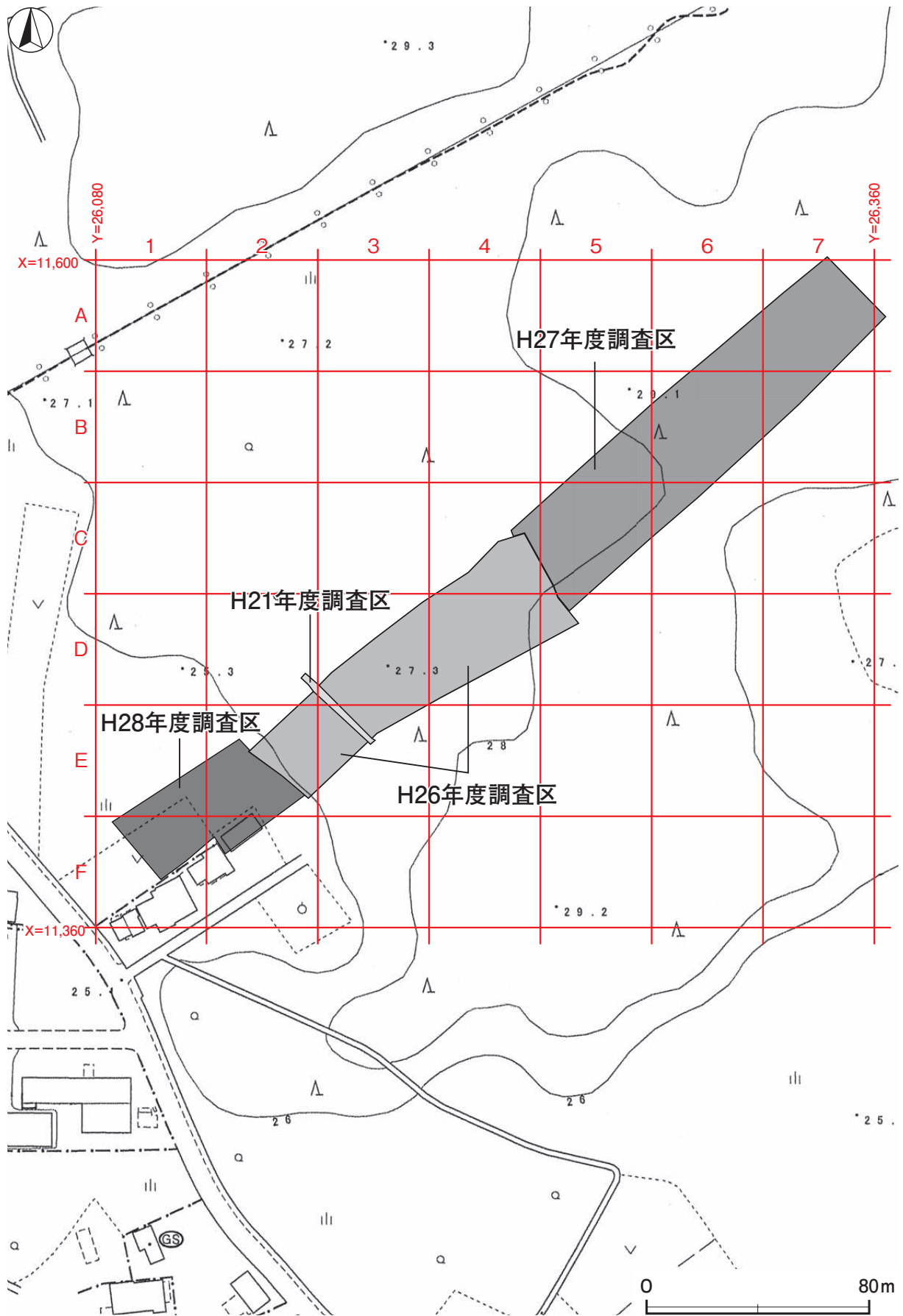
奈良・平安時代の当該地域は、河内郡菅田郷に属し、その後12世紀には田中の荘に属していた。この時代の遺跡は、桜川と花室川に挟まれた中根、金田を中心とする台地上に集中している。金田西坪A遺跡〈25〉は従来から河内郡衙の正倉跡と推定されていたが、平成14年に金田西遺跡〈22〉、九重東岡廃寺〈23〉、金田西坪B遺跡〈24〉の確認調査を実施したところ、多数の掘立柱建物跡等が確認され、河内郡衙の郡庁院、正倉院及び関連建物群であることが明らかになった<sup>16)</sup>。九重東岡廃寺は、礎石、瓦塔、瓦、蔵骨器などが出土しており、確認調査で基壇の一部と溝、堂宇と想定される掘立柱建物跡が検出されているが、寺域や伽藍配置等については不明である<sup>17)</sup>。この他、柴崎遺跡や東岡中原遺跡でも大規模な集落跡が確認されている。

中世の遺跡も数多く確認されている。柴崎遺跡では、12～13世紀の方形竪穴遺構を中心とした集落跡が、上野古屋敷遺跡では、溝で区画された掘立柱建物跡を中心とする集落跡が確認されている。桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡があり、それに関連すると考えられる城館跡も多い。桜川右岸には、柴崎片岡上館跡〈3〉、金田城跡〈21〉、花室城跡〈30〉、上ノ室城跡〈35〉、古来館跡〈64〉などが位置している。仏教関連遺跡としては、筑波山の南、三村山麓一帯に中世寺院群が存在しており、つくば市三村山清冷院極楽寺跡には、13世紀の半ば、大和の高僧忍性が来住して、布教に努めたと伝えられている<sup>18)</sup>。当地域は鎌倉時代から室町時代にかけては小田氏、戦国時代においては小田氏と佐竹氏の支配下となり、中世末まで柴崎地区は上境・中根・土器屋・松塚・横町・柴崎地区で一郷を構成し、筑波郡と境を接することから境郷とも呼ばれていた。江戸時代は、堀氏玉取藩の知行地となった上野・栗原地区を除き、当該地域の多くが土浦藩に属することになり、明治4年(1871年)の廃藩置県に至っている。

#### 註

- 1) a 大山年次監修『茨城県 地質のガイド』コロナ社 1977年8月  
b 日本の地質『関東地方』編集委員会「関東地方」『日本の地質』3 共立出版 2007年5月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) a 三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月  
b 川井正一「上野古屋敷遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集 2008年3月  
c 川井正一・齋藤和浩「上野古屋敷遺跡3 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第324集 2009年3月  
d 櫻井完介・江原美奈子「上野古屋敷遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第334集 2010年3月
- 4) a 川村満博「(仮称)中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I 中谷津遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月  
b 荒蒔克一郎「中根中谷津遺跡2 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第367集 2013年3月
- 5) a 成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書II 中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月  
b 成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III 中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月  
c 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV 中原遺

- 跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
- d 駒澤悦郎「東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第251集 2005年3月
- 6) 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集 1995年12月
- 7) a 高村勇「研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ-1区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第54集 1989年9月
- b 佐藤正好 松浦敏「研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 柴崎遺跡Ⅱ区 中塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第63集 1991年3月
- c 土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月
- d 萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集 1994年3月
- 8) 飯泉克典・国府田良樹・小池渉・西本豊弘・安藤寿男・伊達元成「茨城県霞ヶ浦西部花室川河床礫層より産出した後期更新世末期のニホンアシカ化石」『地質学雑誌』第116巻第5号 2010年5月
- 9) a 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
- b 川井正一・齋藤和浩「上野陣場遺跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告第XⅠ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第323集 2009年3月
- 10) 加藤雅美・小河邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 下広岡遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第10集 1981年3月
- 11) a 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和「上境旭台貝塚 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅢ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集 2009年3月
- b 江原美奈子「上境旭台貝塚2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅤ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集 2012年3月
- c 荒蒔克一郎「上境旭台貝塚3 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅧ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第368集 2013年3月
- d 小林和彦「上境旭台貝塚4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅨ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第397集 2015年3月
- 12) a 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 1994年3月
- b 塩谷修編『国指定史跡上高津貝塚E地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2000年3月
- c 石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚C地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-』土浦市教育委員会 2006年3月
- 13) a 石橋充・関口友紀『玉取遺跡-火葬場建設に伴う発掘調査報告-』つくば市教育委員会 2000年3月
- b 奥沢哲也「玉取向山遺跡 県立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第263集 2006年3月
- 14) 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻』桜村教育委員会 1982年3月
- 15) つくば市教育委員会「上境作ノ内1号墳 発掘・確認調査」『つくば市内遺跡』つくば市 2001年3月
- 16) 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 17) a 九重廃寺遺跡調査団『東岡遺跡-九重廃寺跡調査報告-』桜村教育委員会 1984年3月
- b 白田正子『九重東岡廃寺確認調査報告書1』茨城県教育財団 2001年3月
- 18) 筑波町史編纂専門委員会『筑波町史 上巻』つくば市 1991年3月



第2図 柴崎大堀遺跡調査区設定図（つくば市都市計画図 2,500 分の 1）

## 第3章 柴崎大堀遺跡

### 第1節 調査の概要

柴崎大堀遺跡は、つくば市の北東部に位置し、桜川右岸の標高約 26 mの台地上に位置している。遺跡の所在する台地は、東に桜川、西に花室川が流れ、二つの河川に挟まれた幅約 1.5kmの舌状台地となっている。今回の調査区は、北西・南東方向に約 35 m、北東・南西方向に約 330 mの範囲で、舌状台地を横断する形になっている。調査面積は 10,897㎡で、調査前の現況は畑地、山林である。

調査の結果、石器集中地点 1 か所（旧石器時代）、陥し穴 6 基（縄文時代）、堀跡 1 条とそれに伴う土塁 2 条（室町時代）、土坑 48 基（平安時代 1・江戸時代 1・時期不明 46）、溝跡 7 条（江戸時代以降）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 8 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高台付椀）、須恵器（坏・甕）、土師質土器（小皿・焙烙・甕）、瓦質土器（火鉢）、陶器（天目茶碗・丸碗・皿）、磁器（碗）、石器・石製品（砥石・硯）、銭貨（寛永通寶）、瓦、石核、剥片、鉄滓（椀状滓）などである。

### 第2節 基本層序

台地縁辺部（E 2 e2 区、E 2 g9 区）に 2 か所と台地中央部（C 5 e7 ～ C 5 g8 区）にテストピットを設定し、基本土層（第 3 図）の観察を行った。

第 1 層は、表土および土塁盛土である。層厚は 22 ～ 38cm である。

第 2 層は、黒褐色を呈する層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 15 ～ 23cm である。

第 3 層は、暗褐色を呈する漸位層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 18 ～ 26cm である。

第 4 層は、褐色を呈するローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 16 ～ 38cm である。

第 5 層は、暗褐色を呈するローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は 16 ～ 25cm である。第 2 黑色帯と考えられる。

第 6 層は、褐色を呈するローム層である。粘性・締まりともに強く、黒色化した鉄分を含んでいる。鉄分は下部にいくにつれて多くなる。層厚は 15 ～ 40cm である。

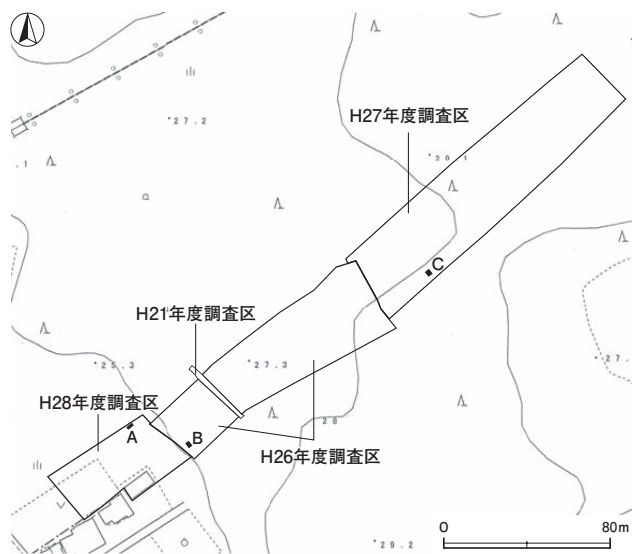
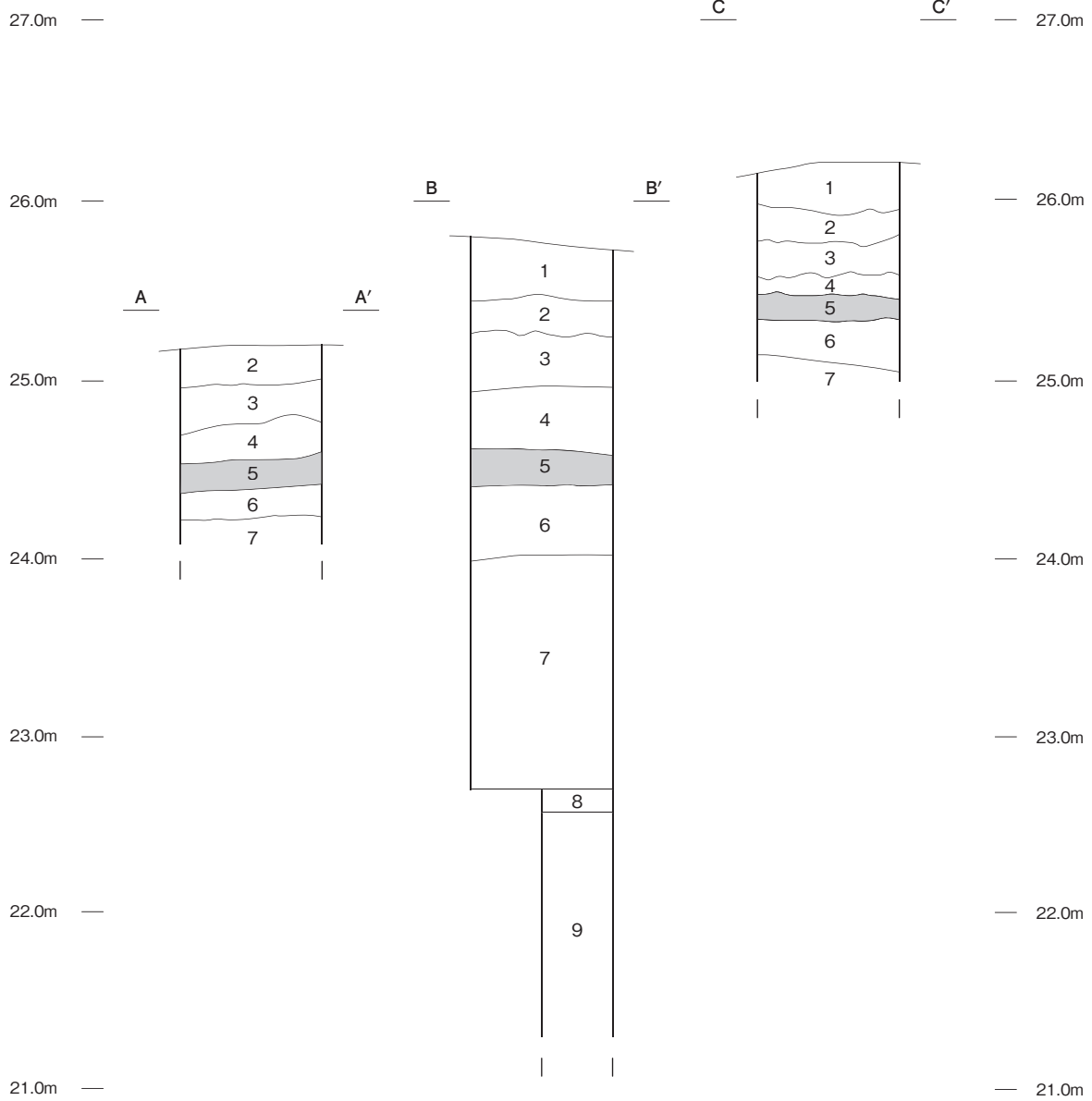
第 7 層は、灰白色を呈する粘土層である。粘性・締まりともに非常に強く、層厚は 140cm 程度である。色調の違いや鉄分の含有でさらに分層ができる。常総粘土層に比定できる。

第 8 層は、明赤褐色を呈する漸位層である。酸化鉄を非常に多く含んだ粘土と砂の互層で、粘性は普通で締まりは強く、層厚は 14cm 程度である。

第 9 層は、灰色を呈する砂層である。粘性は弱く締まりは非常に強い。酸化鉄の含有やクロスラミナが入ることさらに分層ができる。層厚は 186cm まで確認し、下部は未掘である。竜ヶ崎層に比定できる。第 1 号堀跡はこの層まで掘り込んでいる。

第 7 層下部以下は、第 1 号堀跡の壁面での確認である。

遺構は主に第 4 層上面で確認した。



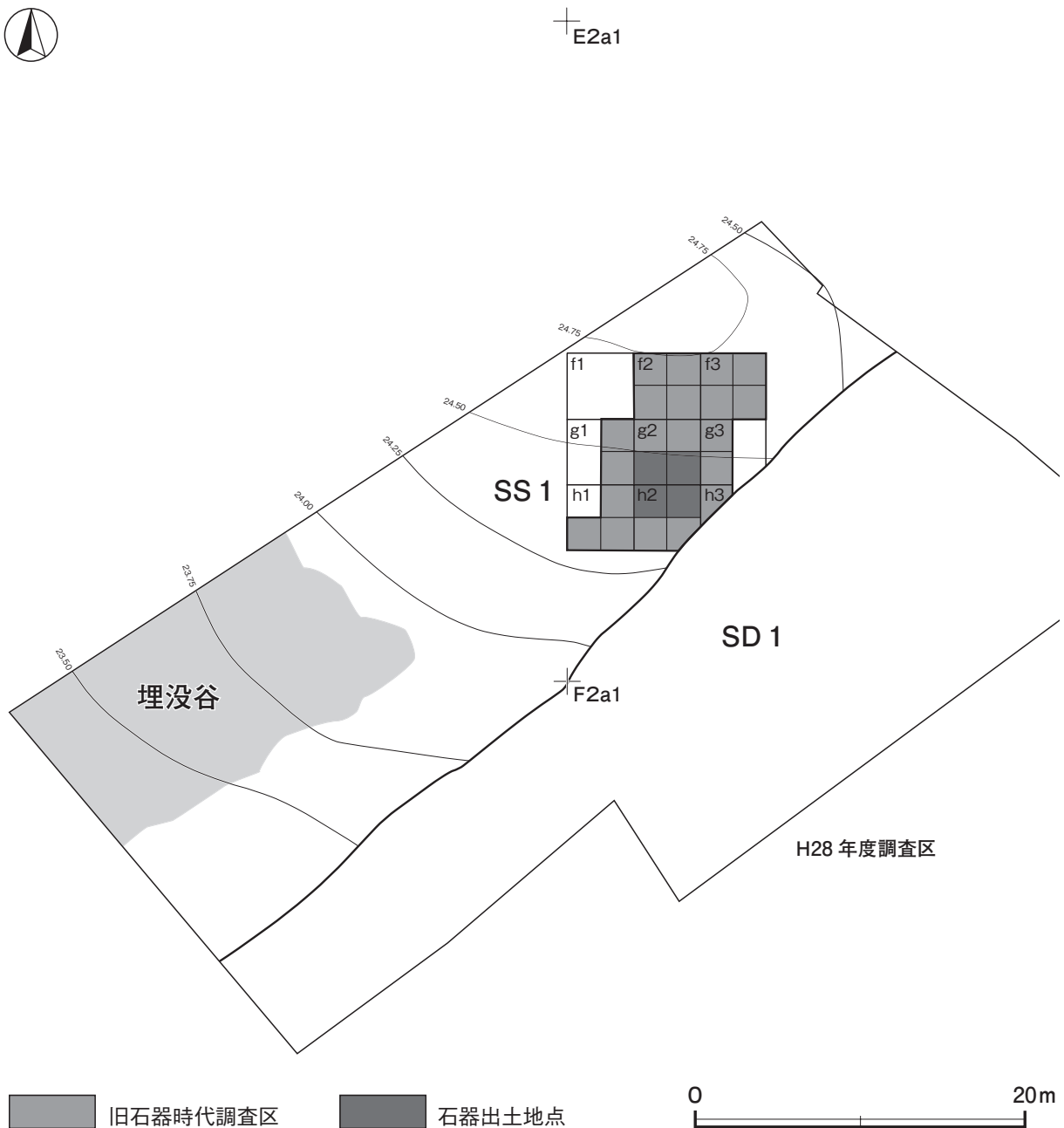
第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、石器集中地点1か所を確認した。第6号溝跡の底面に旧石器時代の遺物が露出していたため、そこを中心に2m四方のグリッドを設定し、調査範囲を拡張しながらローム層の掘削を行った。調査面積は90㎡である。

接合した遺構外出土遺物1点を含め、出土した石核・剥片の総数は39点である。すべてに通し番号を付し、観察表を掲載した。接合資料および特徴的な剥片については実測図を掲載し、実測番号を観察表の備考欄に記載した。



第4図 旧石器時代調査区設定図



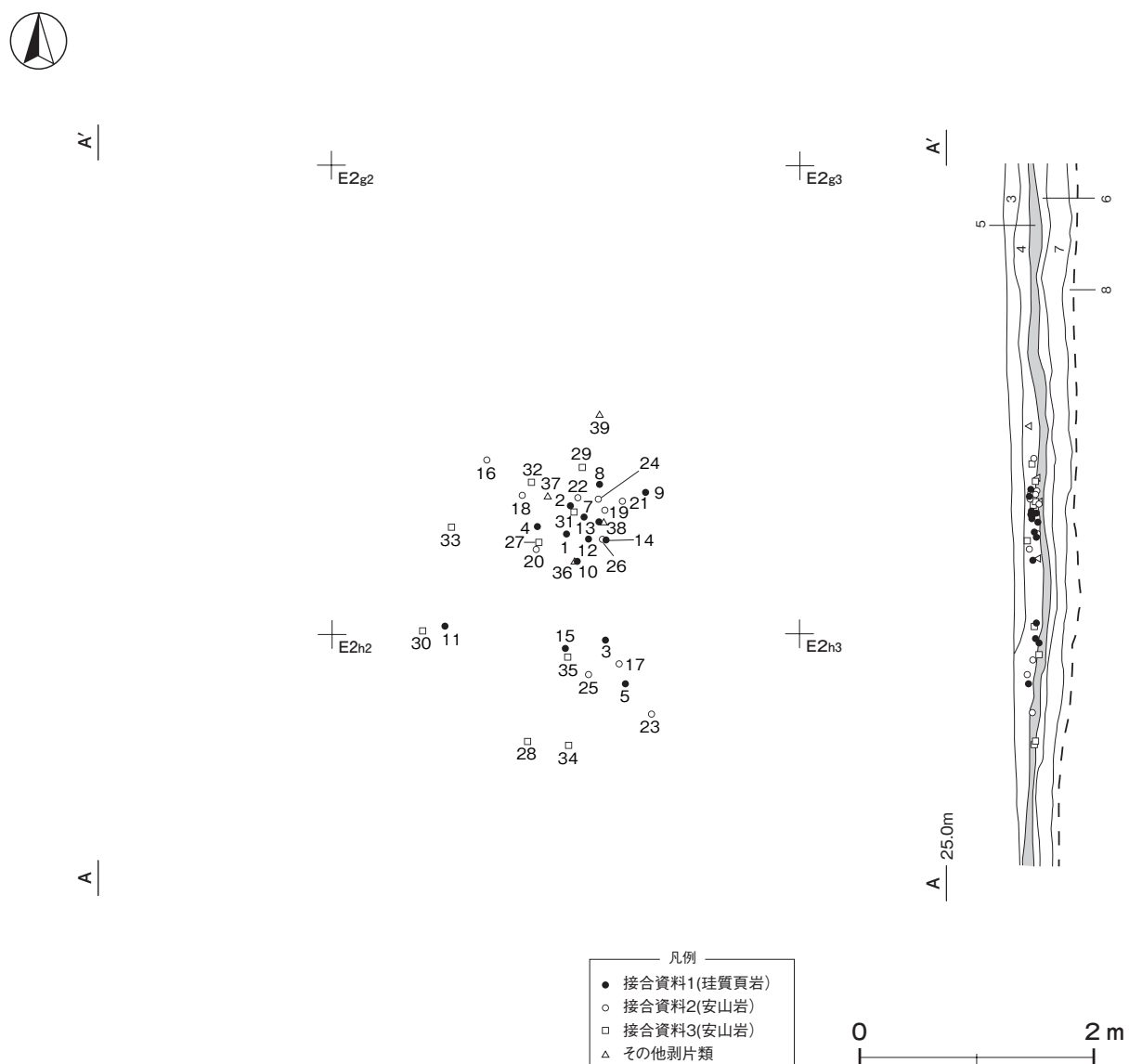
石器集中地点

第1号石器集中地点（平成28年度）（第5～12図）

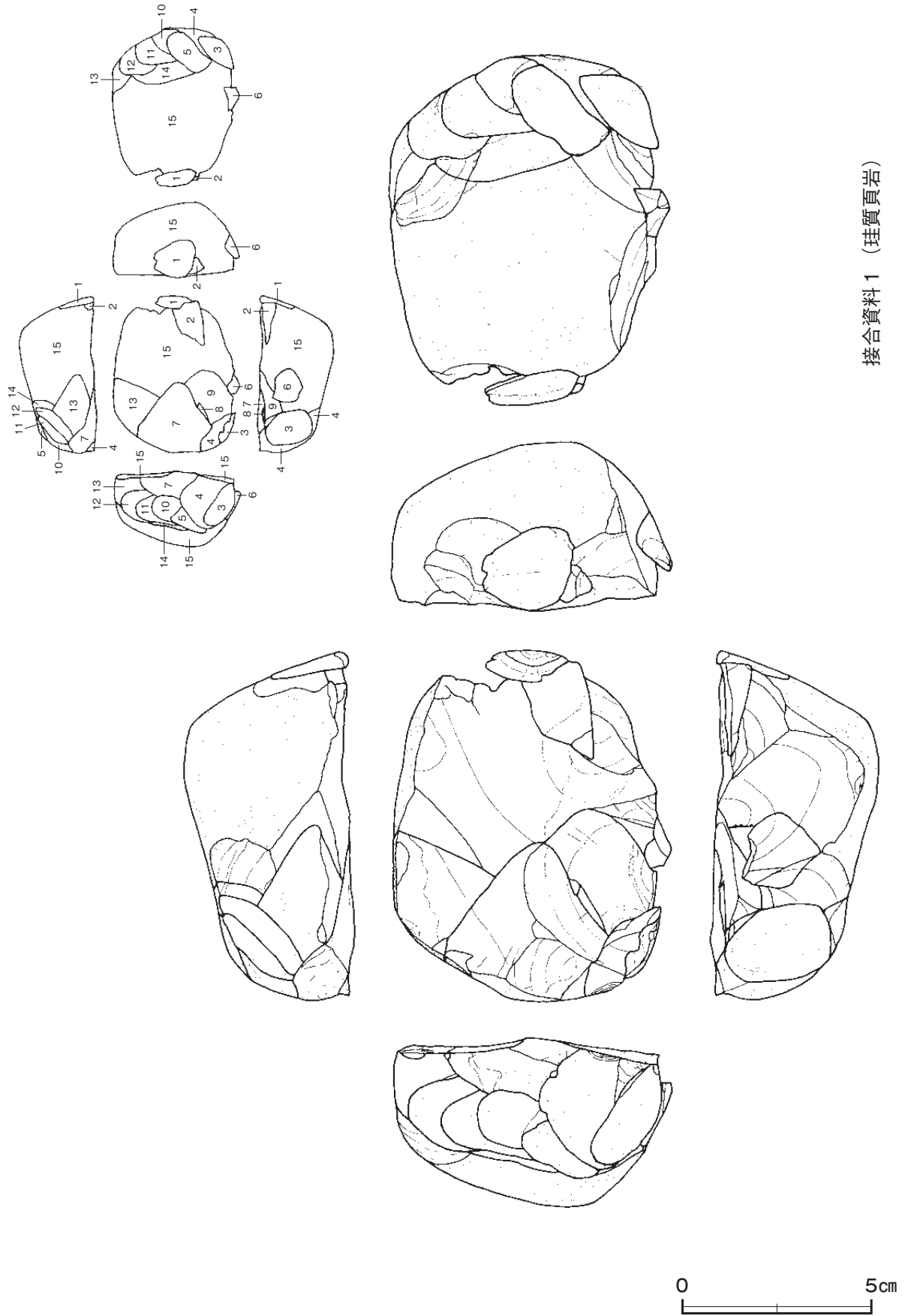
**位置** 調査区西部のE2g2区，標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

**遺物出土状況** 石核5点，剥片32点，破片1点が，基本層序の第4層（褐色ローム層）と第5層（第2黒色帯）から南北2.8m，東西2.0mの範囲で出土している。遺構外出土遺物から接合した資料1点を含め，計39点を確認した。石材は，珪質頁岩18点（うち15点が接合資料1），安山岩21点（うち11点が接合資料2，9点が接合資料3）である。36は接合資料の安山岩とは異なる母岩である。37～39は接合資料1と，接合資料2・3はそれぞれ同一母岩の可能性はある。

**所見** 時期は，出土石器類と出土層位から後期旧石器時代前葉（武蔵野台地区層段階）に比定できる。接合状況や石質から判断して，拳大の母岩から小形の剥片を抽出するための作業を行った場所であったと考えられる。

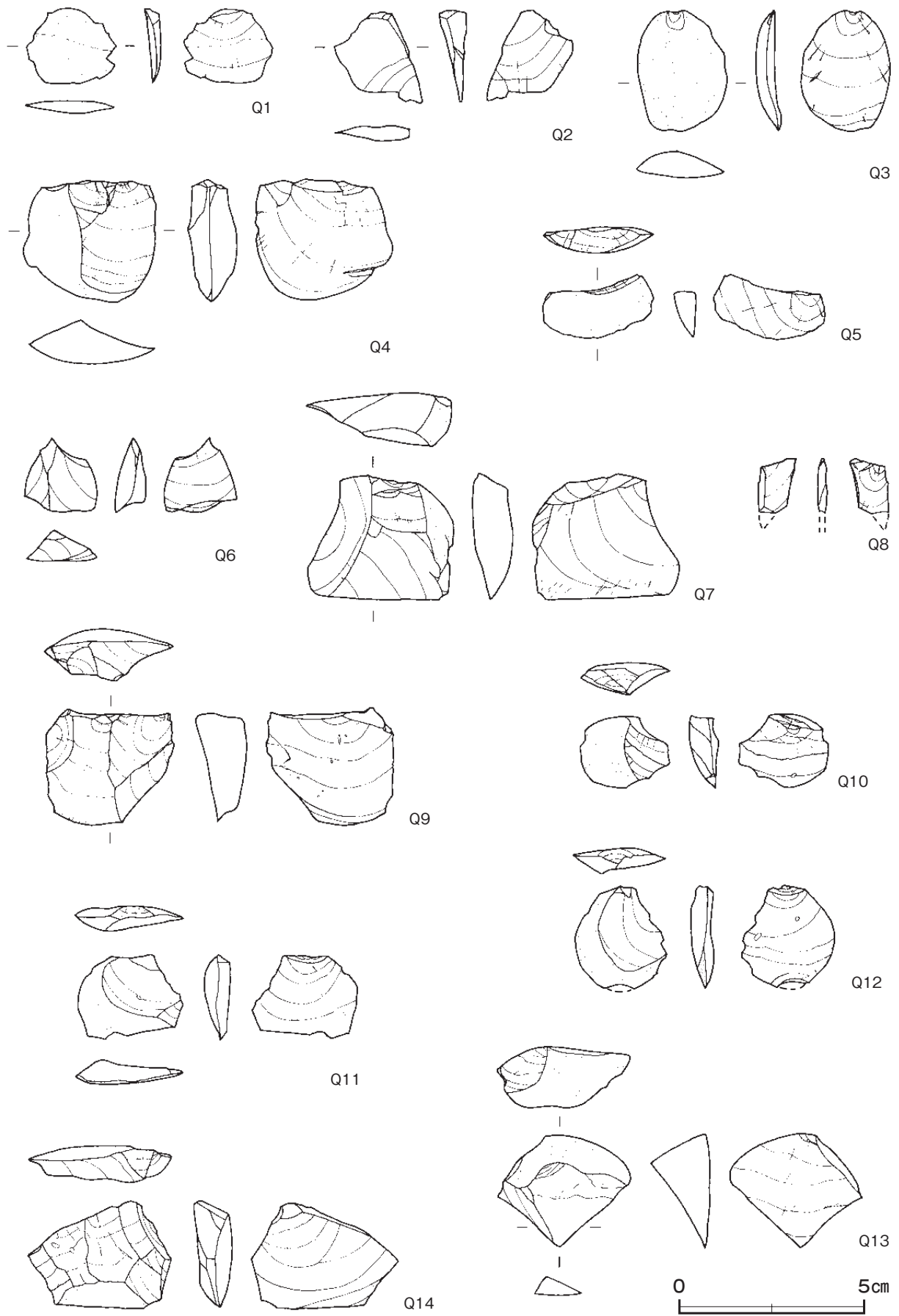


第5図 第1号石器集中地点出土遺物分布図

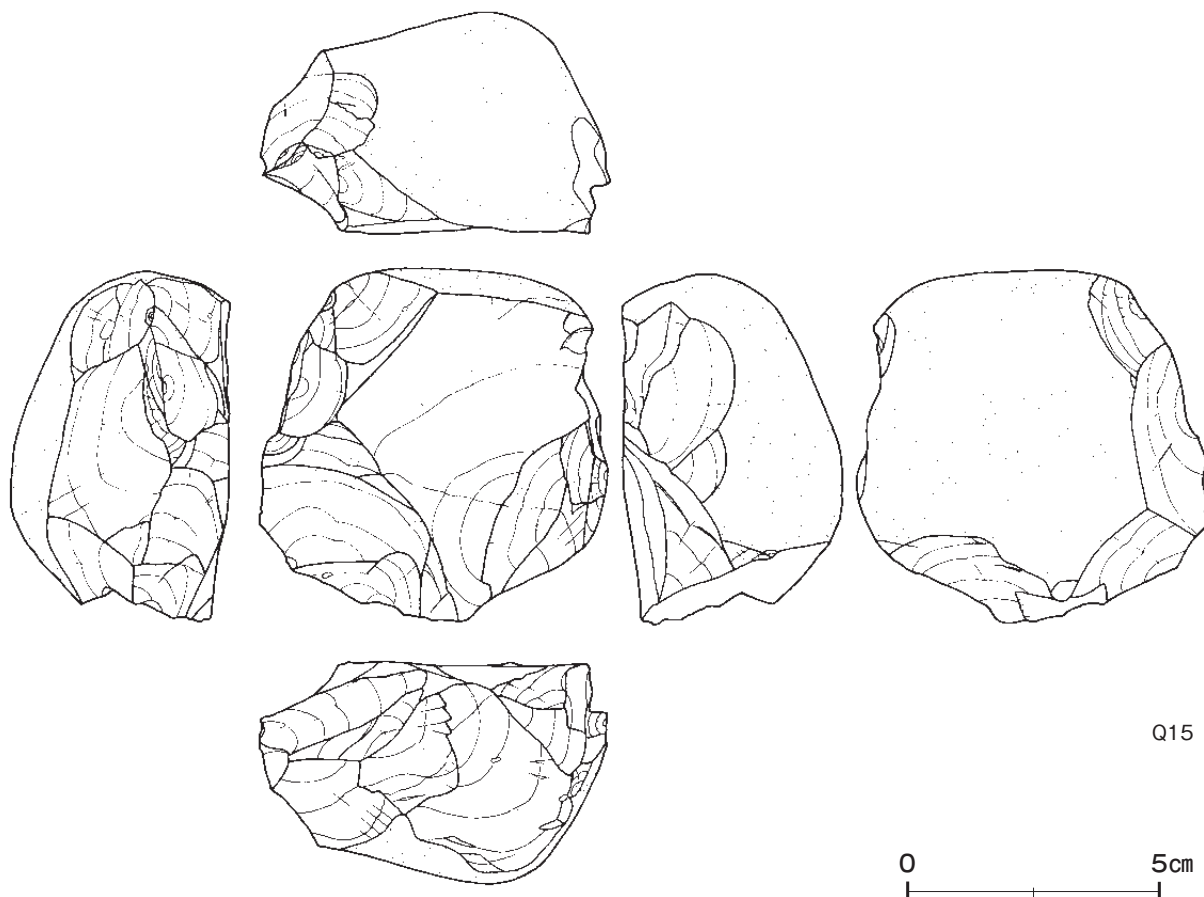


接合資料 1 (珪質頁岩)

第6図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(1)



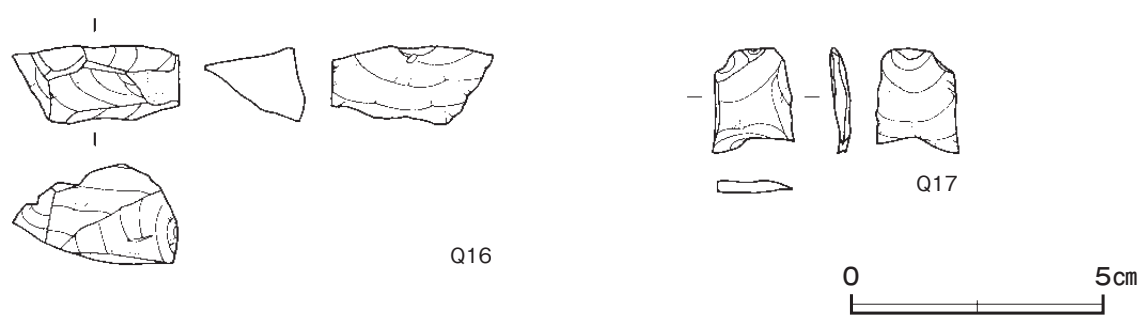
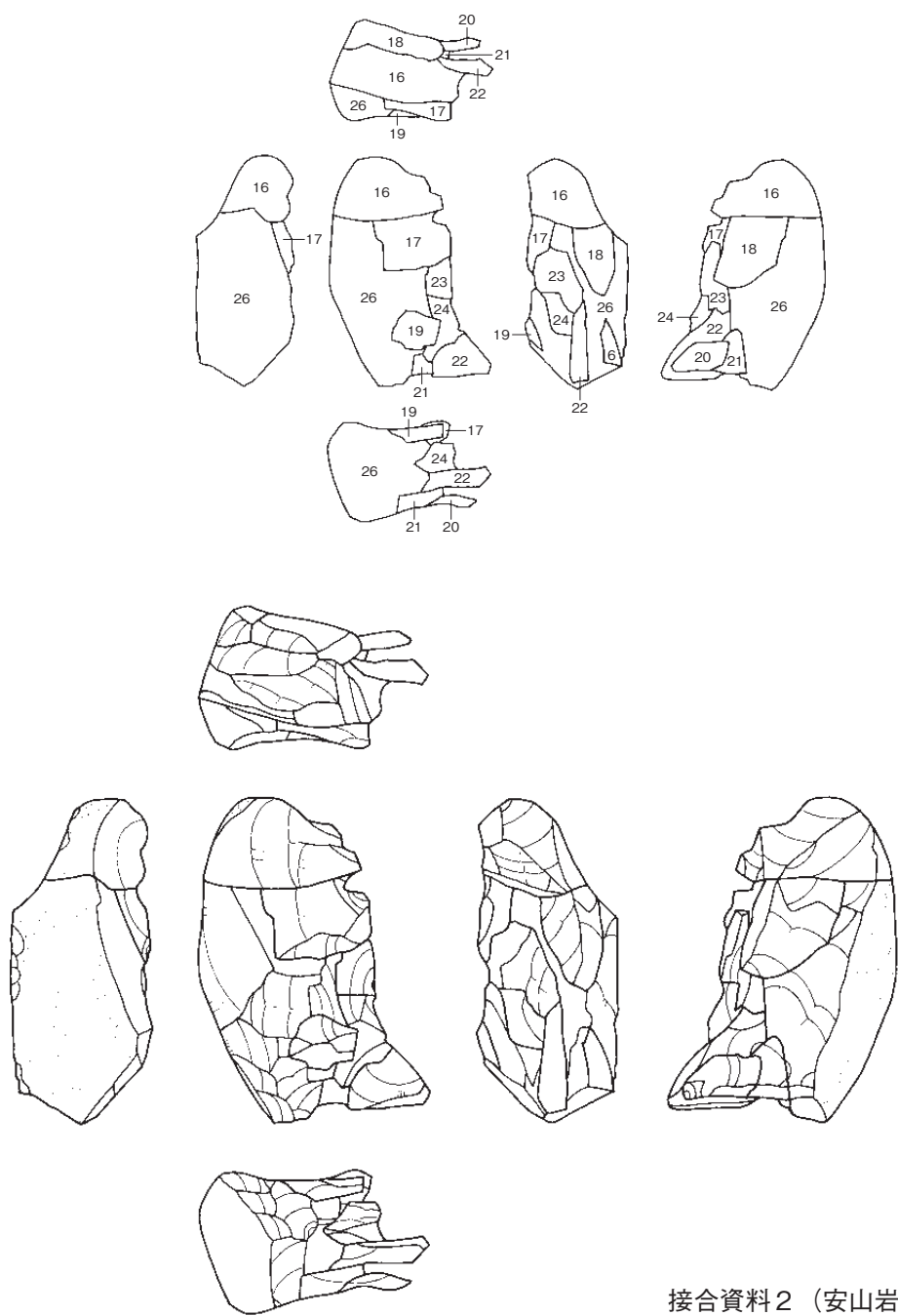
第7图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(2)



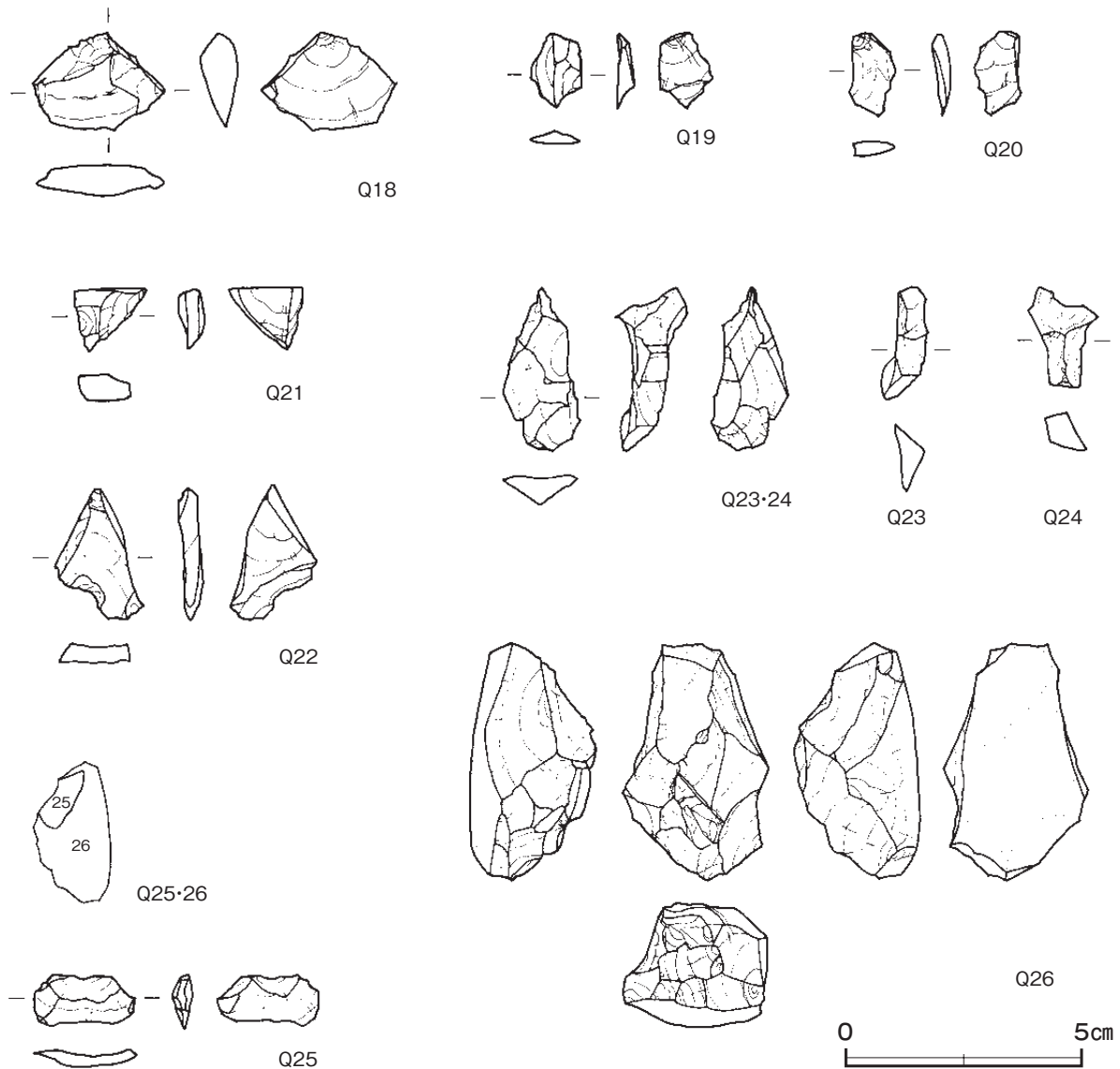
第8図 第1号石器集中地点出土遺物実測図（3）

第1号石器集中地点出土遺物観察表（第6～8図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
01	剥片	2.0	2.4	0.4	1.66	珪質頁岩	背面に自然面残存	E 2 g2	24.286	Q1 PL 8 接合資料1
02	剥片	2.5	2.4	0.7	2.04	珪質頁岩	自然面残存	E 2 g2	24.295	Q2 PL 8 接合資料1
03	剥片	3.3	2.5	0.7	4.31	珪質頁岩	背面に自然面残存	E 2 h2	24.260	Q3 PL 8 接合資料1
04	剥片	3.3	3.7	1.3	11.75	珪質頁岩	背面に自然面残存	E 2 g2	24.258	Q4 PL 8 接合資料1
05	剥片	1.7	3.0	0.7	2.47	珪質頁岩	背面に自然面残存	E 2 h2	24.313	Q5 PL 8 接合資料1
06	剥片	2.0	1.9	0.8	2.14	珪質頁岩	背面に前段階の剥離痕	表土	-	Q6 PL 8 接合資料1
07	剥片	3.4	4.0	1.1	17.15	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.287	Q7 PL 8 接合資料1
08	剥片	(1.5)	1.0	0.3	(0.33)	珪質頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 2 g2	24.276	Q8 PL 8 接合資料1
09	剥片	3.2	3.5	1.4	11.06	珪質頁岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.302	Q9 PL 8 接合資料1
10	剥片	2.0	2.5	0.8	2.93	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.298	Q10 PL 8 接合資料1
11	剥片	2.3	2.9	0.7	3.31	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.254	Q11 PL 8 接合資料1
12	剥片	(2.9)	2.5	0.7	(3.53)	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.270	Q12 PL 8 接合資料1
13	剥片	3.1	3.6	1.6	11.81	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.265	Q13 PL 8 接合資料1
14	剥片	2.9	4.9	1.0	10.21	珪質頁岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.276	Q14 PL 8 接合資料1
15	石核	6.9	6.9	4.4	236.63	珪質頁岩	自然面残存	E 2 h2	24.243	Q15 PL 8 接合資料1



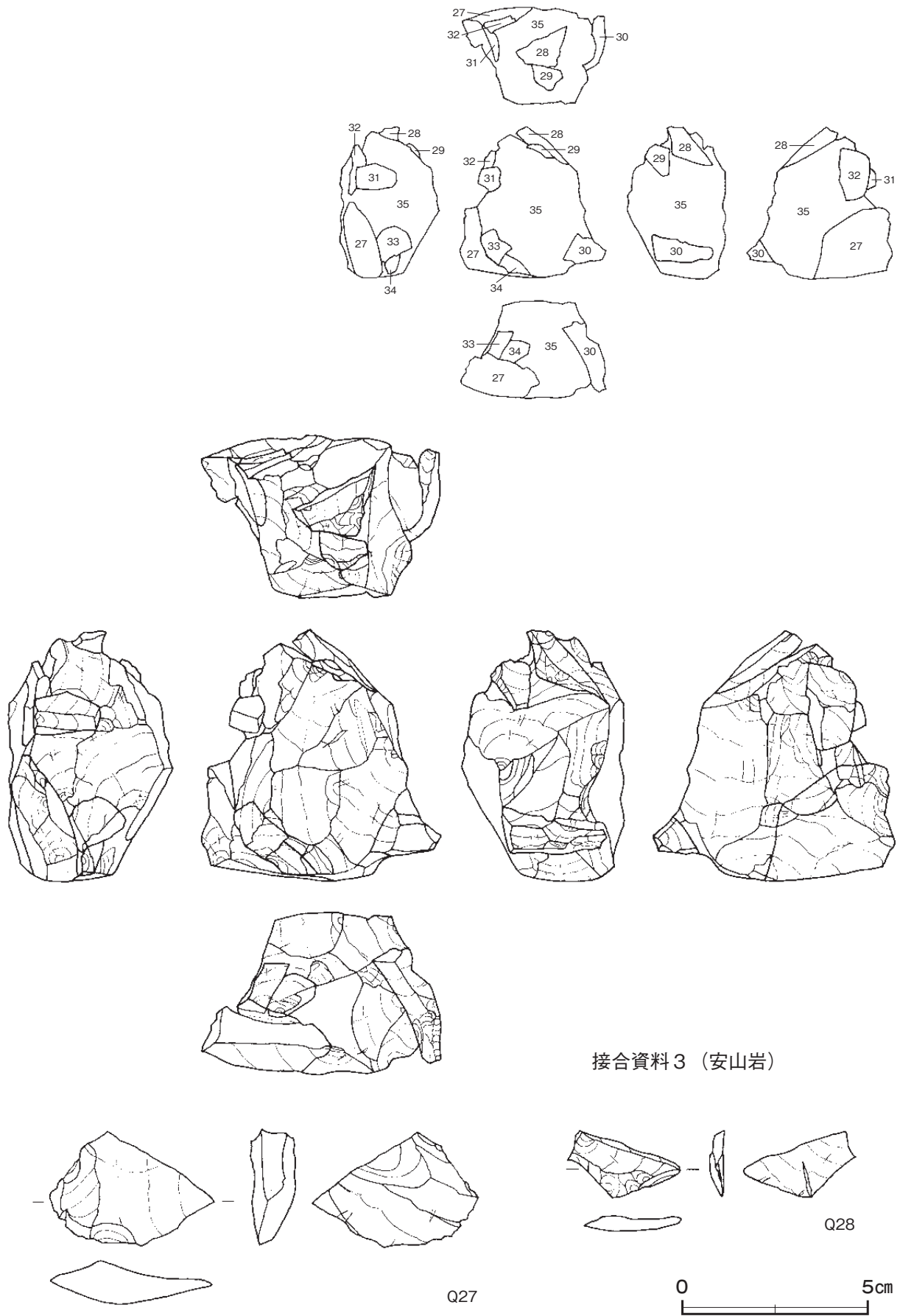
第9図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(4)



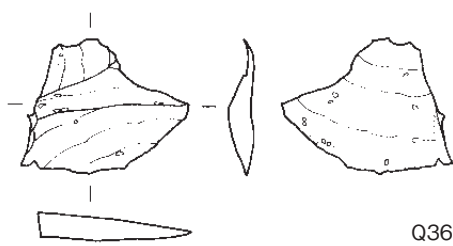
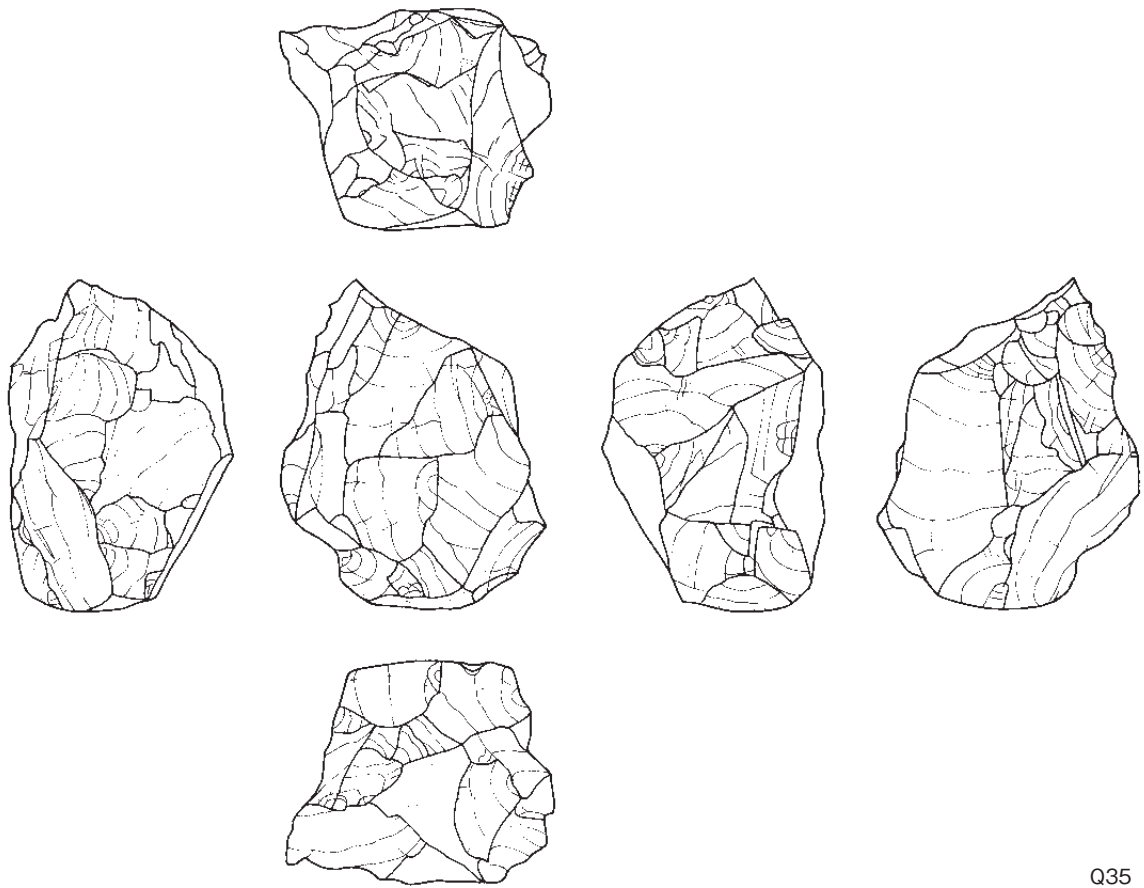
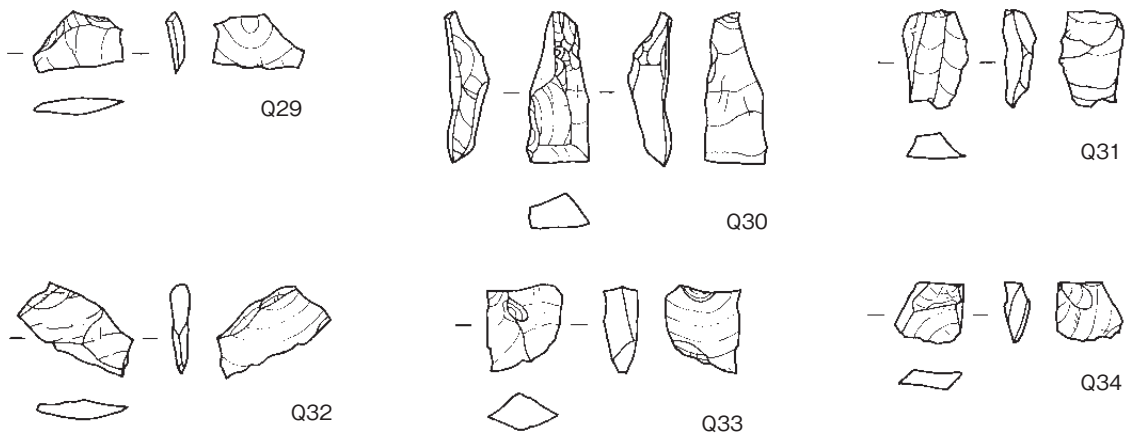
第10図 第1号石器集中地点出土遺物実測図（5）

第1号石器集中地点出土遺物観察表（第9・10図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
16	剥片	1.6	3.2	0.4	9.21	安山岩	自然面残存 背面に前段階の剥離痕 打面作出のための剥離	E 2 g2	24.289	Q 16 PL 9 接合資料 2
17	剥片	2.1	1.6	0.4	1.09	安山岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 h2	24.274	Q 17 PL 9 接合資料 2
18	剥片	2.0	2.7	0.7	3.20	安山岩	背面に風化した前段階の剥離痕	E 2 g2	24.278	Q 18 PL 9 接合資料 2
19	剥片	1.6	1.1	0.4	0.39	安山岩	打面調整のための剥片	E 2 g2	24.248	Q 19 PL 9 接合資料 2
20	剥片	1.8	1.0	0.4	0.43	安山岩	剥離作業時に生じた残骸	E 2 g2	24.311	Q 20 PL 9 接合資料 2
21	剥片	1.3	1.5	0.6	0.94	安山岩	剥離作業時に生じた残骸 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.310	Q 21 PL 9 接合資料 2
22	剥片	2.8	1.9	0.6	1.75	安山岩	剥離作業時に生じた残骸	E 2 g2	24.313	Q 22 PL 9 接合資料 2
23	石核	2.4	1.6	1.0	1.30	安山岩	24と接合した状態の残核が折れて分散	E 2 h2	24.299	Q 23 PL 9 接合資料 2
24	石核	2.1	1.2	1.5	1.18	安山岩	23と接合した状態の残核が折れて分散	E 2 g2	24.292	Q 24 PL 9 接合資料 2
25	剥片	1.1	2.2	0.5	0.59	安山岩	剥離作業時に生じた残骸 背面に前段階の剥離痕	E 2 h2	24.332	Q 25 PL 9 接合資料 2
26	石核	5.0	3.1	2.6	38.92	安山岩	自然面残存	E 2 g2	24.262	Q 26 PL 9 接合資料 2



第11図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(6)



第 12 図 第 1 号石器集中地点出土遺物実測図 (7)



第1号石器集中地点出土遺物観察表（第11・12図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	標高	備考
27	剥片	3.1	4.5	1.2	12.44	安山岩	自然面残存 背面に風化した前段階の剥離痕	E 2 g2	24.336	Q 27 PL 9 接合資料3
28	剥片	1.8	3.1	0.4	1.51	安山岩	細かい剥離痕のある剥片	E 2 h2	24.248	Q 28 PL 9 接合資料3
29	剥片	1.2	1.8	0.5	0.57	安山岩	打面調整のための剥離	E 2 g2	24.309	Q 29 PL 9 接合資料3
30	剥片	3.0	1.3	0.9	2.24	安山岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.259	Q 30 PL 9 接合資料3
31	剥片	1.9	1.3	0.6	1.28	安山岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.295	Q 31 PL 9 接合資料3
32	剥片	1.7	2.2	0.4	1.14	安山岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.278	Q 32 PL 9 接合資料3
33	剥片	1.7	1.6	0.7	1.40	安山岩	背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.267	Q 33 PL 9 接合資料3
34	剥片	1.2	1.3	0.5	0.52	安山岩	剥離作業時に生じた残骸 背面に前段階の剥離痕	E 2 h2	24.250	Q 34 PL 9 接合資料3
35	石核	6.6	5.3	4.4	136.43	安山岩	自然面残存 一部風化した剥離痕	E 2 h2	24.239	Q 35 PL 9 接合資料3
36	剥片	2.7	3.4	0.6	3.19	安山岩	微細剥離痕のある剥片 背面に前段階の剥離痕	E 2 g2	24.258	Q 36 PL 9
37	剥片	(1.6)	1.3	0.3	(0.67)	珩質頁岩	剥離作業時に生じた残骸	E 2 g2	24.303	
38	剥片	(2.0)	[1.7]	0.4	(0.62)	珩質頁岩	被熱しやや赤色化	E 2 g2	24.311	
39	破片	(1.1)	(0.9)	(0.6)	(0.49)	珩質頁岩	剥離作業時に生じた残骸 (打点部)	E 2 g2	24.318	

## 2 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴6基を確認した。以下、遺構について記述する。

### 陥し穴

#### 第1号陥し穴（平成27年度）（第13図）

**位置** 調査区中央部のC 5 a8区、標高24 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号堀に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径2.23 m、短径1.23 mの楕円形で、長径方向はN - 80° - Wである。深さは46cmで、底面は平坦である。短径方向の断面形はV字状で、壁は緩やかに傾斜している。底面で逆茂木の痕と想定されるピット4か所を確認した。

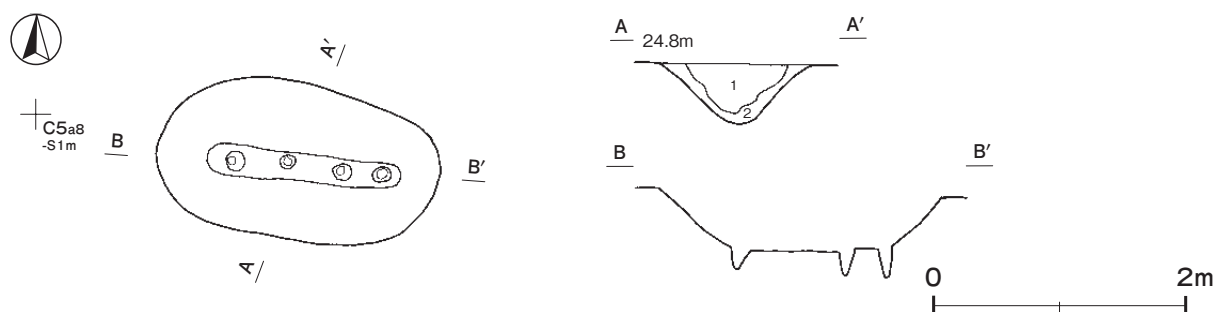
**覆土** 2層に分層できる。第2層はロームブロックを含む壁面の崩落土で、第1層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

#### 土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック中量

**所見** 遺物は出土していないが、時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第13図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴（平成27年度）（第14図）

位置 調査区中央部のB5j9区，標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号堀に掘り込まれている。

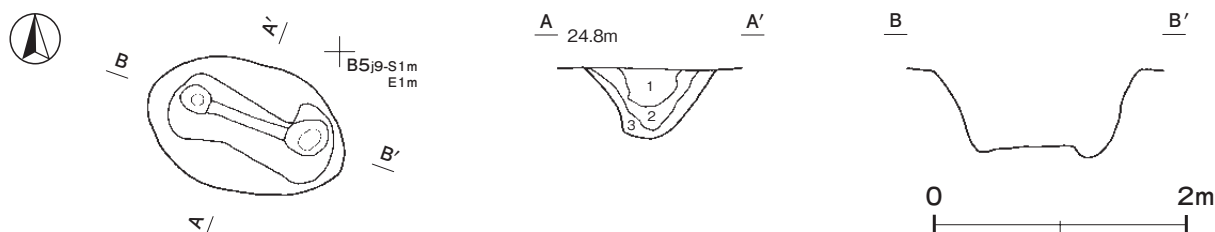
規模と形状 長径1.62m，短径1.04mの楕円形で，長径方向はN-69°-Wである。深さは63cmで，底面は平坦である。短径方向の断面形はV字状で，壁は外傾している。底面で逆茂木の痕と想定されるピット2か所を確認した。

覆土 3層に分層できる。第2・3層はロームブロックを含む壁面の崩落土で，第1層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量   | 3 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

所見 遺物は出土していないが，時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第14図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴（平成27年度）（第15図）

位置 調査区中央部のC5g7区，標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 本跡埋没後に第2号土塁が構築されている。

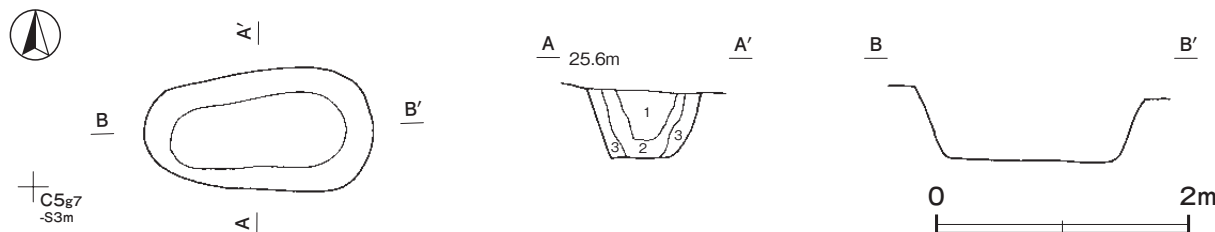
規模と形状 長径1.82m，短径0.96mの楕円形で，長径方向はN-90°である。深さは53cmで，底面は平坦である。断面形は逆台形で，壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。第2・3層はロームブロックを含む壁面の崩落土で，第1層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量   | 3 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

所見 遺物は出土していないが，時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第15図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴（平成27年度）（第16図）

位置 調査区中央部のC5e8区，標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 本跡埋没後に第2号土塁が構築されている。

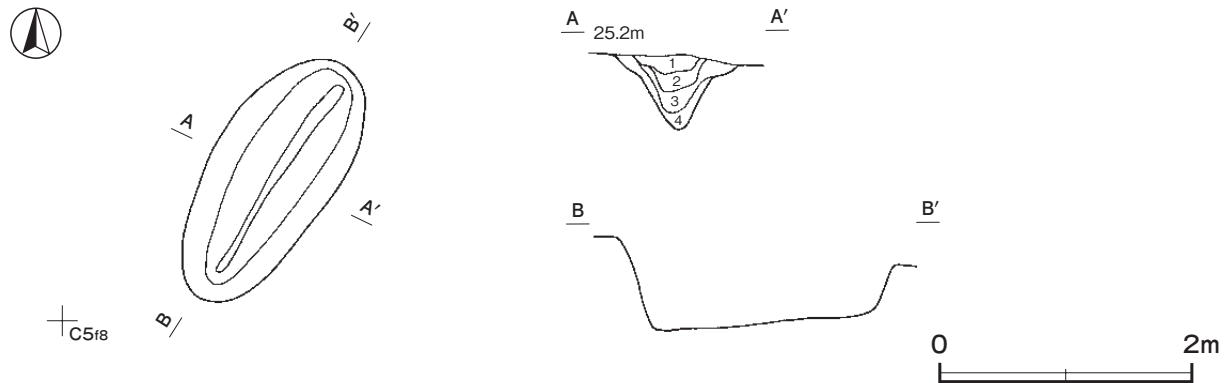
**規模と形状** 長径2.16 m，短径1.00 mの楕円形で，長径方向はN - 32° - Eである。深さは69cmで，底面は平坦である。短径方向の断面形はV字状で，壁は外傾している。

**覆土** 4層に分層できる。第3・4層はロームブロックを含む壁面の崩落土で，第1・2層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

**土層解説**

- |       |         |       |           |
|-------|---------|-------|-----------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量 |

**所見** 遺物は出土していないが，時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第16図 第4号陥し穴実測図

**第5号陥し穴（平成27年度）（第17図）**

**位置** 調査区中央部のC5e7区，標高25 mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1号堀に掘り込まれている。

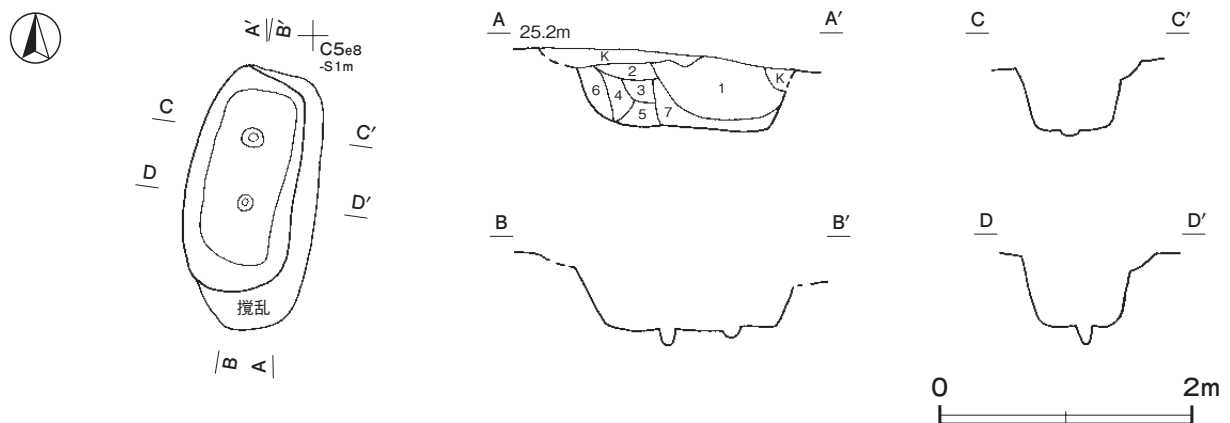
**規模と形状** 長径2.12 m，短径1.07 mの楕円形で，長径方向はN - 7° - Eである。深さは52cmで，底面は平坦である。断面形は逆台形で，壁は外傾している。底面で逆茂木の痕と想定されるピット2か所を確認した。

**覆土** 7層に分層できる。第2～7層は不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第1層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

**土層解説**

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量   | 5 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |       |           |

**所見** 遺物は出土していないが，時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第17図 第5号陥し穴実測図

**第6号陥し穴（平成27年度）（第18図 PL6）**

**位置** 調査区中央部のC5h6区，標高25mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 本跡埋没後に第2号土塁が構築されている。

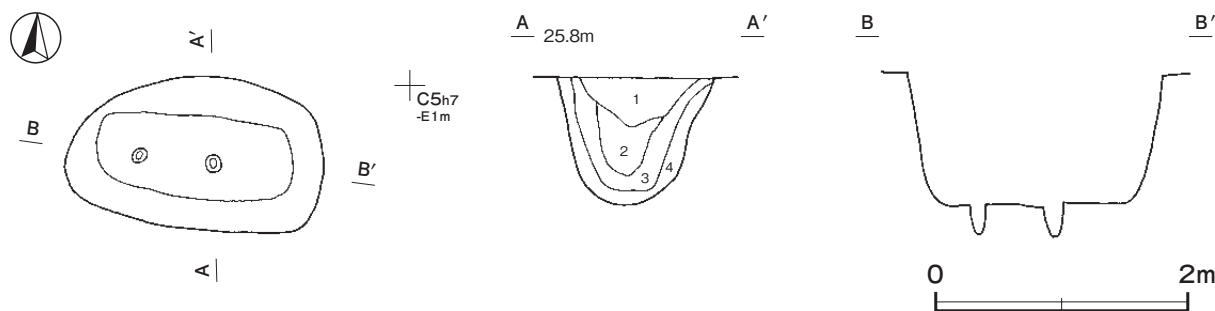
**規模と形状** 長径2.03m，短径1.22mの楕円形で，長径方向はN-84°-Wである。深さは105cmで，底面は平坦である。短径方向の断面形はV字状で，壁はほぼ直立している。底面で逆茂木の痕と想定されるピット2か所を確認した。

**覆土** 4層に分層できる。第4層はロームブロックを含む壁面の崩落土で，第1～3層は周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**所見** 遺物は出土していないが，時期は遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第18図 第6号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C5a8	N-80°-W	楕円形	2.23 × 1.23	46	平坦	V字状	自然		ピット4か所 本跡→SD1
2	B5j9	N-69°-W	楕円形	1.62 × 1.04	63	平坦	V字状	自然		ピット2か所 本跡→SD1
3	C5g7	N-90°	楕円形	1.82 × 0.96	53	平坦	逆台形	自然		本跡→SA2
4	C5e8	N-32°-E	楕円形	2.16 × 1.00	69	平坦	V字状	自然		本跡→SA2
5	C5e7	N-7°-E	楕円形	2.12 × 1.07	52	平坦	逆台形	人為・自然		ピット2か所 本跡→SD1
6	C5h6	N-84°-W	楕円形	2.03 × 1.22	105	平坦	V字状	自然		ピット2か所 本跡→SA2

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，土坑1基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

土坑

**第46号土坑（平成28年度）（第19図 PL6）**

**位置** 調査区西部のF1b6区，標高24mほどの台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長軸1.96m，短軸0.65mの隅丸長方形で，長軸方向はN-7°-Eである。深さは22cmで，底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

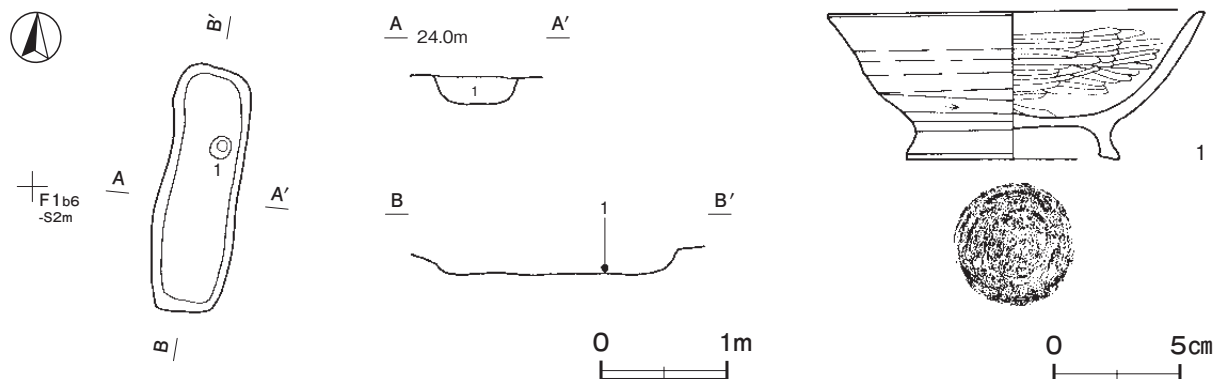
**覆土** 単一層である。ロームブロックが不規則に含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器1点（高台付椀）が、底面に伏せられた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。形状や遺物の出土状況から、墓坑の可能性はある。



第19図 第46号土坑・出土遺物実測図

第46号土坑出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付椀	14.8	5.9	8.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横・斜位のヘラ磨き 底部内面見込み外周に沿って円状の磨き 内面黒色処理	底面	100% PL10

4 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堀跡1条、土塁2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。これらの遺構は江戸時代まで改変され利用され続けているため、遺物については江戸時代のものを含んでいる。

(1) 堀跡

第1号堀跡（平成21・26～28年度）（付図1 第20～22図 PL1～5）

位置 F1f6～A7c9区、標高24mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1・2・5号陥し穴を掘り込み、第2・3・4・8号溝、第2～24・27～33・39～41号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 両端が調査区域外に伸びており、確認できた長さは328.8mである。F1f6区から北東方向（N-51°-E）へわずかに蛇行をしながら直線状に伸びている。規模は、上幅7.9～16.4mで、下幅や深さ、形状は場所によって異なるため、南西部から順に記載していく。F1f6～E2c1区（平成28年度）は、上面が削平されているため、遺構確認面からの深さである。

F1f6区（Aライン）では、深さ1.6m、下幅は1.2m、断面が逆台形状で、壁は外傾している。南西方向は調査区域外に伸びている。

F1e5～F1d8区では、深さ1.0m（Aライン）、下幅約3.0m、断面が逆台形状で壁は緩やかに立ち上がっている。

F1d8～E2g8区（B・Iライン）では、深さ2.0～2.8m、下幅0.9～1.2m、断面が逆台形状で、壁は下部が外傾し上部が緩やかに立ち上がっている。E2j2区とE2h3区の2か所で、底面が約0.4mずつ階段状に高くなっている。E2i3～E2f6区間で形状が徐々に変化し、E2f6区（Jライン）では、断面がV字状で、

壁は緩やかに立ち上がっている。

E 2 g8～D 4 g3区（C・E・Kライン）では、深さ4.8～4.9 m、下幅1.0～1.4 m、断面が逆台形状で、壁面の上部に平坦部を有している。壁は場所によって異なり、下部はほぼ直立し、上部は外傾してから緩やかに立ち上がる場所と、下部は外傾し、上部は緩やかに立ち上がる場所がある。角度に違いはあるが、全体的な形状は大きく変化していない。

D 4 e2～C 5 g5区（F・L・Mライン）では、深さ1.1～2.3 m、下幅4.2～7.0 m、断面が逆台形状で壁は緩やかに立ち上がっている。C 4 h9～C 5 j1区（Lライン）とC 5 g2～C 5 g3区（Mライン）の底面に、深さ40cm程度の長方形の掘り込みがある。規模はそれぞれ長軸9.6 m、短軸4.8 mと、長軸8.0 m、短軸5.1 mである。

C 5 g5～C 5 d9区（N・Oライン）では、深さ5.0～5.5 m、下幅0.4 mである。断面がV字状で、南東側壁面の中央に平坦部を有している。壁は下部が細かな凹凸を持ちながら外傾し、上部が緩やかに立ち上がっている。C 5 e5区の底面は障壁で、2区画に分かれた障子堀になっている。

C 5 d9～C 6 a2区では、深さ1.2 m、下幅3.8 m、断面が逆台形状で壁は緩やかに立ち上がっている。

C 6 a2～B 6 h5区（Gライン）では、深さ3.8 m、下幅0.3 m、断面がV字状で南東側壁面の中央に平坦部を有している。壁は北側下部がほぼ直立し、南側下部が外傾し、上部が緩やかに立ち上がっている。

B 6 h5～A 7 c9区（H・P・Qライン）では、深さ1.8～2.8 m、下幅1.1～2.7 m、断面が逆台形状で壁は緩やかに立ち上がっている。B 6 b0区で段差を有し、約0.5 m低くなっている。A 7 c9区の調査区域北東側の土層（Hライン）で、底面から深さ0.3 m、幅1.1 mの掘り込みを確認した。

**覆土と構造** 本跡は、長期間改変を繰り返しながら利用されていたことが確認できる。土層の堆積状況は大略は類似する点が多いが、各層位の対応関係をすべて明確にすることはできないため、A～G各土層の堆積状況と本跡の構造を記載する。

Aラインは17層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第12～17層で、北側から土が投げ込まれて埋め戻されている。第2段階は第6～11層で、第8～11層が埋め戻されたのち、第6・7層が自然堆積している。前段階の埋め戻し後に掘り直した痕跡が見られる。第3段階は第1～5層で、自然堆積である。前段階との間に不整合面が確認でき、この段階で一度堀底を整地したことが考えられる。

Bラインは19層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第11～19層で、粘土ブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。第2段階は第6～10層で、ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。前段階とは混入物からみる堆積の様相が一変することから、別の時期の埋め戻しと判断した。この段階の埋め戻し時に地山を掘り込み、第5層下を平坦にして堀幅を広げていると考えられる。第3段階は第1～5層で、第5層が埋め戻されたのち、第3・4層が自然堆積し、さらに第1・2層が埋め戻されている。

Cラインは25層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第14～25層で、粘土ブロックや砂質土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。第14層は南側から土が投げ込まれており、前後の層と不整合で層厚も異なるため、堆積段階が異なる可能性がある。第2段階は第10～13層で、南側から土が投げ込まれて埋め戻されている。この段階の埋め戻し時に、地山を掘り込み第7～9層下を階段状にして堀幅を広げていると考えられる。第8・9層がその後の段階の拡張である可能性があるが、第3段階の堆積が全て自然堆積であるため同じ時期の拡張と判断した。第3段階は第2～9層で、土砂が周囲から流れ込んだ自然堆積である。

Eラインは31層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第27～31層で、粘土ブロックが多く含まれ

ていることから埋め戻されており、第28～31層は水中で堆積している。第2段階は第9～26層で、第19～25層が自然堆積したのち、第9～17層が主に南側から土が投げ込まれ埋め戻されている。前段階との境に、堀底を整地した痕跡が確認でき、第26層はその際の掘方である。この段階の埋め戻し時に、地山を掘り込み第1・2・7層下を階段状にして堀幅を広げていると考えられる。第3段階は第1～7層で、土砂が周囲から流れ込んだ自然堆積である。第8層はロームブロックが含まれる埋め戻しの層で、この層下にも堀幅を広げた痕跡がみられるが、どの段階に含まれるか明確にできなかった。

Fラインは11層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第7～11層で、土砂が周囲から流れ込んだ自然堆積である。第11層は、本跡より古い別遺構の可能性もある。この段階の後に地山を掘り込み、第6層下を平坦にして堀幅を広げている。第2段階は第6層で、自然堆積である。第3段階は第1～5層で、第2～5層が自然堆積したのち第1層が埋め戻されている。3段階の大別ができるが、総じて黒褐色・暗褐色土が主体であり、堆積の様相は他の場所の最終段階と類似する。

Gラインは23層に分層でき3段階に大別できる。第1段階は第16～23層で、南側から土が投げ込まれて埋め戻されている。この段階の埋め戻し時に堀幅を広げている可能性がある。第2段階は第9～15層で、第13～15層が自然堆積したのち、第9～12層が北側から土が投げ込まれて埋め戻されている。第3段階は第1～8層で、第7・8層が自然堆積したのち第1～6層が埋め戻されている。

Hラインは13層に分層でき2段階に大別できる。第1段階は第7～13層で、北側から土が投げ込まれて埋め戻されている。この段階の後に地山を掘り込み、第6層下を平坦にして堀幅を広げている。第2段階は第1～6層で、第5・6層が自然堆積したのち第1～4層が埋め戻されている。

全体を通して、2段階から3段階の変遷が確認できる。深い場所は部分的に崩落土による埋没の可能性があるが、全体的な傾向として、埋め戻しながら拡幅を行うことを繰り返している。調査区域の東西端では、拡幅だけではなく軸の移動を行っていることが確認できる。

#### 土層解説 (Aライン)

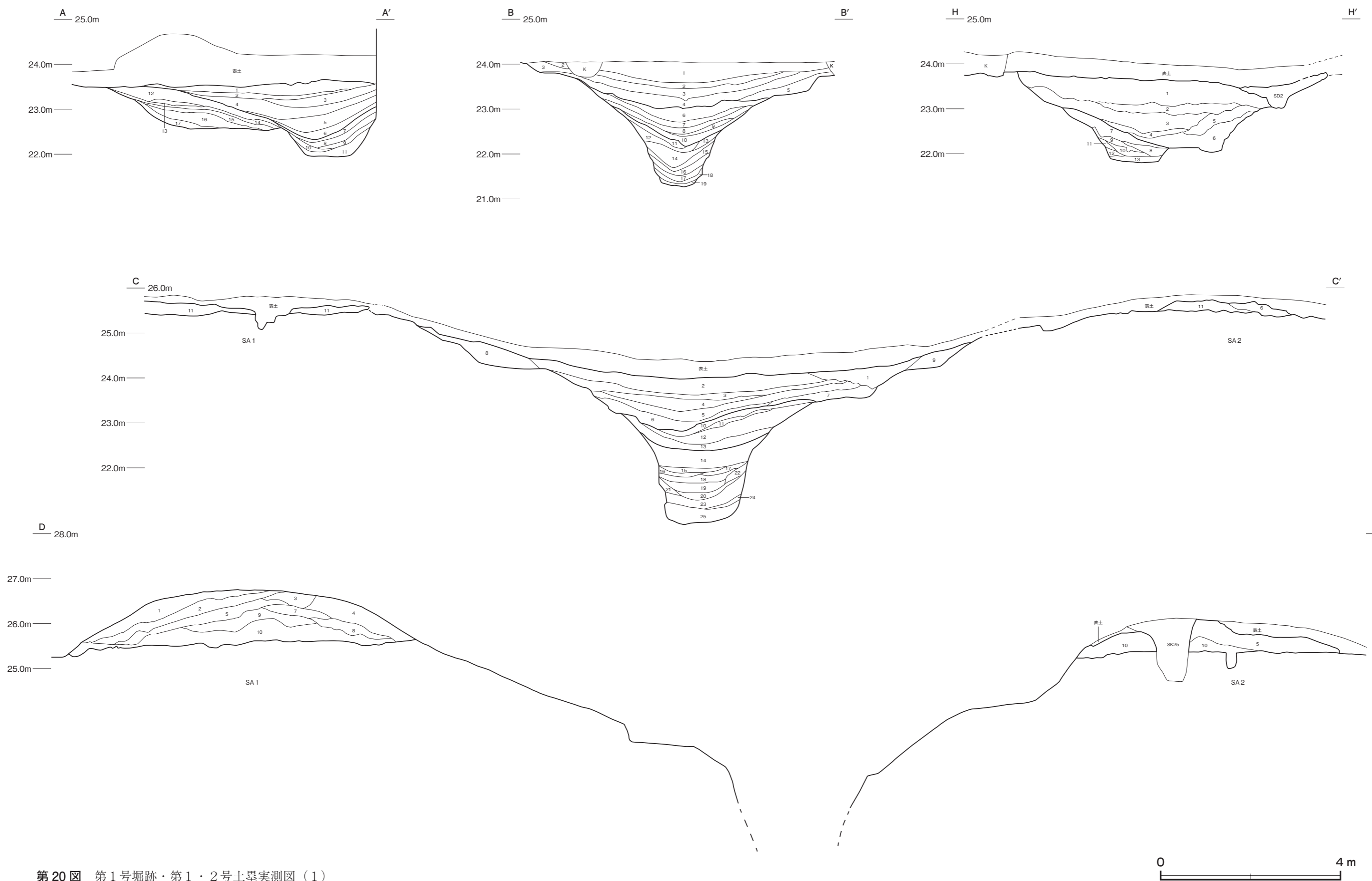
1 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	粘土ブロック中量, ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	11 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
3 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	12 褐色	粘土ブロック多量
4 暗褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック・炭化物微量	13 暗褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック微量
5 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	14 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
6 極暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量	15 黒褐色	粘土ブロック多量
7 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量	16 黒褐色	粘土ブロック少量, ローム粒子微量
8 褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量	17 褐色	粘土ブロック多量, 黒色粒子少量
9 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量		

#### 土層解説 (Bライン)

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	10 褐色	粘土ブロック中量, 黄褐色砂少量, 黒色粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量	11 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
3 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	12 灰黄褐色	粘土ブロック中量
4 暗褐色	ローム粒子少量	13 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量, 黒色粒子少量
5 にぶい黄褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック微量	14 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量, 黒色粒子少量
6 灰黄褐色	粘土ブロック中量, ローム粒子少量	15 褐色	粘土ブロック少量
7 暗褐色	粘土ブロック中量, ローム粒子少量	16 褐色	粘土ブロック・黄褐色砂中量
8 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	17 黄褐色	粘土ブロック多量, 黄褐色砂少量
9 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量, 黒色粒子微量	18 明黄褐色	粘土ブロック多量, 黄褐色砂少量
		19 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量, 黄褐色砂少量

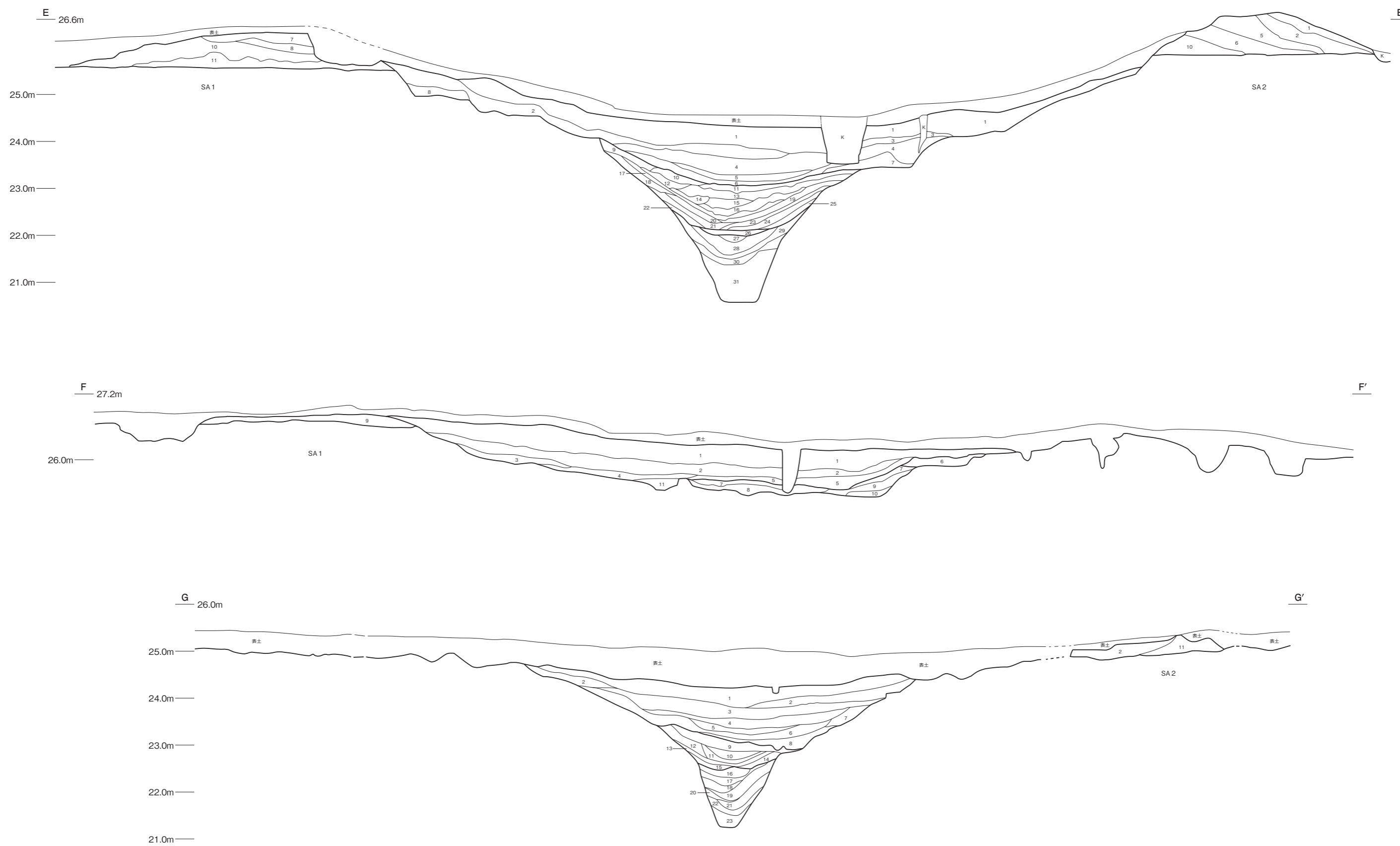
#### 土層解説 (Cライン)

1 暗褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック微量	8 褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ロームブロック微量	9 暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム・粘土粒子微量	10 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
4 黒褐色	ローム粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子中量, 黒色粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子微量	12 褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量	13 褐色	粘土ブロック中量, ローム粒子少量, 黒色粒子微量
7 褐色	ローム粒子少量, 黒色粒子微量	14 褐色	粘土ブロック多量, 粘土ブロック少量



第20図 第1号堀跡・第1・2号土墨実測図(1)





第21図 第1号堀跡・第1・2号土墨実測図(2)



15	にぶい褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・黒色粒子微量	21	褐色	砂質粘土多量, 粘土ブロック・酸化鉄微量
16	にぶい褐色	粘土ブロック中量	22	にぶい黄褐色	粘土ブロック・砂質土ブロック中量
17	褐色	粘土ブロック少量	23	にぶい黄褐色	砂質土ブロック中量
18	明褐色	砂質土中量, 粘土ブロック少量	24	灰褐色	砂多量
19	にぶい褐色	砂質土中量, 粘土ブロック少量	25	にぶい黄褐色	粘土ブロック・砂質土ブロック中量
20	にぶい褐色	粘土ブロック・砂質土ブロック中量			

土層解説 (Eライン)

1	黒褐色	ロームブロック・砂少量	17	黒褐色	粘土ブロック少量
2	黒色	ロームブロック少量	18	にぶい黄褐色	黄褐色砂微量
3	暗褐色	ロームブロック少量	19	にぶい黄褐色	黄褐色砂少量
4	黒褐色	ロームブロック少量	20	にぶい黄褐色	灰黄色シルトブロック少量
5	黒色	ローム粒子少量	21	にぶい黄褐色	黄褐色シルトブロック少量
6	黒褐色	ローム粒子少量	22	にぶい黄褐色	黄褐色シルトブロック中量
7	黒褐色	ローム粒子中量	23	にぶい黄褐色	灰黄色粘土ブロック少量
8	暗褐色	ローム粒子中量	24	にぶい黄褐色	黄褐色粘土ブロック少量
9	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	25	にぶい黄褐色	灰黄色粘土ブロック中量
10	暗褐色	粘土ブロック中量, ロームブロック少量	26	灰黄色	灰黄色粘土ブロック多量
11	黒褐色	粘土ブロック多量, ローム粒子少量	27	黄褐色	粘土ブロック中量
12	黒褐色	粘土ブロック多量, ロームブロック少量	28	暗褐色	粘土ブロック多量
13	暗褐色	粘土ブロック中量	29	黄褐色	粘土ブロック多量
14	黒褐色	粘土ブロック多量	30	灰黄色	粘土ブロック多量
15	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	31	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
16	暗褐色	粘土ブロック少量			

土層解説 (Fライン)

1	黒褐色	ロームブロック中量	7	黒褐色	ロームブロック微量
2	黒褐色	ロームブロック少量	8	暗褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック少量	9	暗褐色	ローム粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子少量	10	黒褐色	ローム粒子中量
5	暗褐色	ローム粒子少量	11	黒褐色	ローム粒子微量
6	黒色	ローム粒子微量			

土層解説 (Gライン)

1	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒褐色	粘土ブロック多量
2	黒褐色	粘土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量	13	黒色	ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子微量	14	黒褐色	粘土ブロック中量, ローム粒子少量
4	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子微量	15	灰黄褐色	粘土ブロック少量
5	極暗褐色	ローム粒子少量	16	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
6	極暗褐色	粘土ブロック少量, 炭化粒子微量	17	明黄褐色	粘土ブロック多量
7	黒褐色	粘土ブロック微量	18	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量
8	黒褐色	粘土ブロック少量	19	暗灰色	粘土ブロック少量
9	黒褐色	粘土ブロック中量	20	にぶい赤褐色	粘土ブロック中量, 灰褐色砂少量
10	黒色	粘土ブロック中量	21	暗青灰色	粘土ブロック少量
11	黒褐色	粘土ブロック中量, 黒色粒子微量	22	灰褐色	粘土ブロック・灰褐色砂中量
			23	明褐色	黄褐色砂多量

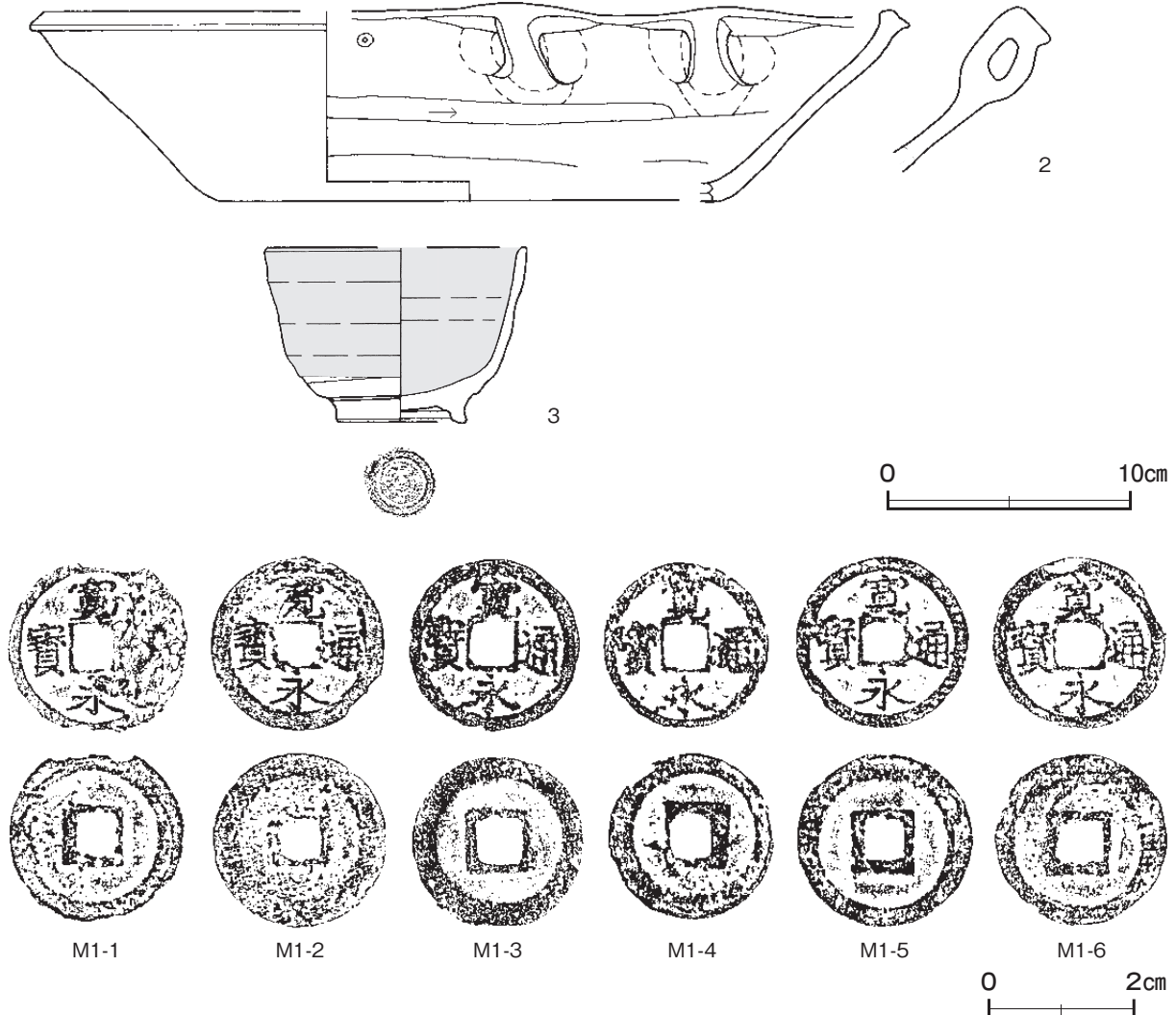
土層解説 (Hライン)

1	黒褐色	ロームブロック微量	8	黒褐色	ロームブロック・砂少量
2	黒褐色	ローム粒子少量	9	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック・砂少量	10	黒褐色	粘土ブロック少量
4	褐色	ロームブロック多量	11	暗褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
5	黒褐色	砂少量, ローム粒子微量	12	にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
6	黒褐色	ロームブロック少量	13	褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
7	黒褐色	ローム粒子・砂少量			

**遺物出土状況** 土師質土器片 9点 (焙烙7, 甕2), 瓦質土器片 1点 (甕), 陶器 1点 (丸碗), 金属製品 3点 (鉄鍋<sub>カ</sub>), 銭貨 6点 (寛永通寶), 人骨片 (149.5g) のほか, 縄文土器片 1点 (深鉢), 土師器片 1点 (坏), 須恵器片 3点 (甕), 石製品 1点 (硯), 瓦片 1点, 鉄滓 2点 が出土している。遺物は全て近世のもので, 中世のものは出土していない。2は北東部の底面から, 3・M1はC4h9～C5j1区の方形の掘り込み底面から近接して出土している。M1は六道銭で, 6枚が癒着し, 紐が付いた状態で出土した。出土地点が墓坑の底面と考えられる。また, C5g2～C5g3区の方形の掘り込み壁面から, 人骨片が出土している。墓坑が存在した可能性があり, 出土地点のみ図面上に記載した。

**所見** 本跡の構築時期は遺物からは判断できないが, 一番古い段階に大型の薬研堀の形状がみられることか

ら、16世紀代と考えられる。その後、深い掘り込み部分を埋め戻しながら拡幅や改変を行い、17世紀前半までは機能していたものと考えられる。調査区域中央部の掘り込みが比較的浅い範囲（D4e1～C5f4区）では、長方形の掘り込みが存在し、その範囲内から人骨片や六道銭が出土している。また、墓坑の可能性をもつ第27号土坑と近接しており、17世紀代に入ってからには墓域として利用されたと考えられる。



第22図 第1号堀跡出土遺物実測図

第1号堀跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師質土器	焙烙	[35.0]	(6.6)	[20.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内耳2か所遺存 内面ナア 外面煤付着	底面	15% PL10

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
3	陶器	丸碗	[10.6]	7.2	5.2	緻密・にぶい赤褐色/黒	高台部露胎	鉄釉	瀬戸	底面	70% PL10 連房期

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1-1	銭貨	寛永口寶	2.44	0.53	(2.76)	銅	1636年	古寛永 背無銭 表面に紐付着	底面	PL11 六道銭
M1-2	銭貨	寛永通寶	2.44	0.55	3.13	銅	1636年	古寛永 背無銭	底面	PL11 六道銭
M1-3	銭貨	寛永通寶	2.42	0.58	2.87	銅	1636年	古寛永 背無銭	底面	PL11 六道銭
M1-4	銭貨	寛永通寶	2.32	0.55	2.15	銅	1636年	古寛永 背無銭	底面	PL11 六道銭
M1-5	銭貨	寛永通寶	2.42	0.54	2.91	銅	1636年	古寛永 背無銭	底面	PL11 六道銭
M1-6	銭貨	寛永通寶	2.47	0.58	2.76	銅	1636年	古寛永 背無銭	底面	PL11 六道銭

## (2) 土 罫

**第1号土罫（平成21・26・27年度）**（付図1 第20・21図 PL5）

**位置** E2e5～B5g0区，標高24mほどの平坦な台地上に位置している。第1号堀跡に沿って，北西側に構築されている。

**重複関係** 第26号土坑の埋没後に構築され，第4号溝，第25・42・43号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 後世の耕作等で削平されており，確認できた長さは175.6mである。E2e5区から北東方向（N-56°-E）へ直線状に延びている。規模は，上幅2.0～3.9m，下幅6.9～8.5m，高さ0.2～1.2mである。盛土が残存している範囲内では，第1号堀跡中央部の脇は低くなっている。形状は残存状態が良好な部分から，蒲鉾状の半楕円形と推測される。基本土層第2層の黒褐色土層をある程度平坦に整地し，盛土を行っている。

**覆土** 11層に分層できる。第1～5層は粘土やシルト主体で，第6～11層はローム主体の構築土である。ローム主体層が内側に，粘土・シルト主体層が外側に盛られている。

**土層解説（C～GラインSA1・2共通）**

1 におい黄褐色	黄褐色シルトブロック多量	7 褐色	ロームブロック中量，粘土ブロック少量
2 明黄褐色	粘土ブロック多量	8 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
3 におい黄褐色	黄褐色シルトブロック少量	9 褐色	ロームブロック多量，粘土ブロック少量
4 におい黄褐色	粘土ブロック少量	10 褐色	ロームブロック多量，粘土ブロック微量
5 灰白色	粘土ブロック多量	11 暗褐色	ロームブロック中量
6 明黄褐色	粘土ブロック多量，ローム粒子少量		

**遺物出土状況** 土罫の構築土層および流出土から，縄文土器片26点（深鉢），須恵器片3点（鉢1，甕2），土師質土器片19点（小皿5，甕14），磁器片1点（碗），漆器片1点（椀），石器1点（敲石），剥片1点が出土している。土罫の構築時期を示す遺物は出土していない。

**所見** 第1号堀跡に伴う土罫であり，構築時期は16世紀代と考えられる。残存状態が良好な場所は，第1号堀跡の深掘り部分に隣接している傾向がある。また，基本土層の下層位に位置するものが構築土層の上層位に主体土となってみえる堆積状況から，第1号堀跡の掘削土をそのまま隣接した場所に盛土したものと考えられる。

**第2号土罫（平成21・26・27年度）**（付図1 第20・21図）

**位置** E2h8～D4e7区・C5j4～B6i5区，標高24mほどの平坦な台地上に位置している。第1号堀跡に沿って，南東側に構築されている。

**重複関係** 第3・4・6号陥し穴埋没後に構築し，第1号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 後世の耕作等で削平されており，確認できた長さは南西部が94.2m，北東部65.8mである。E2h8区から北東方向（N-54°-E）へ直線状に延びている。規模は，上幅1.6～3.6m，下幅4.6～7.3m，高さ0.3～1.4mである。D4e7～C5j4区の第1号堀跡中央部の脇では残存していない。形状は残存状態が良好な部分から，蒲鉾状の半楕円形と推測される。基本土層第2層の黒褐色土層をある程度平坦に整地し，盛土を行っている。

**遺物出土状況** 土罫の構築土層および流出土から，縄文土器片11点（深鉢），須恵器片4点（甕），土師質土器片10点（小皿2，焙烙2，甕6），陶器片2点（碗，蓋），磁器片1点（碗），瓦片3点が出土している。土罫の構築時期を示す遺物は出土していない。

**所見** 第1号土罫同様，構築時期は16世紀代と考えられ，第1号堀跡の掘削土をそのまま隣接した場所に盛土していったものと考えられる。

5 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

土坑

第27号土坑（平成27年度）（第23図 PL6・7）

**位置** 調査区中央部のC5g3区、第1号堀跡底面の標高24mほどに位置している。

**重複関係** 第1号堀跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 径0.77mほどの円形である。深さは12cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

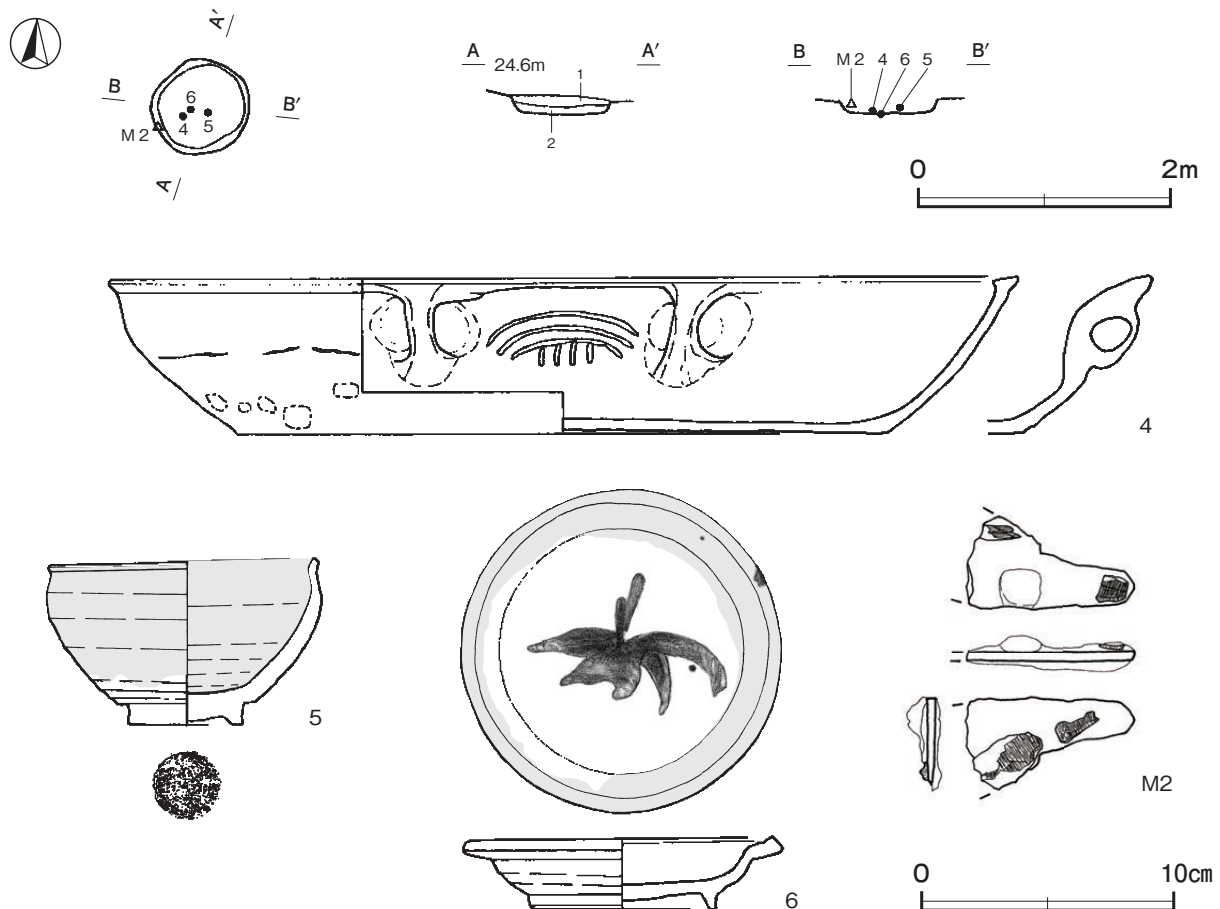
**覆土** 2層に分層できる。焼土粒子やロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量      2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師質土器1点（焙烙）、陶器2点（天目茶碗、折縁鉄絵皿）、金属製品1点（包丁<sub>ナ</sub>）、銭貨1点（寛永通寶<sub>ナ</sub>）が出土している。6は底面から、4・5・M2は、下層から出土している。6が底面に伏られた状態で埋め戻しが行われ、その過程で4・5・M2が投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から17世紀前半に比定できる。遺構の確認状況から、堀跡の埋没初期段階に掘り込まれたと考えられる。出土遺物や土層の堆積状況から明確にはできないが、遺構の形状及び周辺から人骨片や六道銭が出土していることから墓坑の可能性はある。



第23図 第27号土坑・出土遺物実測図

第 27 号土坑出土遺物観察表 (第 23 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師質土器	焙烙	35.8	6.2	25.7	長石・石英・雲母	明褐	普通	口縁部外・内面横ナデ。体部外面下部指頭押圧後、下端横ナデ。体部内面3か所耳部貼付後横ナデ。隣接する耳部間に弧状および縦の沈線	下層	95% PL10 煤付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
5	陶器	天目茶碗	10.4	6.6	4.4	緻密・灰白/黒褐	削り出し輪高台 高台周辺露胎	鉄釉	瀬戸・美濃	下層	95% PL10
6	陶器	折縁鉄絵皿	11.8	2.8	3.6	緻密・黄橙/淡黄	見込み鉄絵花紋	口縁部銅緑釉	瀬戸・美濃	底面	100% PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	包丁	(6.7)	(3.7)	0.3	(16.23)	鉄	木質付着	下層	PL11

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明確にできなかった土坑 46 基、溝跡 7 条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑 (第 24 ~ 27 図)

土坑の規模や形状等について、実測図、土層解説と一覧表を掲載する。

第 1 号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 粘土ブロック・細礫微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック少量、細礫微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 粘土ブロック多量

第 2 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第 3 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第 4 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第 5 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第 6 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第 7 号土坑土層解説

- 1 褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 8 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第 9 号土坑土層解説

- 1 褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 10 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第 11 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 12 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 13 号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第 14 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第 15 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第 16 号土坑土層解説

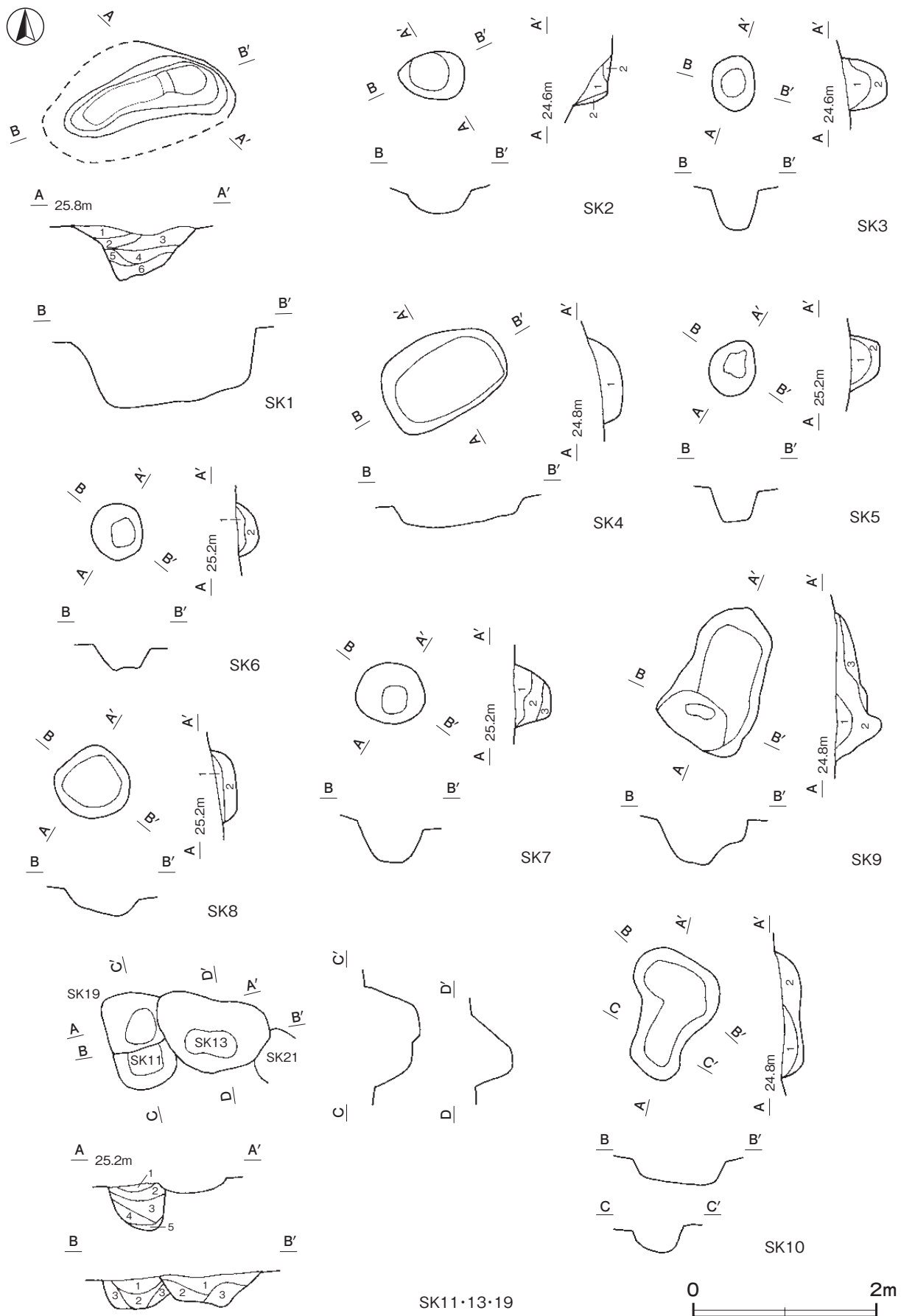
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第 17 号土坑土層解説

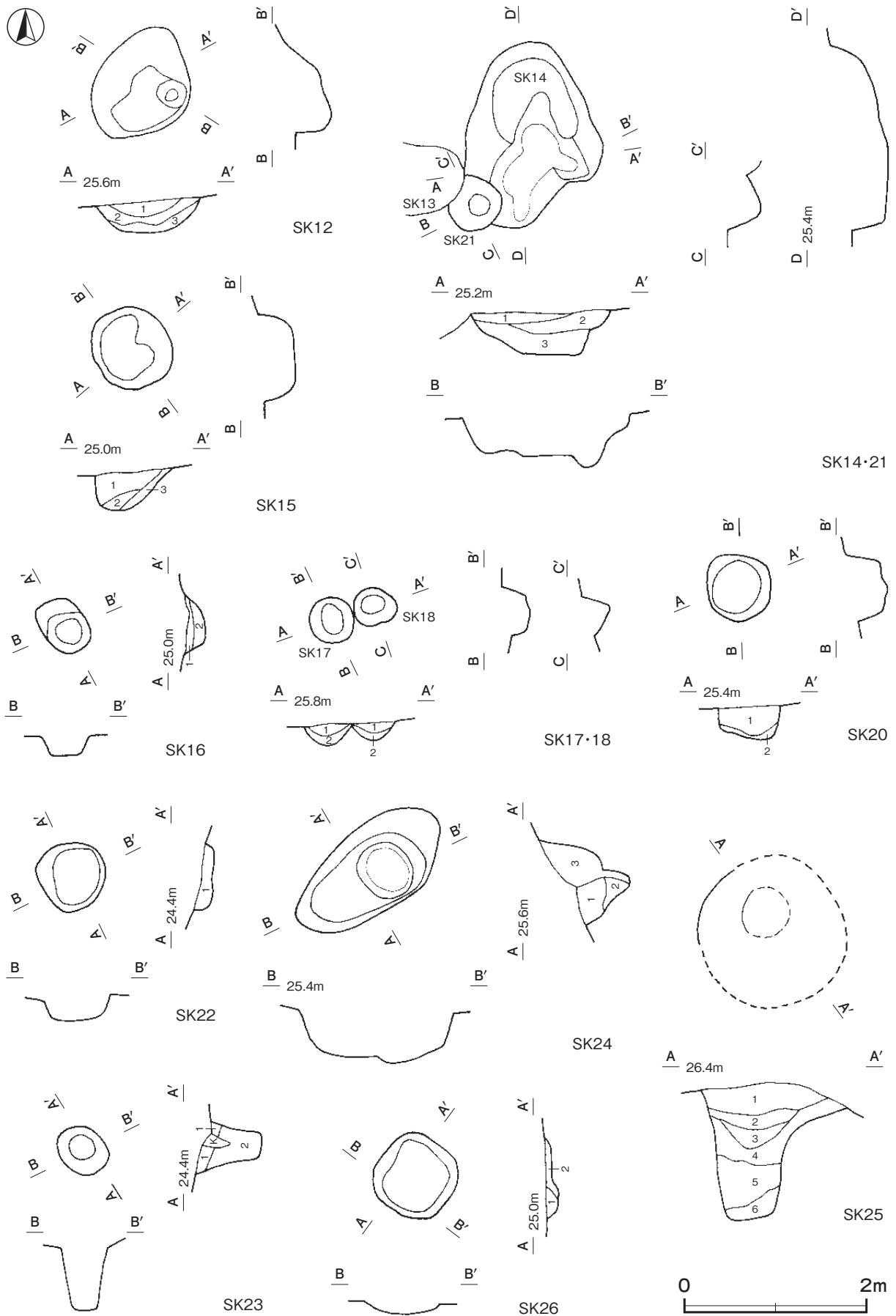
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第 18 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

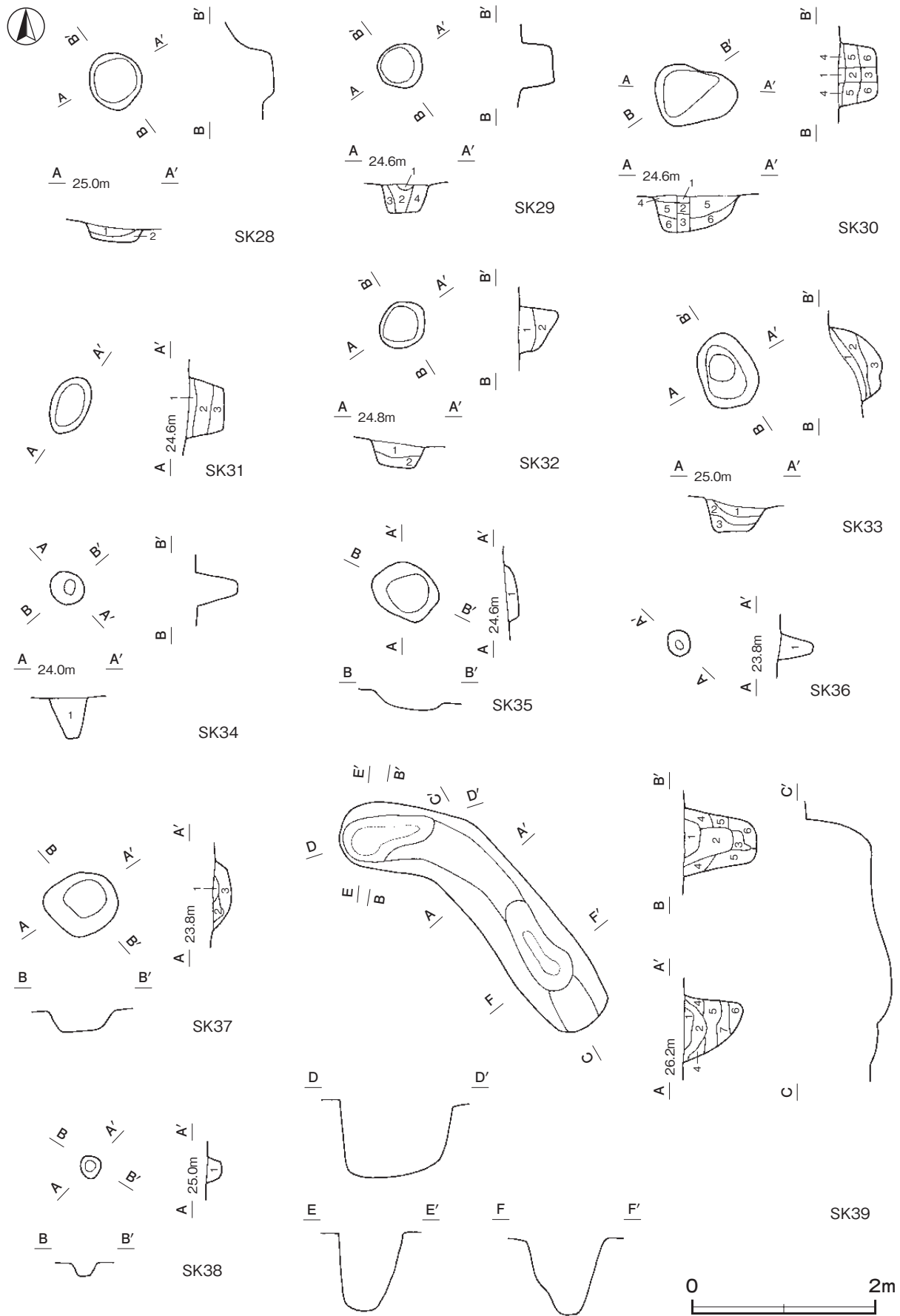


第 24 図 その他の土坑実測図 (1)

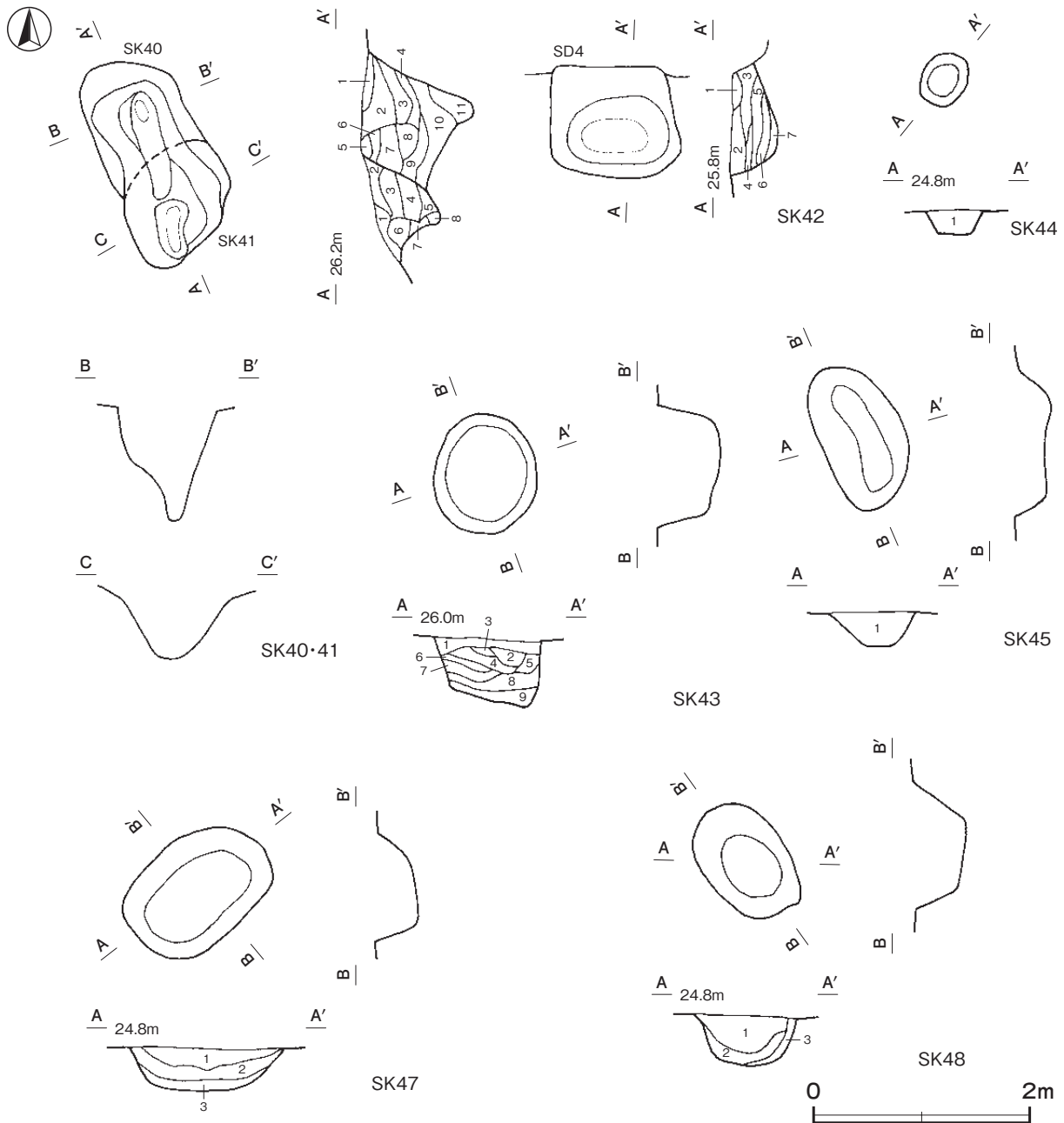


第 25 図 その他の土坑実測図 (2)





第26図 その他の土坑実測図(3)



第 27 図 その他の土坑実測図 (4)

第 19 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第 20 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第 22 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量

第 23 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 粘土ブロック多量, ローム粒子少量

第 24 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第 25 号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック少量
- 4 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量
- 5 灰白色 粘土ブロック多量, ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量

第 26 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 28 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子微量

第 29 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 30 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 31 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量

第 32 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 33 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 34 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック中量

第 35 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子微量

第 36 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量

第 37 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量

第 38 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 粘土ブロック少量

第 39 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 黒 色 ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック微量
- 5 灰 褐 色 ロームブロック少量
- 6 暗 褐 色 ロームブロック微量
- 7 暗 褐 色 ロームブロック少量

第 40 号土坑土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子微量
- 5 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック中量
- 8 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 9 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 10 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 11 灰 褐 色 ロームブロック少量

第 41 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量, 締まり強い
- 2 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 5 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 8 暗 褐 色 ロームブロック中量

第 42 号土坑土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック少量
- 2 黒 色 ロームブロック微量
- 3 暗 褐 色 粘土ブロック多量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 5 黒 色 ローム粒子微量
- 6 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 7 黒 色 ローム粒子少量

第 43 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 8 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 9 暗 褐 色 ロームブロック少量

第 44 号土坑土層解説

- 1 褐 色 ロームブロック微量

第 45 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量

第 47 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量

第 48 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子中量

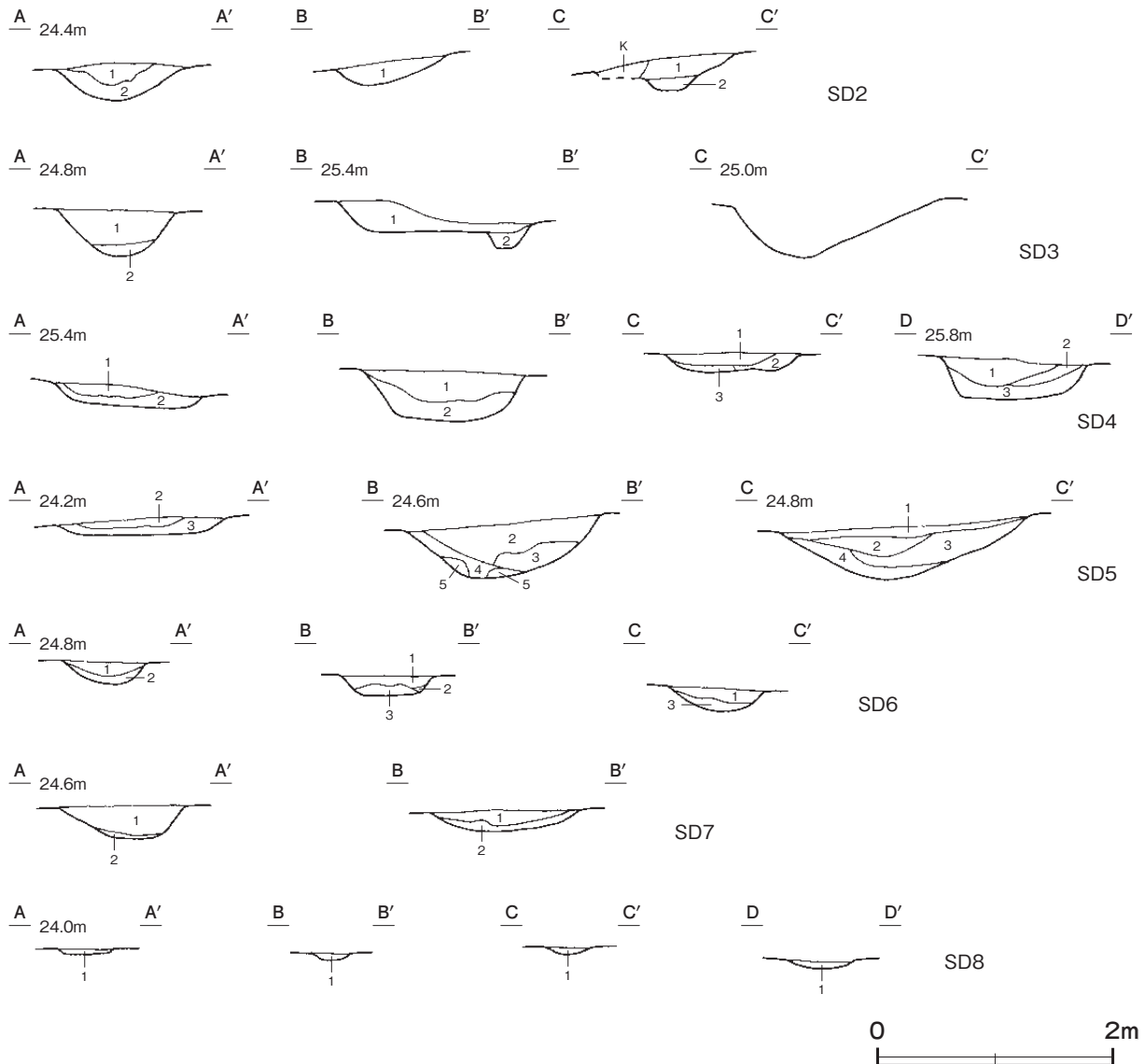
表3 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	E 3c5	N-82°-E	[楕円形]	[2.10] × [1.20]	76	外傾・ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器	SA 2→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	D 4 f2	N-81°-E	楕円形	0.72 × 0.52	22	外傾	平坦	人為	土師質土器	SD 1→本跡
3	D 4 d3	N-8°-W	楕円形	0.58 × 0.47	46	ほぼ直立	平坦	人為		SD 1→本跡
4	D 4 d3	N-59°-E	楕円形	1.38 × 0.90	27	外傾・ ほぼ直立	平坦	人為		SD 1→本跡
5	D 4 b5	N-29°-E	楕円形	0.63 × 0.51	37	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
6	D 4 b5	-	円形	0.59 × 0.58	28	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
7	D 4 b5	N-72°-W	楕円形	0.74 × 0.66	39	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡
8	D 4 b6	-	円形	0.85 × 0.79	22	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡
9	D 4 c7	N-22°-E	不整楕円形	1.59 × 0.96	48	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡
10	D 4 b7	N-21°-E	不整楕円形	1.31 × 0.96	26	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
11	D 4 b6	N-72°-E	[方形]	(0.60) × (0.46)	53	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡 →SK19→SK13
12	D 4 a6	N-27°-E	楕円形	1.31 × 0.97	44	外傾・ ほぼ直立	平坦	自然		SD 1→本跡
13	D 4 b6	N-78°-W	不整楕円形	1.26 × 0.78	43	外傾	平坦	自然		SD 1→SK11 →SK19→本跡, SK21→本跡
14	D 4 a6	N-11°-E	不整楕円形	2.02 × 1.50	50	直立	平坦	人為		SD 1→本跡 →SK21
15	D 4 b7	-	円形	0.90 × 0.82	39	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡
16	D 4 b8	N-36°-W	楕円形	0.64 × 0.47	18	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
17	D 4 a7	-	円形	0.51 × 0.49	24	外傾・ ほぼ直立	平坦	自然		SD 1→本跡
18	D 4 a7	-	円形	0.47 × 0.43	27	緩斜・ 外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
19	D 4 b6	N-12°-W	[長方形]	0.62 × (0.57)	53	外傾	平坦	人為		SD 1→SK-11 →本跡→SK13
20	D 4 a7	-	円形	0.75 × 0.71	36	直立	平坦	人為		SD 1→本跡
21	D 4 b6	-	[円形]	0.58 × (0.50)	40	外傾	平坦	人為		SD 1→SK14 →本跡→SK13
22	D 4 g1	-	円形	0.77 × 0.71	25	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
23	D 4 f1	N-47°-W	楕円形	0.59 × 0.49	64	直立	平坦	人為		SD 1→本跡
24	D 4 c1	N-51°-E	楕円形	1.86 × 0.93	53	外傾	平坦	人為		SD 1→本跡
25	E 2 b7	-	[円形]	[1.59] × [1.55]	144	外傾・ 直立	平坦	人為		SA 1→本跡
26	D 3 h2	N-37°-E	隅丸方形	0.87 × 0.85	7	緩斜	平坦	自然	土師質土器	本跡→SA 1
28	C 5 g2	N-6°-W	楕円形	0.64 × 0.56	26	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
29	C 5 h3	-	円形	0.50 × 0.49	37	ほぼ直立	平坦	人為		SD 1→本跡
30	C 5 h3	N-90°	不整楕円形	0.89 × 0.67	41	外傾・ 直立	平坦	人為		SD 1→本跡
31	C 5 h2	N-24°-E	楕円形	0.65 × 0.41	39	直立	平坦	自然		SD 1→本跡
32	C 5 h2	N-57°-E	楕円形	0.57 × 0.48	42	ほぼ直立	平坦	自然		SD 1→本跡
33	C 5 h1	N-17°-W	楕円形	0.81 × 0.62	57	外傾	平坦	自然		SD 1→本跡
34	A 7 f4	N-30°-W	楕円形	0.39 × 0.35	45	ほぼ直立	平坦	人為		
35	A 6 j9	N-49°-W	隅丸長方形	0.70 × 0.57	14	緩斜	平坦	自然		
36	A 7 g6	N-31°-W	楕円形	0.29 × 0.24	36	ほぼ直立	平坦	人為		
37	A 6 g8	-	円形	0.71 × 0.67	22	外傾	平坦	人為	土師質土器	
38	B 6 b8	-	円形	0.24 × 0.23	12	外傾	平坦	人為		
39	C 5 f2	N-45°-W	不整楕円形	3.46 × 0.75	81	外傾・ ほぼ直立	平坦	人為		SD 1→本跡
40	C 5 f2	N-27°-W	[楕円形]	(0.96) × 0.85	102	外傾	平坦	人為	須恵器	SD 1→本跡 →SK41
41	C 5 f2	N-65°-E	不整楕円形	1.03 × 0.92	66	外傾	平坦	人為		SD 1→SK40 →本跡
42	C 5 b4	N-87°-W	[隅丸長方形]	1.20 × (1.02)	42	外傾・ 緩斜	平坦	人為		SA 1→本跡 →SD 4
43	C 5 b3	N-20°-W	楕円形	1.08 × 0.95	58	ほぼ直立	平坦	人為		SA 1→本跡
44	E 2 g1	N-33°-E	楕円形	0.51 × 0.40	19	外傾	平坦	自然		
45	E 1 f0	N-24°-W	楕円形	1.35 × 0.76	31	外傾・ 緩斜	平坦	自然		
47	E 2 j5	N-48°-E	楕円形	1.38 × 0.97	37	外傾・ 緩斜	平坦	自然		
48	E 2 j5	N-34°-W	楕円形	1.12 × 0.76	44	外傾	平坦	自然		

(2) 溝跡 (付図2 第28図)

土層断面図, 土層解説と一覧表を掲載する。平面図については遺構全体図に示す。



第28図 その他の溝跡実測図

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック微量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック微量

第4号溝跡土層解説

- 1 黒色 粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第6号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第5号溝跡土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック中量

第7号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第8号溝跡土層解説

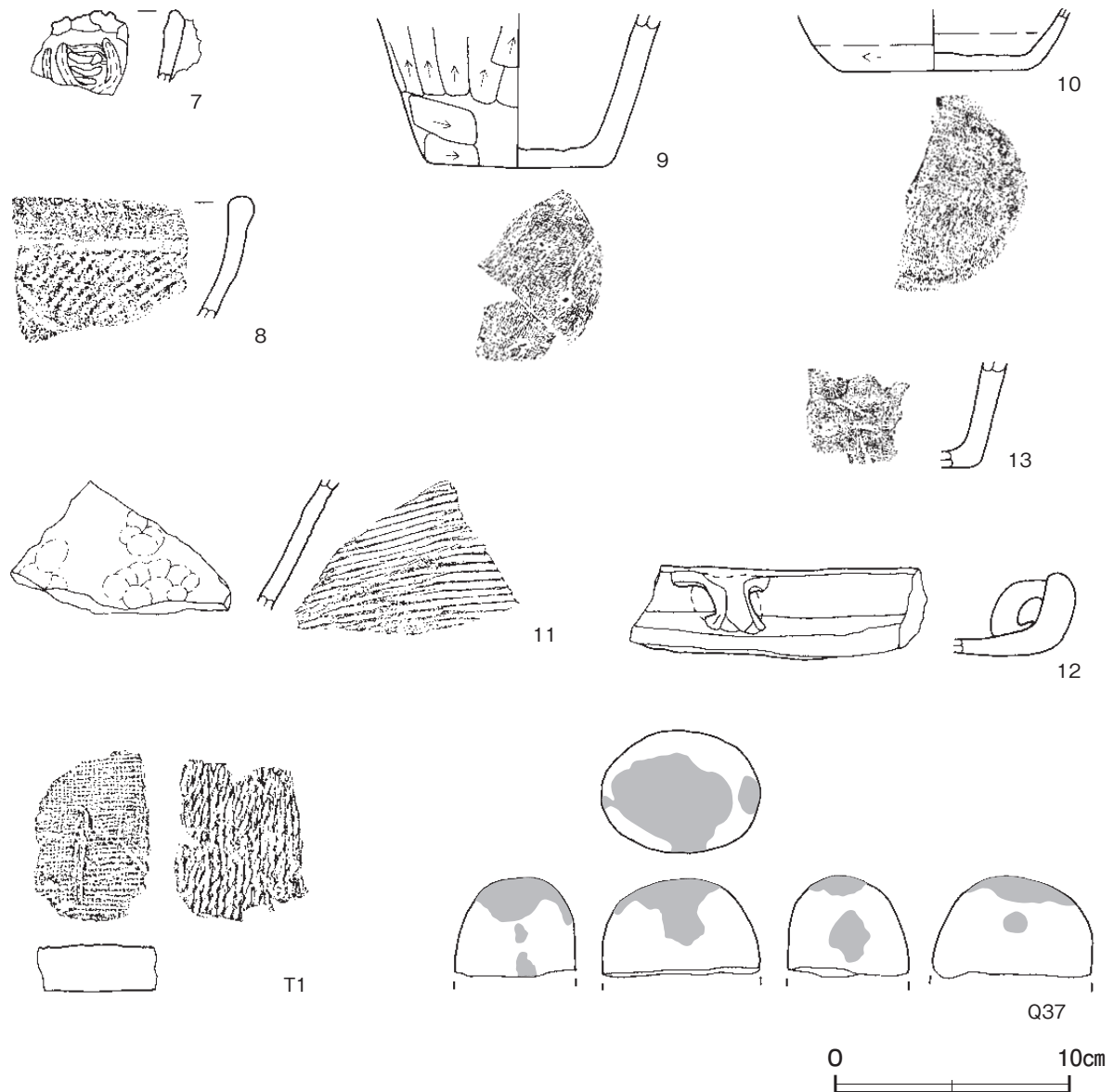
- 1 黒褐色 ローム粒子微量

表4 その他の溝跡一覧表

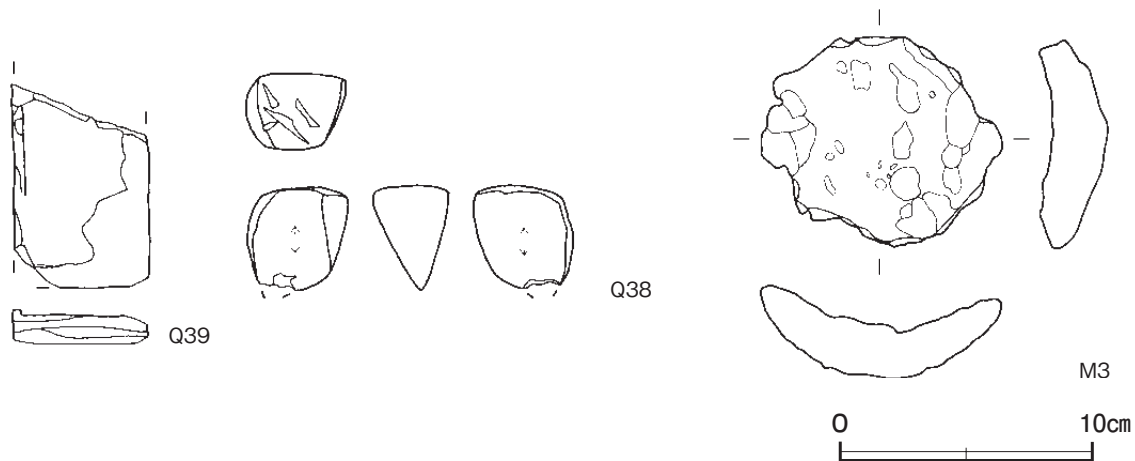
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
2	A7f7 ~ B7b1	N-47°-E	直線	(32.56)	0.38~1.30	0.10~0.30	18 ~ 28	U字状	緩斜	自然	土師質土器, 石器	SD 1 → 本跡
3	B7b1 ~ B7d3	N-46°-W	直線	(10.10)	0.34~1.90	0.07~0.32	24 ~ 45	U字状	緩斜	人為	縄文土器, 土師質土器, 鉄滓	SD 1 → 本跡
4	C5a3 ~ B5b6 C6a1 ~ C6a5	N-96°-E	直線	(14.98)	0.92~1.46	0.58~0.94	15 ~ 41	U字状	緩斜	人為	土師質土器	SA 1 → SK42 → 本跡, SA 2 : SD 1 → 本跡
		N-94°-E		(17.16)	1.02~1.45	0.62~1.00	15 ~ 31		外傾			
5	A7b5 ~ A7c8	N-58°-W	直線	(11.14)	1.00~1.87	0.27~0.83	15 ~ 45	U字状	緩斜	人為	瓦質土器	
6	E2e4 ~ E2i1	N-37°-E	直線	20.06	0.68~0.90	0.16~0.52	18 ~ 22	U字状	緩斜	人為	陶器, 磁器	
7	E1f9 ~ E1i0	N-28°-W	直線	(12.18)	0.98~1.41	0.30~0.64	20 ~ 29	U字状	緩斜	人為	土師質土器, 磁器	
8	E1i6 ~ F1c7	N-14°-W N-40°-W	直線	(18.60)	0.24~0.56	0.11~0.28	5 ~ 7	U字状	緩斜	自然	土師質土器	SD 1 → 本跡

(3) 遺構外出土遺物 (第29・30図)

遺構に伴わない遺物について、実測図及び観察表を掲載する。



第29図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第30図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第29・30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部片 張瘤→隆帯刻み目→隆体下沈線	SD 3	
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部片 胴部0段多条縄文RLを施文	表土	
9	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	7.8	長石・石英	橙	普通	胴部外面下位縦位・下端横位のヘラ削り	表土	10%
10	須恵器	坏	-	(2.6)	8.2	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	表土	35% 新治産
11	須恵器	鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	体部横位の平行叩き 内面指頭痕	SA 1	5% PL11
12	土師質土器	焙烙	-	3.8	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ後耳部貼り付け	表土	5%
13	瓦質土器	火鉢	-	(4.4)	[10.6]	長石・石英・黒色粒子	黒褐	普通	菊花押型文	SD 5	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 37	敲石	(4.2)	6.9	5.3	(211.93)	砂岩	端部・側面に叩打痕有	SA 1	PL11
Q 38	砥石	4.0	4.0	3.0	47.95	砂岩	砥面3面 砥面に刃形痕有	SD 2	PL11
Q 39	硯	(8.1)	5.4	(1.3)	(57.14)	泥岩 <sub>o</sub>	陸部遺存	SD 1	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	碗状滓	9.6	8.3	2.1	274.68	鉄	前面錆化 一部発砲 着磁性なし	SD 1	PL11

番号	種別	瓦当幅	瓦当高	長さ	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
T 1	平瓦	(7.8)	2.0	(5.5)	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面縄目叩き痕 内面布目痕	SD 1	PL11

## 第4節 ま と め

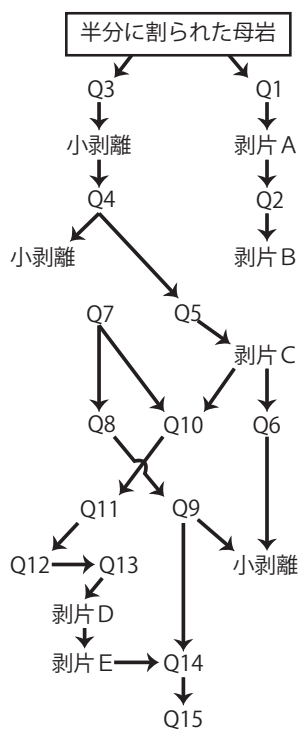
### 1 はじめに

本跡は、字名が大堀という土地に所在しており、古くから堀の存在は認識されていたが、長らくその実態は不明であった。今回の調査で、規模や形状のほか、室町時代だけではなく、江戸時代に入ってから利用されていたことなどが明らかになった。そのほか、後期旧石器時代前葉の石器集中地点、縄文時代の陥し穴、平安時代の墓の可能性のある土坑等を確認している。ここでは、各時代の様相について概観し、若干の考察を加えてまとめとする。

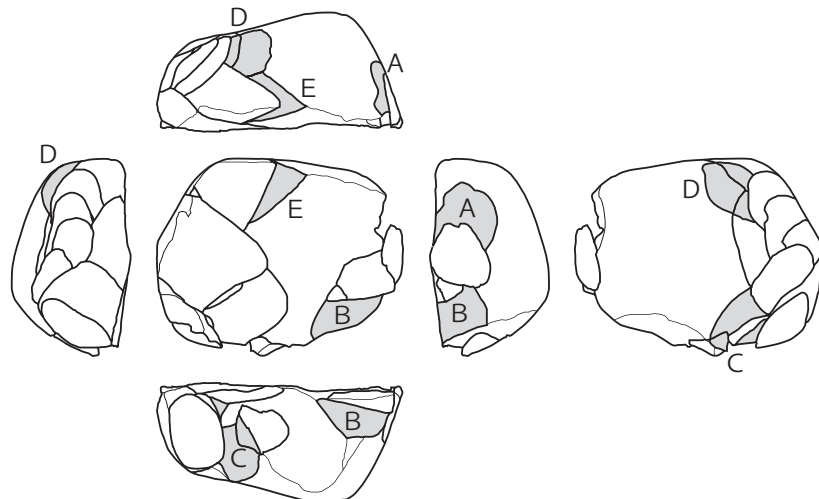
### 2 旧石器時代

今回の調査では、石器集中地点1か所から、38点の石核・剥片が出土し、4点を除き3つの接合資料にまとまった。本文でも述べているが、出土層位や剥片の剥離技法から、武蔵野台地のⅨ層段階、下総編年のⅡa期古段階に該当する<sup>1)</sup>。

珪質頁岩で構成される接合資料1は、拳大の母岩の半分程度まで復元でき、剥離工程を把握することができた。第31図は、その工程を示したものである。打面を頻繁に変更しながら不定形の剥片を取り出そうとしていることがうかがえる。石器や二次加工のある剥片は確認できなかったが、接合資料の隙間に出土しなかった剥片の痕跡を5か所確認した。第31図上で剥片A～Eとしたもので、大きさは3～4cm程度のものと考えられる。接合した剥片の大きなサイズのものと同程度で、おそらくは楔形石器や台形様石器といった石器として利用するために持ち去られたものと考えられる。母岩となった珪質頁岩は、風化が進んだ黄褐色のもので、古鬼怒川産のものと考えられる<sup>2)</sup>。



接合資料2と3は、おそらく同一母岩の灰褐色の安山岩で、節理が多く入る。接合する点数は11点と9点となるが、小剥片が多く接合状況から剥離工程を判断するまでには至らなかった。小剥片の中には台形様石器に似た形状のものも確認できるが、二次加工がみられなかった。台形様石器の素材としては不適切なものと判断され、本跡に残されたものと考えられる。また、



第31図 接合資料1 剥片剥離工程図



表面に風化した剥離面を持つ部分が確認でき、ある程度剥離作業を進めた段階の母岩を袋等に入れ移動を行っていたことが推測される。狭い範囲で出土し、そのほぼ全てが接合するという状況からは、手持ちの石材から必要な剥片を取り出す間だけ本跡に留まり、作業完了後再び移動を始めたという行動が想起される。

近隣遺跡で同時期の石器集中地点は、つくば市東岡中原遺跡<sup>3)</sup>、土浦市山川古墳群<sup>4)</sup>、石岡市半田原遺跡<sup>5)</sup>などが挙げられる。特に、東岡中原遺跡は本跡から南に600 mほど離れた台地縁辺部に位置しており、石器集中地点10か所を確認し複数の文化層を持つ遺跡であることがわかっている。本跡は東岡中原遺跡のキャンプから移動した旧石器時代人が立ち止まった痕跡の可能性がある。これらの出土遺物の比較検討を今後進めていく必要がある。

### 3 縄文時代・平安時代

縄文時代の遺構は、陥し穴6基を確認した。陥し穴は、埋没谷の縁辺部に2基ずつ組になって配置されている。また、形状は底面が平坦な楕円形で、底面に逆茂木痕と考えられるピットを持っている。こうした形状は、関東では早期後半から前期にかけて盛行するとみられている<sup>6)</sup>。当該期の集落及び同形状の陥し穴は、近隣の東岡中原遺跡<sup>7)</sup>や上野陣場遺跡<sup>8)</sup>、上野古屋敷遺跡<sup>9)</sup>で確認されており、当地はこれらの集落に住む人々の狩猟場として利用されていたことが考えられる。

平安時代の遺構は、土坑1基を確認した。完形の土師器高台付椀が出土しており、伸身葬をするのに適当な形状で、墓坑の可能性はある。今回は単独での確認であったため、明確に墓坑とするに至らなかった。類似する例として、石岡市鹿の子遺跡の第2号土坑に同様の形状や遺物の出土状況がみられる<sup>10)</sup>。南北方向に長軸方向をとる点も類似している。また、「側壁抉り込み土坑」と称される別の形状の土壇墓群も確認されている<sup>11)</sup>。類例の増加を待ち再検討したい。

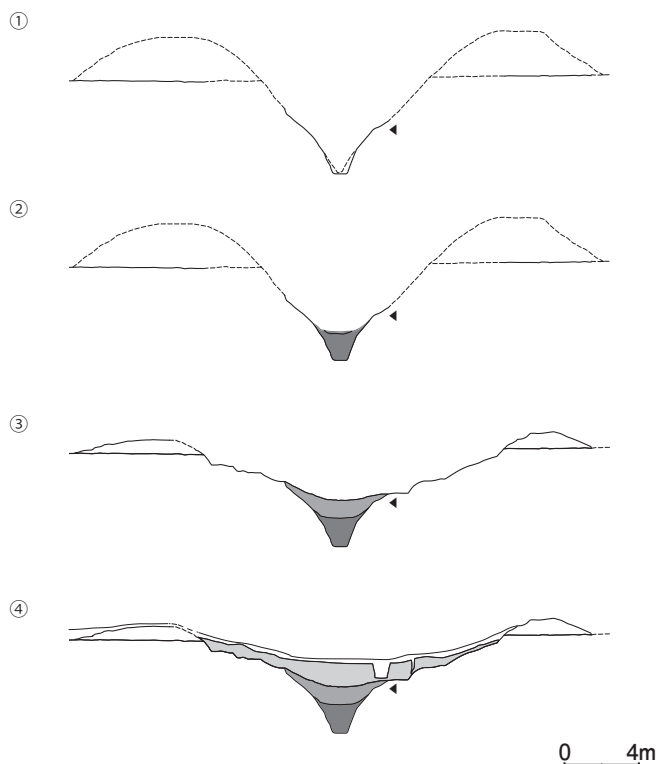
### 4 室町時代から江戸時代

堀跡1条、土塁跡2条、土坑1基を確認した。本跡のような堀跡は、類例が少なく、遺物も少ないため調査の結果だけで判断できることが少ない。そこで、先学の研究成果や類例を検討し、考察を加えることにする。

#### (1) 堀の構造の変遷

まずは断面形態や覆土の堆積状況を整理し、推測も交えながら堀及び土塁の構造の変遷を追っていく。本文で述べた堀内の土層堆積状況から変遷過程を堆積状況が判断しやすいEラインの土層図を例に4つの段階に還元した(第32図)(第20・21図・付図1参照)。

① 構築時の段階で、掘り込みの形状は深い薬研堀状または逆台形状である。逆台形状の部分も構築時にはG・N・Oラインにみられる断面V字状の薬研堀であったと考えられる。壁の崩落やそれに伴う底浚い及び修復を繰り返すうちに堀底が逆台形になったものと考えられ、B・C・Fラインの下部壁面に崩落の影響とみられる不自然な形状が確認できる。また、堀壁の中央付近に酸化鉄が帯状に確認でき、この高さ(図中◀)までは堀内に水が溜まっていたことが考えられる。堀の構築と並行して土塁も構築されている。当時の地表面の整地を行った後、掘った土を堀の両脇に盛土して土塁を構築している。それぞれの場所の土塁の残存状態と、それに対応する堀の深さにはある程度の相関関係がみられることから、掘った土をそのまま横に積み上げ盛土をし、一定の高さには揃えていなかったものと考えられる。掘った土を全て土塁の構築土に利用した場合、この段階での土塁の高さをEラインの断面での単純な面積比から求めると、容易に2 mを超えることになる。



第32図 堀・土塁の変遷模式図

- ② ある程度堀が埋まった段階で、堀底の整地を行っている。崩落等により深い個所の維持が難しくなったためと考えられる。本文中では覆土の混入物等からこの段階は、堀全体を通して全て埋め戻しによるものと判断している。しかし、上記の理由により埋め戻しと整地を行ったのであれば、この段階の覆土に崩落土が含まれていることになる。土塁は前段階から大きな変化はないと考えられる。
- ③ 堀を埋め戻し浅くしながら、拡張を行っている。前段階から自然堆積による埋没がある程度進んだところで、埋め戻しを行っている。埋め戻しは土塁を崩した土で行っていると考えられ、この段階の最上層は白色粘土ブロックが多く含まれる層となっている。その後

に階段状に平坦面を作出しながら拡張を行い、堀幅を1.5倍から2倍近くまで広げている。Fラインでは2倍以上の広がり確認できる。この段階の掘り出された排土の推定量と、埋め戻された覆土の量にかなりの差があることから、どこかに持ち出されたことが考えられる。この段階の堀には水が溜まっていなかったと考えられる。

- ④ 堀の機能が停止し、埋没する。一部埋め戻されたと考えられる層があるが、ほとんどは自然堆積である。以上4つの段階の検討と復元を行ったが、もう一段階古い堀が存在した可能性がある。AラインとFラインで第1段階の覆土とした下幅2mを超える幅広で浅い逆台形状の形状である。全体の形状が把握できないことや、確認できる2か所の覆土の様相が全く異なることから、同時期に同じ堀として掘削されたものかは判断できなかった。

次に各段階の時期を検討していきたい。①の段階は、大型の薬研堀を想定している。宇留野主税氏は、堀の形状から分類を行い変遷を検討しており、本跡のような大型の薬研堀は16世紀中頃から末頃に多くみられる、としている<sup>12)</sup>。井上哲朗氏は「堀内障壁」を有する堀を「障子堀」として分類・編年を行っている<sup>13)</sup>。これによると、本跡で確認できる障壁の形態は、16世紀代にみられるものに比定できる。同様の堀は、近隣では龍ヶ崎市屋代城跡<sup>14)</sup>や同市長峰城跡<sup>15)</sup>でもみることができ、これらは15世紀中頃から16世紀代にかけて機能していたと考えられている。これらのことから、①の段階は、15世紀にさかのぼる可能性もあるが、本跡が城郭そのものではなく、その延長線上にある遺構であることを考慮し16世紀の前半に位置付けておきたい。②の段階は、時期決定の理由に乏しいため、③の段階の検討を行い①と③の間、ということにしておく。③の段階は埋め戻しを行いながら大幅な拡張を行っており、何かしらの理由があるものと考えられる。具体的な根拠は乏しいが、鉄砲の普及等に伴う戦術的な変化が挙げられる。鉄砲の使用で著名な長篠の戦が1575(天正3)年であり、この頃には鉄砲が普及していたと考えると、

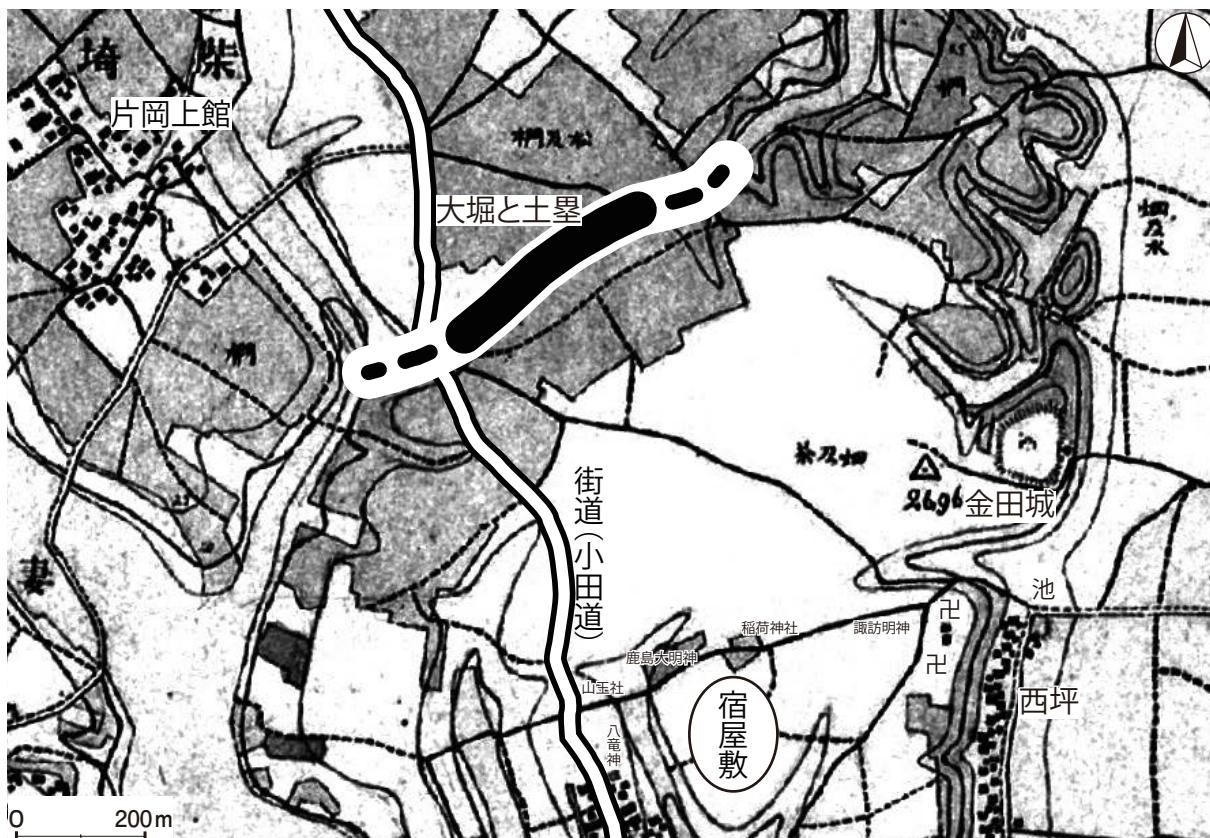
拡張を行ったのは16世紀後葉または末頃に位置付けることができる。この状態で17世紀前半には墓域として利用され、④の段階になる。その後は近年まで山林となっている。

## (2) 金田城主沼尻氏と大堀

堀と土塁について、誰がどのような目的で構築したのかを検討する。この構築物の大きな特徴として、自然地形を利用しつつ台地を分断しているという点が挙げられる。分断した堀の南東には金田城が存在しており、堀が金田城に伴う施設である可能性については以前から言及されてきた。金田城は小田氏の幕下沼尻氏の城で、鎌倉時代初期に小田城が築かれた頃に同じくして造られ、小田の15代氏治が佐竹氏に降伏するときに落城し廃城となった<sup>16)</sup>。このときの城主は沼尻又五郎で、「小田家風紀」によると小田六騎の1人に数えられる豪勇の者であったという。

ここで、金田城を中心とする景観をみてみたい。第33図は「第一軍管区地方2万分1迅速測図原図」を使用し、「桜村史」の記述をもとに金田城が利用されていた時の周辺の景観を復元したものである。金田城の南の台地上には寺や神社、馬場、宿屋敷があり、台地縁辺下に西坪の部落がある。西坪の部落は古くは根小屋と呼ばれており、ここに家臣団の居住地があったと考えられる。宿屋敷は、沼尻氏の館を指していると考えられる<sup>17)</sup>。これら城を中心とした集落の北側に堀と土塁は築かれており、その西に道路が台地を縦走している。金田城から柴崎、栗原を通り小田城へ抜ける街道「小田道」の存在が考えられており<sup>18)</sup>、この道がそれに該当すると考えられる。このような景観から、堀と土塁が、街道を通過して攻めてくる敵に対する防御施設として構築されたものと考えられるのである。同様の景観として、つくば市谷田部大堀遺跡が挙げられる。約1km南東に谷田部城跡があり、自然地形を利用しつつ台地を分断している点や、街道がその台地上を通過している点など、立地上共通する点も多い。未調査のため形状や時期などは明確でないが、上記の点から谷田部城に関連する施設であることが考えられる。谷田部城も小田氏の幕下の城である。小田氏の指揮のもと各々の城主が街道を抑えるための堀と土塁を構築したことが推測できる。

同様の遺構は、県内に散見することができる。確認数が特に多いのは、牛久市から稲敷市にかけての霞ヶ浦南岸地域と鹿行地域である。霞ヶ浦南岸地域は、戦国時代においては土岐氏の領地となっており、街道を閉塞させるための施設は、確認されただけでも30か所に達する。これらは、土岐氏の居城である江戸崎城や木原城を防衛するためのものであると考えられており、形状にいくつかの種類がみられる<sup>19)</sup>。発掘調査を行っているものでは、堀と土塁が二重の構造を持つ阿見町二重堀遺跡<sup>20)</sup>、底面が障子堀で槍衾の痕跡がみられるものや陥し穴を備えている阿見町割目遺跡<sup>21)</sup>があり、断面形状も逆台形状の箱薬研堀とV字状の薬研堀とどちらも確認することができる。そのほかにも土塁で虎口を設けるものや、土塁上から横矢を掛けられる形状のもの<sup>22)</sup>などがある。鹿行地域は、石崎勝三郎氏の研究成果から銚田市中居城跡周辺で11本確認されている<sup>23)</sup>。また、石崎氏は「大堀」・「新堀」といった地名から堀切の存在を探し出し確認を行っており、本跡のほか城里町・ひたちなか市・茨城町・小美玉市・土浦市・結城市など県内各地の堀切の存在が挙げられている。このほかに発掘調査事例として、阿見町内堀遺跡<sup>24)</sup>、茨城町前新堀遺跡・前新堀B遺跡<sup>25)</sup>、土浦市新堀東遺跡<sup>26)</sup>があるが、総じて発掘調査事例は少ない。そのような中で、堀の両側に土塁を設けるという共通した傾向がみられ、また占地や形状等の傾向には地域性をみることができる。この地域性には、自身の領地を守るために施設を構築した領主の影響があるものと思われる。これらの調査事例の中でも、本跡の堀の規模は特筆すべきものがある。本跡の堀を構築したと思われる沼尻氏の居城である金田城の堀も、幅は16～25m、深さ約10mと幕下の城としてはかなりの規模で<sup>27)</sup>、小田氏及び沼尻氏の土木技術の一端をうかがわせるものであろう。



第 33 図 金田城周辺の景観（「農研機構農業環境変動研究センター」公開データに加筆）

## 5 おわりに

今回の調査で、字名にもなっていた「大堀」の全体像が確認できた。今回調査を行った堀と土塁は、金田城の守りも視野に入れながら街道閉塞に主眼を置いたものと考えた。類例を見ていくと、街道閉塞の堀と土塁は、谷津に狭められた馬の背状の台地を分断して街道を塞ぐ、という方針で構築されていることは明らかである。茨城県は、谷津が多く入り込んだ台地が広く続く地理的条件下にある。また、戦国時代においては大大名が存在しない中、国人領主間での領土争いが続く歴史的背景が存在した。そのような中、各地の領主が自身の領土を守るために堀と土塁を構築していったものと考えられる。こうしてみると、これらの堀や土塁は、茨城県の戦国時代を特徴づける遺構と考えることができる。しかし、こうした遺構群は、もともと人が集落等を形成しないような場所に構築され、使用頻度もおそらくは少なかったであろうから遺物も少なく、いつの時代の遺構か判断しづらいものと考えられる。また、完全に埋没してしまい、認識されていないものも存在する可能性がある。こうした場合、石崎氏が行ったように、地名等の歴史的背景から遺構を認識していく必要があると思われる。これらの遺構の調査事例が増えていき、柴崎大堀遺跡や金田城の様相を含めた茨城県の戦国時代の状況がより明らかになっていくことが期待される。

## 註

- 1) 橋本勝雄「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』発表要旨・資料集 茨城県考古学協会 2002年12月
- 2) 窪田恵一氏のご教示を得た。
- 3) 成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月

- 4) 石川功・小川和博「山川古墳群（第2次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集－」  
土浦市・土浦市教育委員会・山川古墳群第二次調査会 2004年3月
- 5) 仙波亨「一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 半田原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』  
第122集 1997年3月
- 6) 中村信博「関東地方の陥し穴塚」『縄文時代の考古学 5 なりわい－食料生産の技術』 2007年12月
- 7) 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」  
『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
- 8) 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城  
県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
- 9) 三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城  
県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月
- 10) 海老沢裕「鹿の子遺跡発掘調査報告書（第2次）」石岡市教育委員会 1986年3月
- 11) 川井正一「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集  
1983年3月
- 12) 宇留野主税「堀・堀内障壁〔障子堀〕」『中世城館の考古学』高志書院 2014年5月
- 13) 井上哲朗「障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター研究紀要』20 2000年3月
- 14) 佐藤正好「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17 屋代B遺跡Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第45集  
1988年3月
- 15) 中村幸雄・後藤義明「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』  
第58集 1990年3月
- 16) 桜村史編さん委員会「桜村史（上巻）」桜村教育委員会 1982年3月
- 17) 「小田家一族一門名簿」によると、金田強清水（金田城）に沼尻又五郎をおき、金田館内に沼尻又治郎、又三郎、又四郎、  
又十郎の兄弟をおいたとしている。  
木村信吉「私家版 小田氏と支族家臣たち」野生芸術社 2004年6月
- 18) 柴崎地内の道標に「小田道」の名が記されたものがある。  
桜村史編さん委員会「桜村史（下巻）」桜村教育委員会 1983年3月
- 19) 大竹房雄「戦国土塁」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 20) 大関武「二重堀遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査  
報告』第297集 2008年3月
- 21) 河野辰男ほか「割目遺跡発掘調査報告書」阿見町教育委員会 1979年3月
- 22) 前掲註19)に同じ
- 23) 石崎勝三郎「地名の向こうに遺構が見えた」『茨城県考古学協会誌』第19号 2007年5月
- 24) 高木國男ほか「内堀遺跡（土塁）」内堀土塁発掘調査会 1985年3月
- 25) 芳賀友博・須賀川正一・杉澤季展「小幡城跡 前新堀遺跡 前新堀B遺跡 諏訪山塚群 藤山塚 東関東自動車道水戸線  
（茨城南IC～茨城JCT）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第314集 2009年3月
- 26) 小川貴行「新堀東遺跡 一般国道354号土浦バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報  
告』第358集 2012年3月
- 27) 樋詰洋「金田城」『図説 茨城の城郭』 2006年7月

#### 参考文献

- ・茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会「茨城県中世考古学の最前線 ～編年と基準資料～」茨城県考古学協会  
2011年1月
- ・野村亨「常陸小田氏の盛衰」筑波書林 2004年2月
- ・筑波町史編纂専門委員会「筑波町史 上巻」つくば市長 倉田弘 1988年9月
- ・小丸俊雄「小田氏十五代－豪族四百年の興亡－（上）（下）」筑波書林 1979年3月

## 第4章 柴崎大日塚

### 第1節 調査の概要

柴崎大日塚は、つくば市の北東部に位置し、桜川右岸の標高約 27 mの台地上に位置している。柴崎大堀遺跡から北西約 600 m離れた同じ台地上に位置している。調査面積は 758㎡で、調査前の現況は山林である。調査前の段階では、遺跡は柴崎大日古墳として登録されており、古墳の調査として開始した。

調査の結果、方形竪穴遺構 1 棟（室町時代）、塚 1 基（江戸時代）、井戸跡 1 基（時期不明）、土坑 15 基（時期不明）を確認し、古墳ではなく塚であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 15 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（小皿）、陶器（碗・皿）、磁器（碗）、石器（砥石）、石仏（胎蔵界大日如来像・如意輪観音像）、石製品（宝篋印塔部材・五輪塔部材）、銭貨（寛永通寶）などである。

### 第2節 基本層序

調査区東部（B 2 b4 区）にテストピットを設定し、基本土層（第 34 図）の観察を行った。

第 1 層は、表土である。層厚は 22 ～ 38cm である。

第 2 層は、暗褐色を呈するローム層である。炭化粒子と白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は 13 ～ 16cm である。

第 3 層は、暗褐色を呈するローム層である。黒色粒子を少量、赤色粒子を微量含み、粘性は普通で締まりは強く、層厚は 7 ～ 14cm である。

第 4 層は、にぶい黄褐色を呈しクラックが多量に入り込むローム層である。黒色粒子を少量、白色粒子を微量含み、粘性は普通で締まりは強く、層厚は 14 ～ 24cm である。

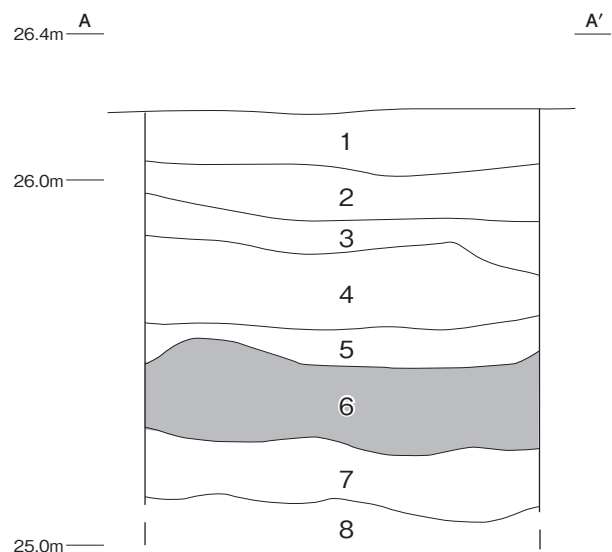
第 5 層は、にぶい黄褐色を呈するローム層である。白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は 5 ～ 12cm である。

第 6 層は、黒褐色を呈するローム層である。白色粒子を微量含み、粘性は普通で締まりは強く、層厚は 20 ～ 28cm である。第 2 黒色帯と考えられる。

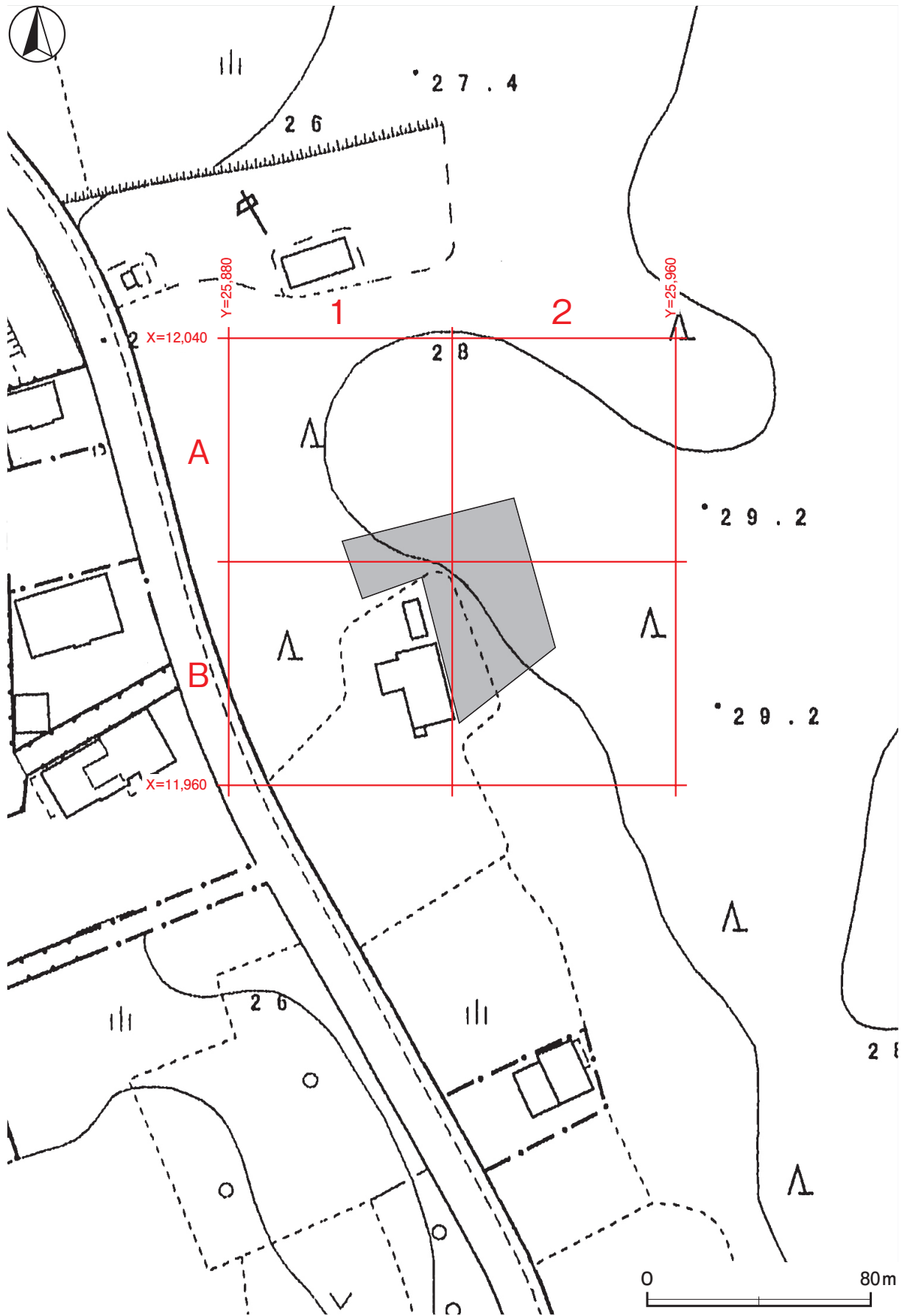
第 7 層は、褐色を呈するローム層である。白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は 15 ～ 21cm である。

第 8 層は、褐色を呈するローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりともに強い。下部が未掘のため、層厚は不明である。

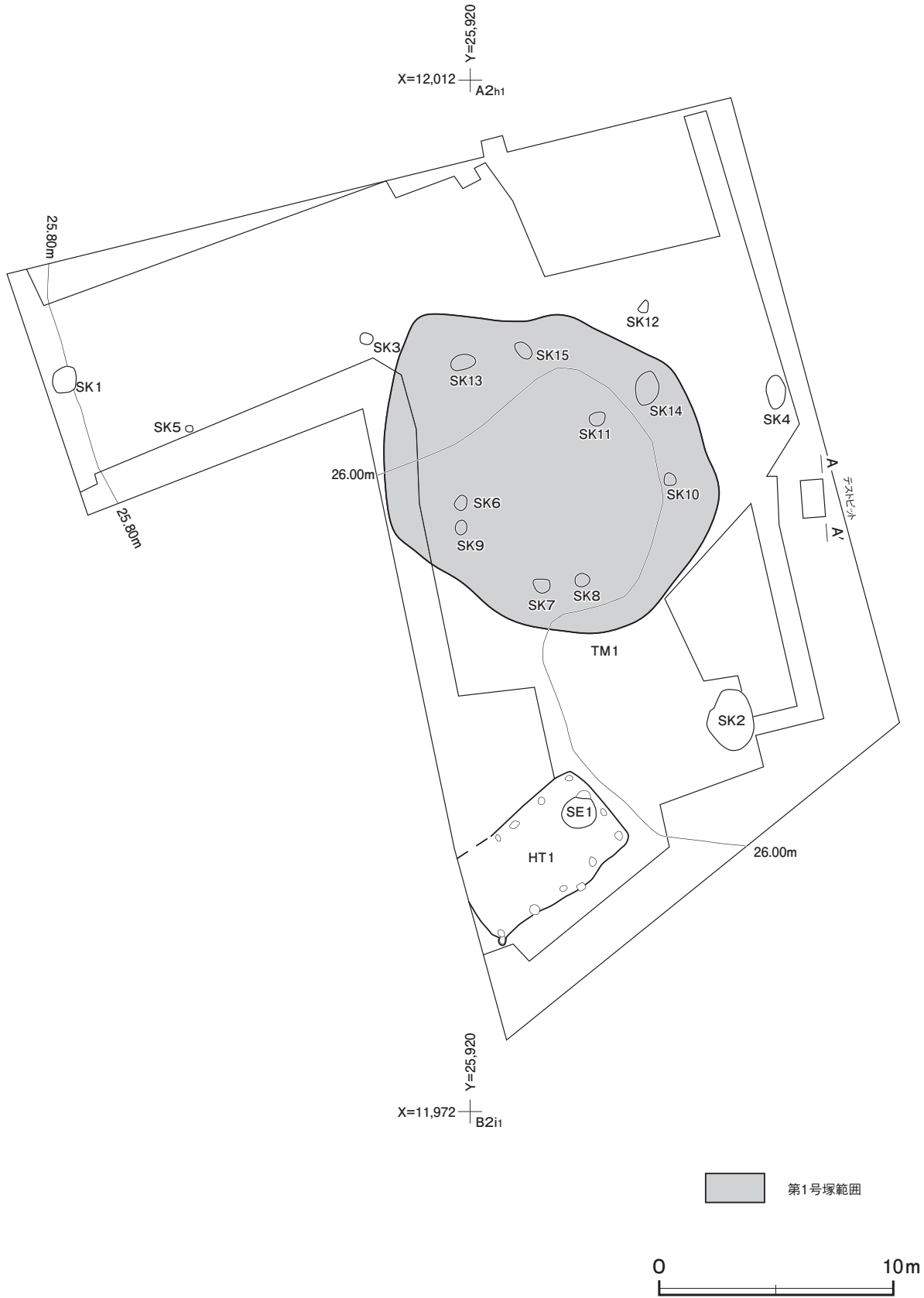
また、第 1 号井戸跡の壁面の標高 24.4 m で常総粘土層の上面が確認できた。遺構は主に第 4 層上面で確認した。



第 34 図 基本土層図



第 35 図 柴崎大日塚調査区設定図（つくば市都市計画図 2,500 分の 1）



第 36 図 柴崎大日塚遺構全体図



### 第3節 遺構と遺物

#### 1 室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、方形竪穴遺構1棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

方形竪穴遺構

#### 第1号方形竪穴遺構（第37・38図 PL12）

**位置** 調査区南部のB2f1区、標高26mほどの台地平坦面に位置している。

**重複関係** 第1号井戸に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸7.20m、短軸4.00mの隅丸長方形で、主軸方向はN-48°-Eである。壁は高さ32～38cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、北側は東コーナー部を除き踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

**ピット** 13か所。P1～P10は南西壁を除いた壁下に等間隔で並んでいることから、壁柱穴である。

#### 土層解説（P1）

1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量

**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。第9・10層は貼床の構築土である。

#### 土層解説

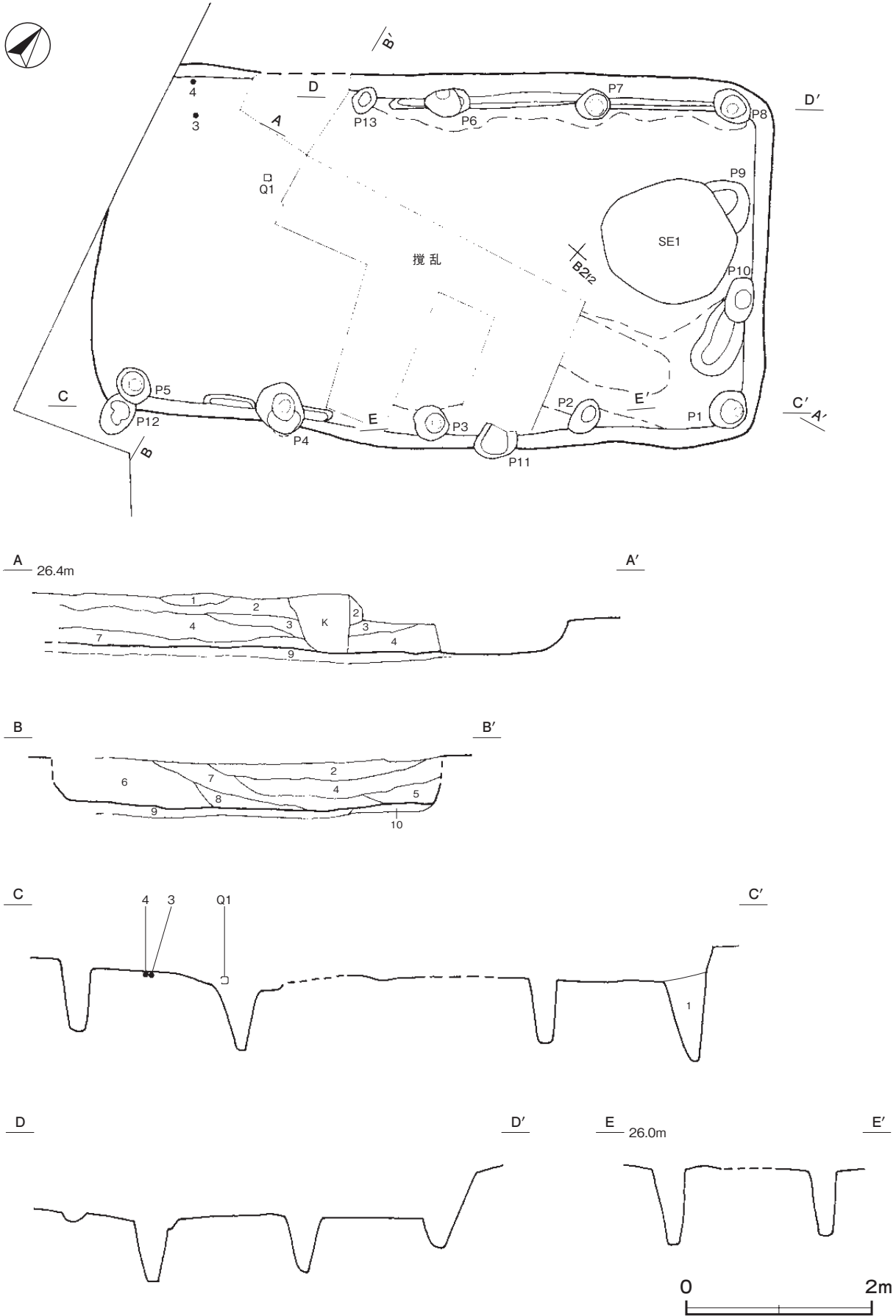
1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量	7 灰黄褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量	8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
4 暗褐色 ロームブロック微量	9 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
5 暗褐色 ローム粒子微量	10 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師質土器片25点（小皿4、鉢3、甕類18）、石器1点（砥石）のほか、石核1点、瑪瑙2点が西側を中心に散在した状態で出土している。3・4は西側コーナーの床面から逆位の状況で出土している。2は第1号井戸跡の覆土中から出土したが、本跡に伴うものと判断した。Q1は床面から出土したものが、第1号井戸跡出土の破片と接合したものである。

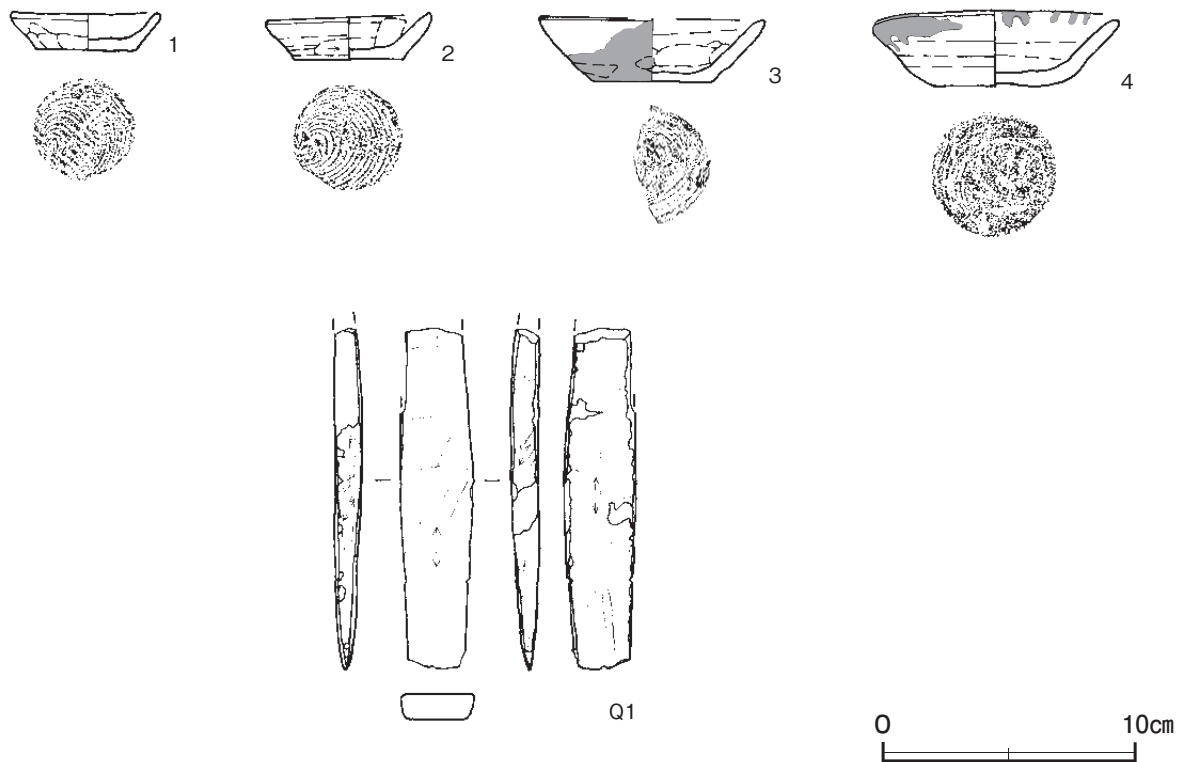
**所見** 時期は、出土土器から16世紀後葉に比定できる。壁柱穴の配置から、南西に入口があったと考えられる。炉や竈のような施設は確認できず、性格は不明である。

#### 第1号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	5.7	1.6	4.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下位横ナデ 底部内面横ナデ後口唇部横ナデ 底部回転糸切り	覆土中	100% PL14 煤付着
2	土師質土器	小皿	6.4	1.8	4.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	体部外面下位横ナデ 底部回転糸切り	SE 1	100% PL14
3	土師質土器	小皿	[8.8]	2.5	4.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	体部外面下位横ナデ 底部回転糸切り 体部外面から底部にかけて油煙付着	床面	50% PL14
4	土師質土器	小皿	9.6	3.0	5.0	長石・石英・黒色粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部内面渦巻き状のナデ 底部外面回転糸切り後ナデ	床面	100% PL14 油煙付着
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q1	砥石	(13.5)	2.9	1.1	(55.82)	凝灰岩	砥面4面		床面	PL16	



第 37 図 第 1 号方形竪穴遺構実測図



第38図 第1号方形竪穴遺構出土遺物実測図

## 2 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、塚1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

### 塚

#### 第1号塚（第39～44図 PL12・13）

**位置** 調査区中央部のA 1j0～B 2c3区、標高26mほどの台地平坦面に位置している。

**確認状況** 調査前の段階で本跡の墳頂部付近には雲母片岩の石材が露出していた。本跡は古墳として登録されており、石材は古墳の石室を形成していたものと考え調査を開始した。

**重複関係** 第6～11・13～15号土坑の埋没後に構築されている。

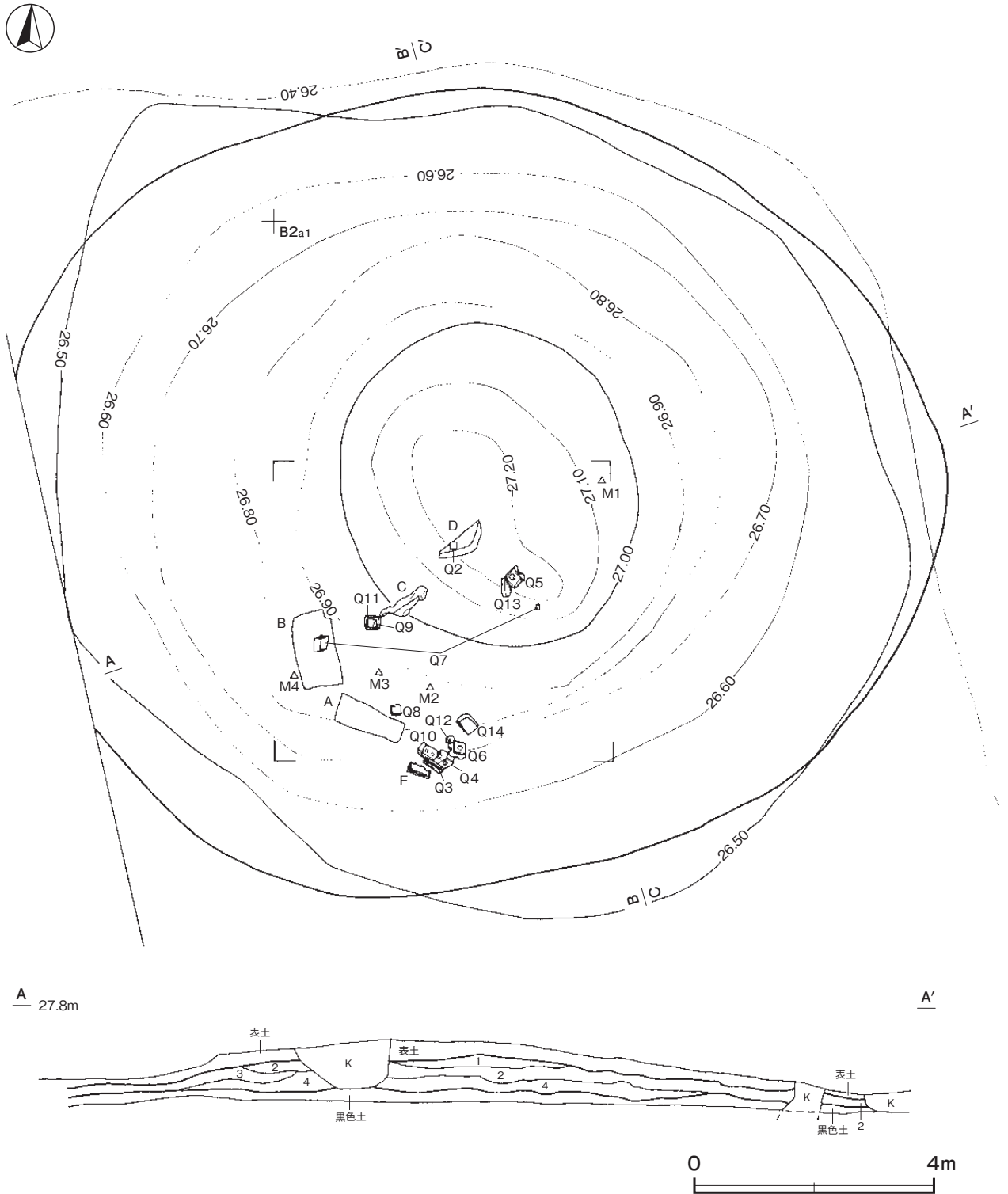
**規模と形状** 長径16.28m、短径12.80mの楕円形で、長径方向はN-76°-Wである。基盤となる黒色土層から墳頂部までの高さは88cmである。

**構築土と構造** 構築土は5層に分層できる。基盤となる黒色土上に土を積み上げて構築している。構築土最上面は全体的に表土化して分層できなかったが、石材が露出していた状況から判断して、塚部分は現地表面の高さまで盛土されていたと考えられる。

#### 土層解説

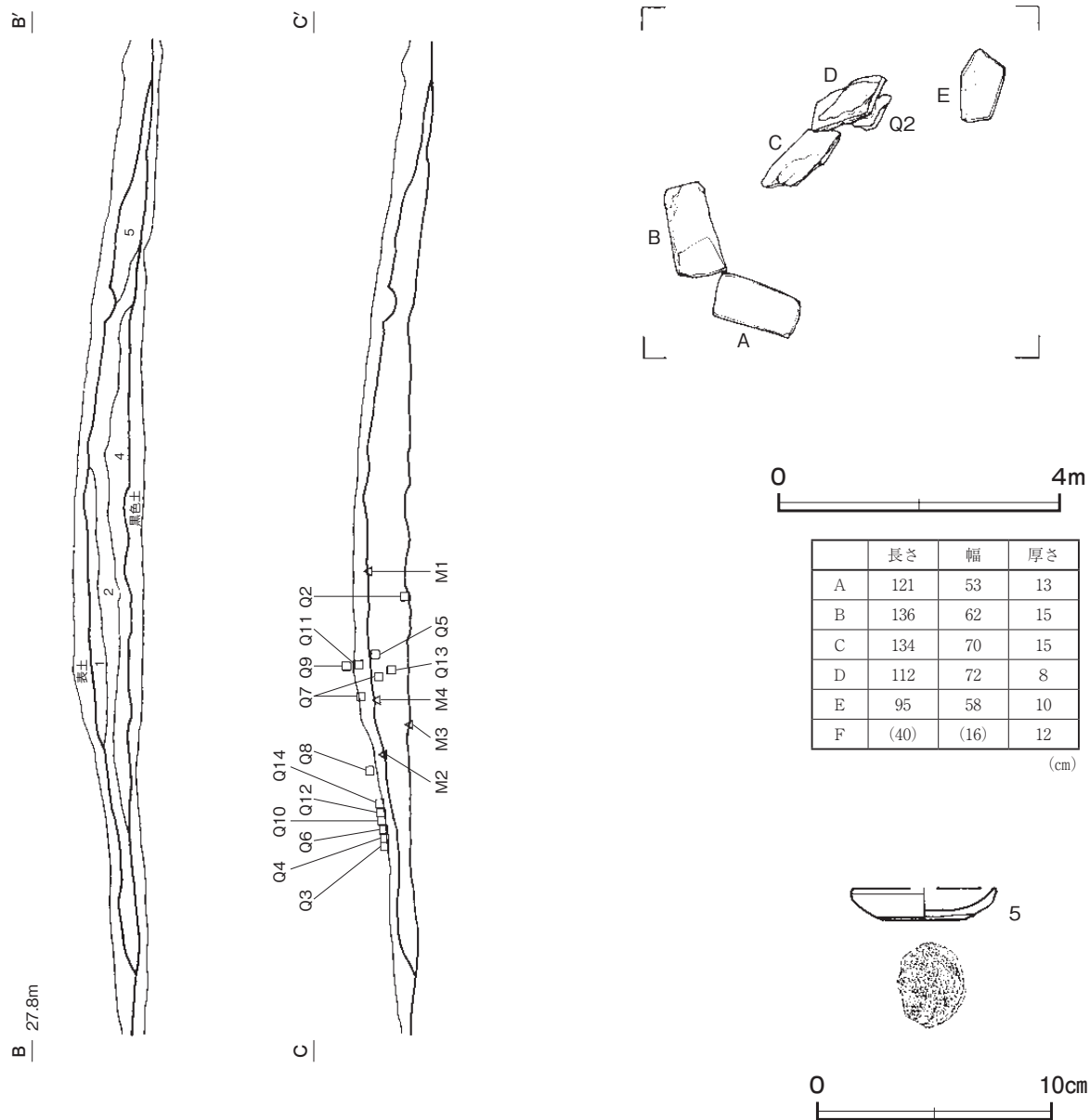
- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子極微量、締まり弱い | 4 黒褐色 ローム粒子微量       |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、締まり弱い  | 5 黒褐色 ローム粒子微量、締まり弱い |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量        |                     |

**遺物出土状況** 土師質土器片10点（小皿4、甕類6）、石仏2点（胎藏界大日如来像、如意輪観音像）、石製品24点（宝篋印塔部材10、五輪塔部材3、石材10、不明1）、銭貨5点（寛永通寶4、寛永通寶<sub>り</sub>1）のほか、縄文土器片9点（深鉢）、近代以降の陶器2点（碗、徳利）、磁器1点（湯呑）、銭貨1点（一銭硬貨）、剥片1



第 39 図 第 1 号塚実測図

点が出土している。墳頂部を精査した段階で、雲母片岩の大形石材 4 点及び Q 3～Q 14 が露出した状態になっていた。大形の石材は計 5 点 (A～E) 出土しており、Q 2 はそのうち 1 点 (D) の下から出土している。Q 3～Q 14 は、Q 9・Q 11 が Q 9 が上になるように重ね合わされた状態であったほかは、それぞれ単独で南側斜面に集まるように出土している。Q 3 に隣接している石材 (F) は、如意輪観音像の台座であったことが考えられる。大形の石材については、計測値のみ記載した。M 3 は塚構築土中から出土している。



第40図 第1号塚・出土遺物実測図

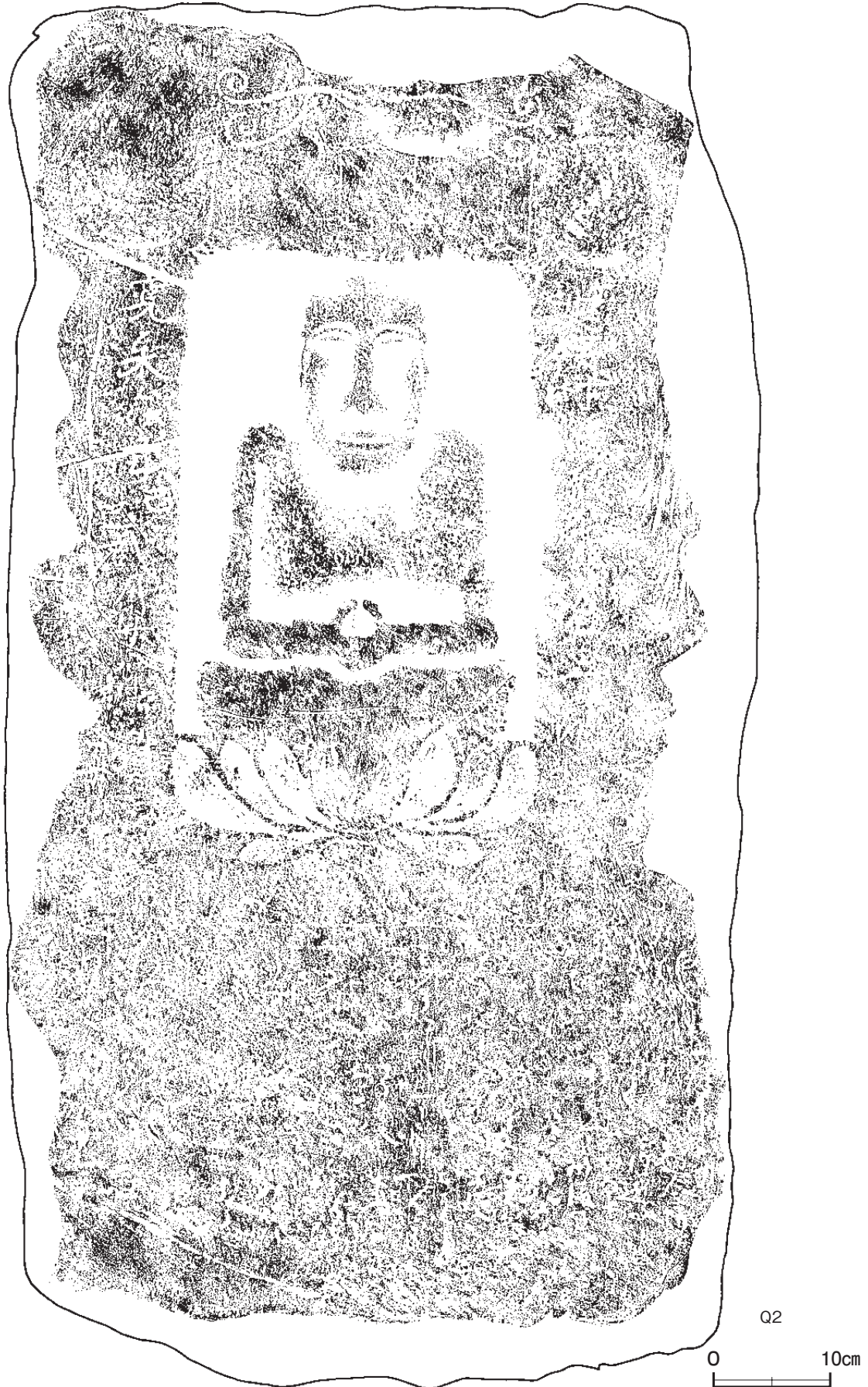
所見 構築時期は、出土した銭貨から寛永13（1636）年以降である。寛永6（1629）年の記銘がある大日如来像が墳頂部付近から出土していることから大日如来信仰に伴う塚であると考えられ、構築時期も寛永期（1624～1645年）に収まるものと考えられる。大形石材は、大日如来像を覆う祠の構築材であった可能性がある。また、南部斜面上に石製品が集中しており、ここに宝篋印塔や五輪塔の部材を整理してまとめていたと考えられる。

第1号塚出土遺物観察表（第40～44図）

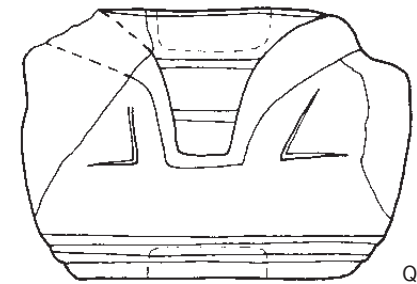
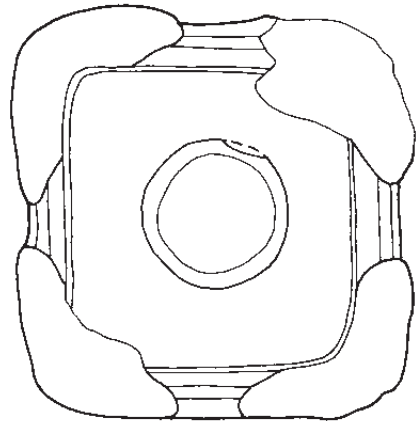
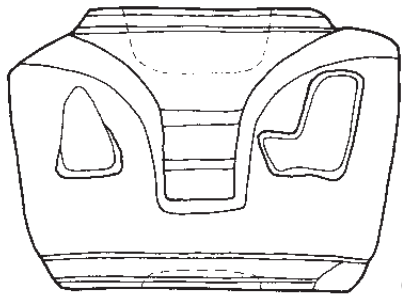
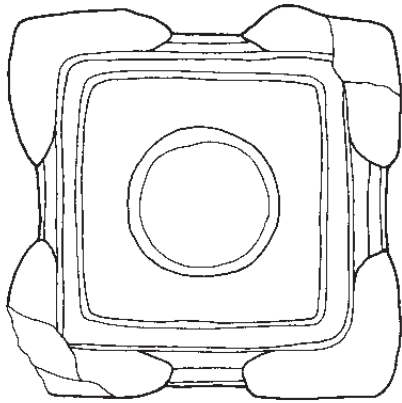
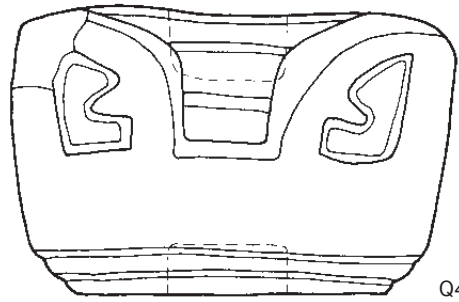
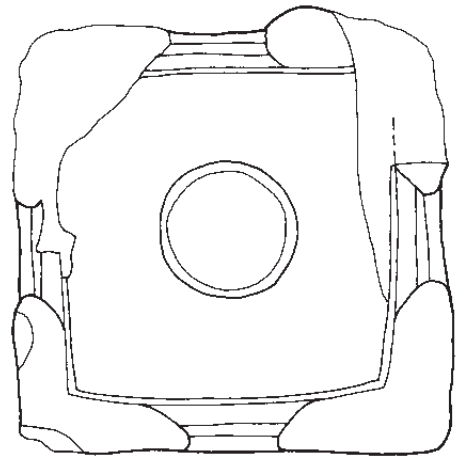
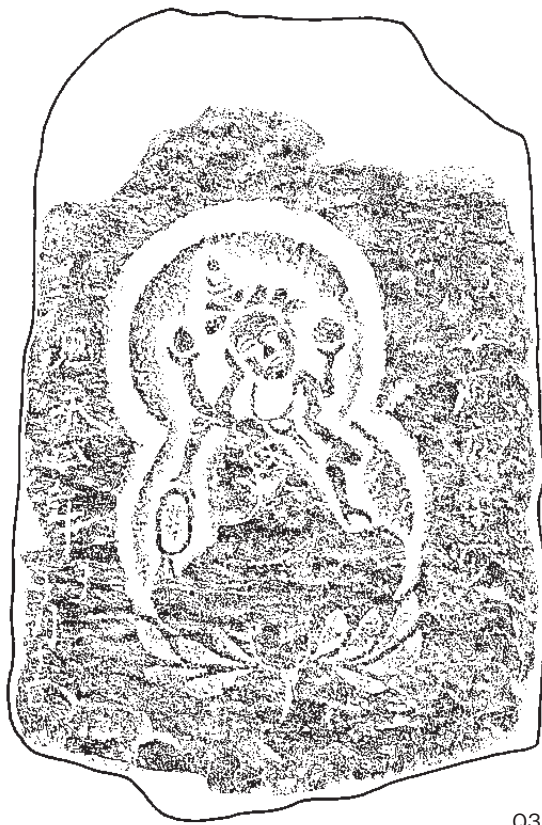
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	土師質土器	小皿	[6.0]	1.3	3.8	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	体部外・内面ナデ 底部貼り付け 底部回転糸切り	覆土中	40% PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	石仏	124.0	65.0	12.0	-	雲母片岩	自然石型 胎藏界大日如来像浮彫 記銘「□待村。法列。□□□□□□」 「寛永六年己巳。八月十。八日。」 下部文字多数人名。	塚表層	PL13
Q3	石仏	53.6	35.6	8.2	35,200	雲母片岩	自然石型 如意輪観音像浮彫 記銘「□□□字□人カ」 「寛文。八年末。十月十六」	塚表層	PL13

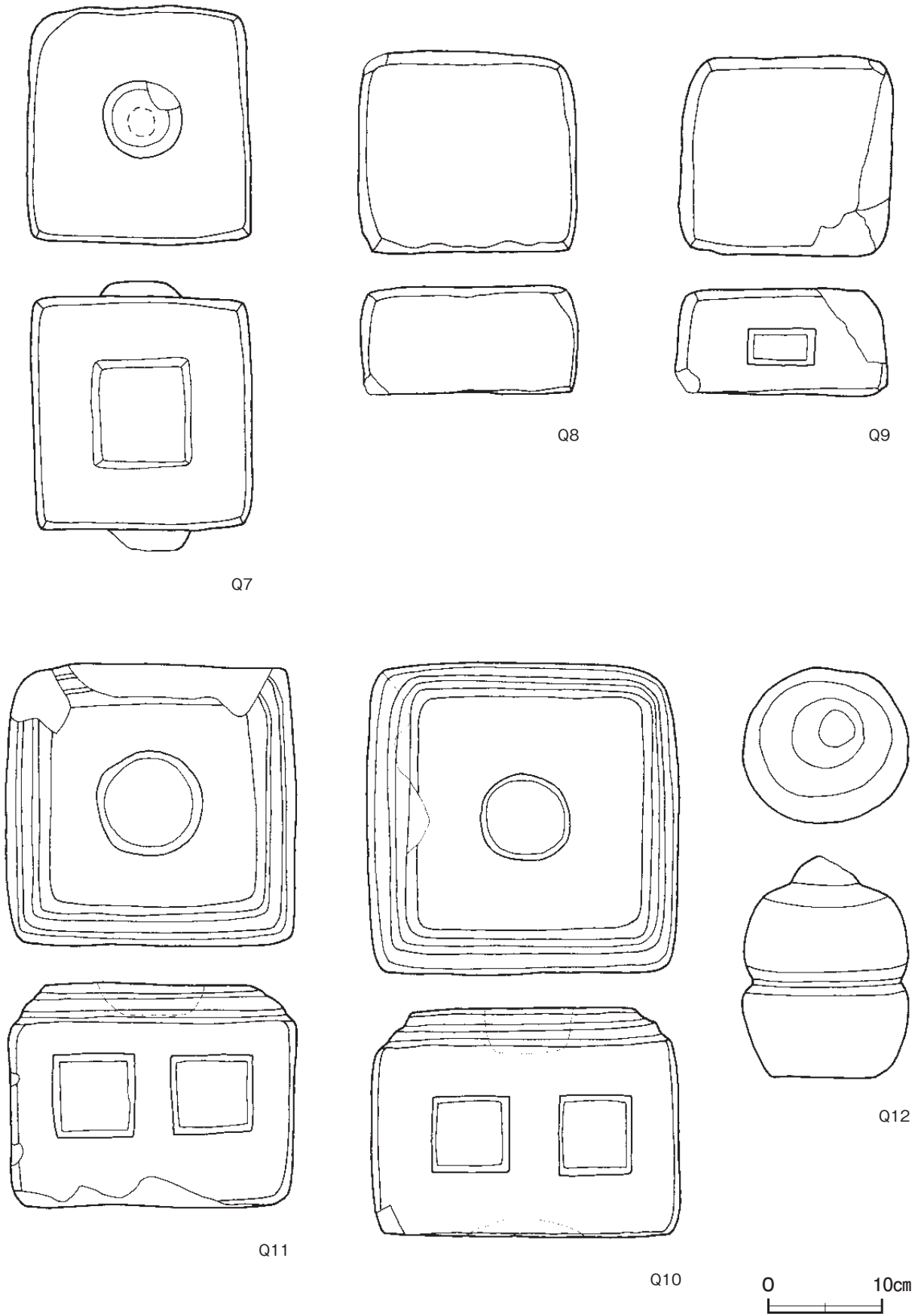


第 41 図 第 1 号塚出土遺物実測図 (1)



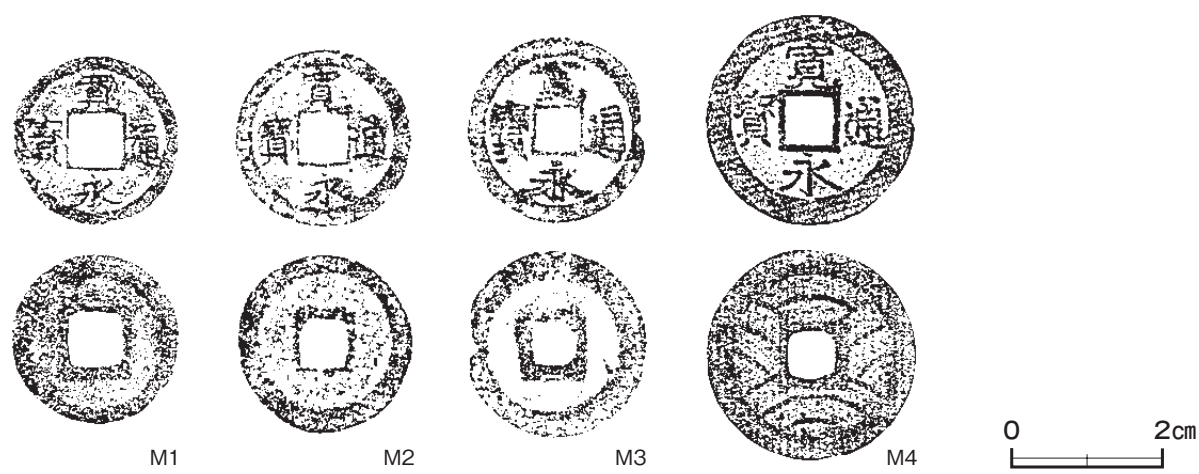
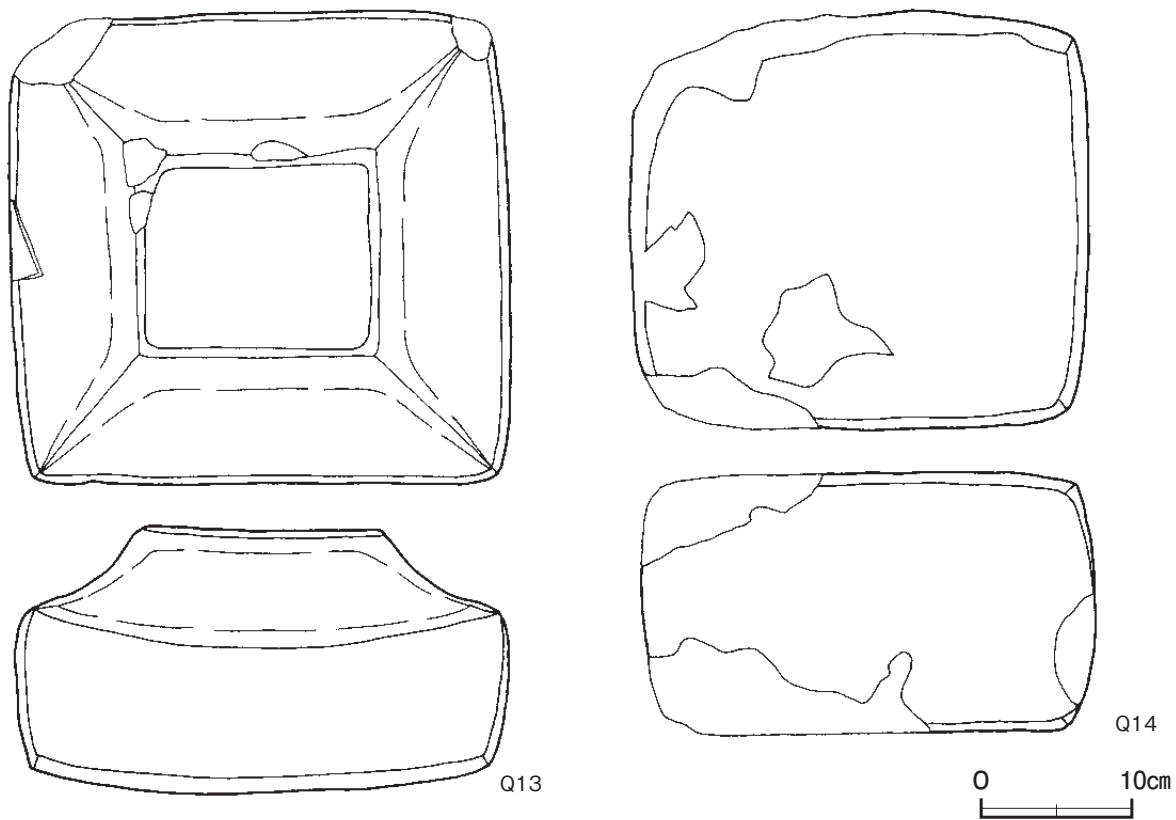
0 10cm

第 42 图 第 1 号塚出土遺物実測図 (2)



第43図 第1号塚出土遺物実測図(3)





第44図 第1号塚出土遺物実測図(4)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	宝篋印塔	29.6	29.4	19.6	(28,100)	花崗岩	笠部 四隅に隅飾りを装飾 一部欠損	塚表層	PL15
Q 5	宝篋印塔	25.8	25.8	18.8	(20,700)	花崗岩	笠部 四隅に隅飾りを装飾 一部欠損	塚表層	PL15
Q 6	宝篋印塔	27.2	27.8	18.0	(21,500)	花崗岩	笠部 四隅の隅飾り部ほぼ欠損	塚表層	PL15
Q 7	宝篋印塔	21.0	19.6	23.4	16,999	花崗岩	塔身部 四方側面に長方形区画を1か所	塚表層	PL15
Q 8	宝篋印塔	17.7	19.2	9.6	6,900	花崗岩	塔身部 四方側面の区画なし	塚表層	
Q 9	宝篋印塔	17.6	18.8	9.4	(6,200)	花崗岩	塔身部 四方側面に長方形区画を1か所 一部欠損	塚表層	PL15
Q 10	宝篋印塔	27.4	27.1	20.0	30,700	花崗岩	基礎部 四方側面に長方形区画を2か所	塚表層	PL14
Q 11	宝篋印塔	25.0	25.6	19.8	(23,800)	花崗岩	基礎部 四方側面に長方形区画を2か所 一部欠損	塚表層	PL14
Q 12	五輪塔	19.2	14.6	13.6	(5,800)	花崗岩	空風輪 断面は空輪部楕円形, 風輪部逆台形	塚表層	PL15
Q 13	五輪塔	31.4	33.0	19.8	(30,800)	花崗岩	火輪 軒先は外反 一部欠損	塚表層	PL15
Q 14	五輪塔	27.4	30.0	17.6	(28,600)	花崗岩	地輪 断面隅丸長方形 隅部一部欠損	塚表層	PL15

番号	種別	銭名	径	孔径	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M1	銭貨	寛永通寶	2.26	0.70	1.56	銅	1697年	新寛永 背無銭	塚表層	PL16
M2	銭貨	寛永通寶	2.41	0.62	2.48	銅	1697年	新寛永 背無銭	塚表層	PL16
M3	銭貨	寛永通寶	2.49	0.55	(3.27)	銅	1636年	古寛永 背無銭	塚構築土	PL16
M4	銭貨	寛永通寶	2.82	0.61	4.80	真鍮	1769年	背面十一波	塚表層	PL16

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明確にできなかった井戸跡1基、土坑15基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 井戸跡

第1号井戸跡 (第45図 PL12)

**位置** 調査区南部のB2e2区、標高26mほどの台地平坦面に位置している。

**確認状況** 第1号方形竪穴遺構の床面で確認した。

**重複関係** 出土遺物の接合状況から、第1号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

**規模と形状** 確認面は長径1.42m、短径1.22mの楕円形で、長径方向はN-70°-Eである。上部は深さ30cmほどまで漏斗状に掘り込まれ、以下で径1mほどの円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ190cmまで掘り込まれていることを確認したが、安全面の配慮から調査を中止した。

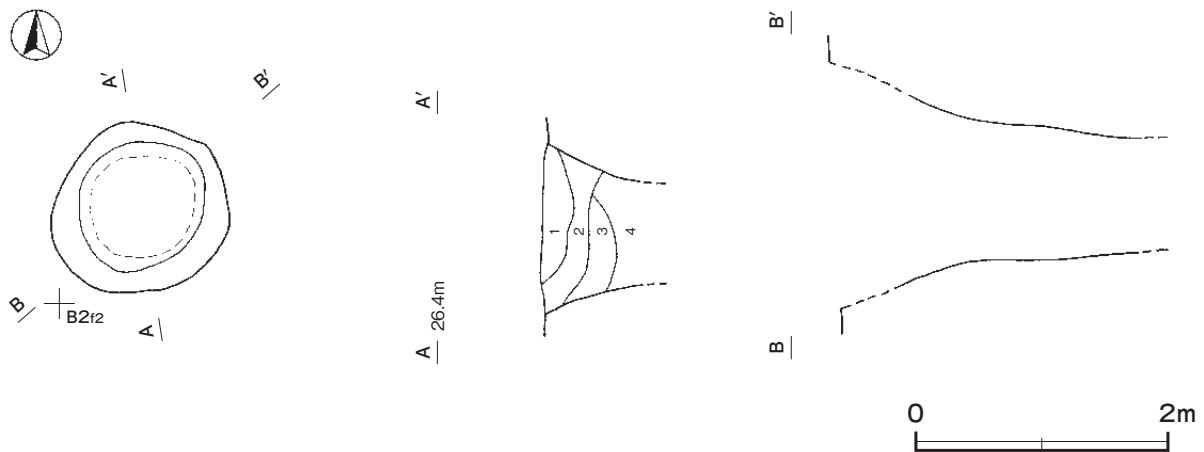
**覆土** 4層に分層できる。粘土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 ぶい黄褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック中量
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物2点は、どちらも第1号方形竪穴遺構から流れ込んだものである。そのほか、深さ110cmより下から幅50cm・高さ100cm程度の切り株が出土している。井戸を埋め戻す際に投げ込まれたものと考えられる。

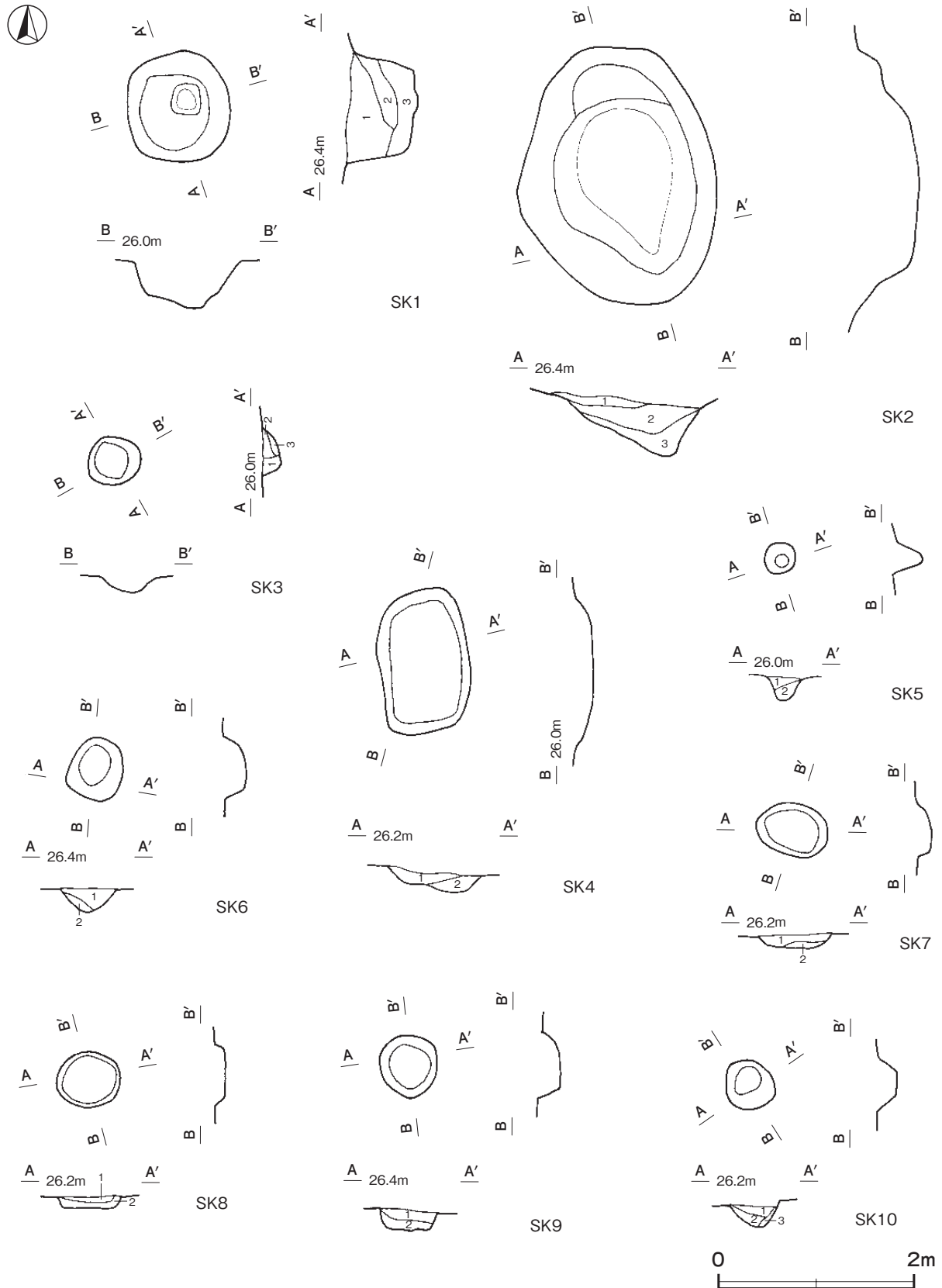
**所見** 本跡に伴う遺物がなく、重複関係から時期は近世以降である。



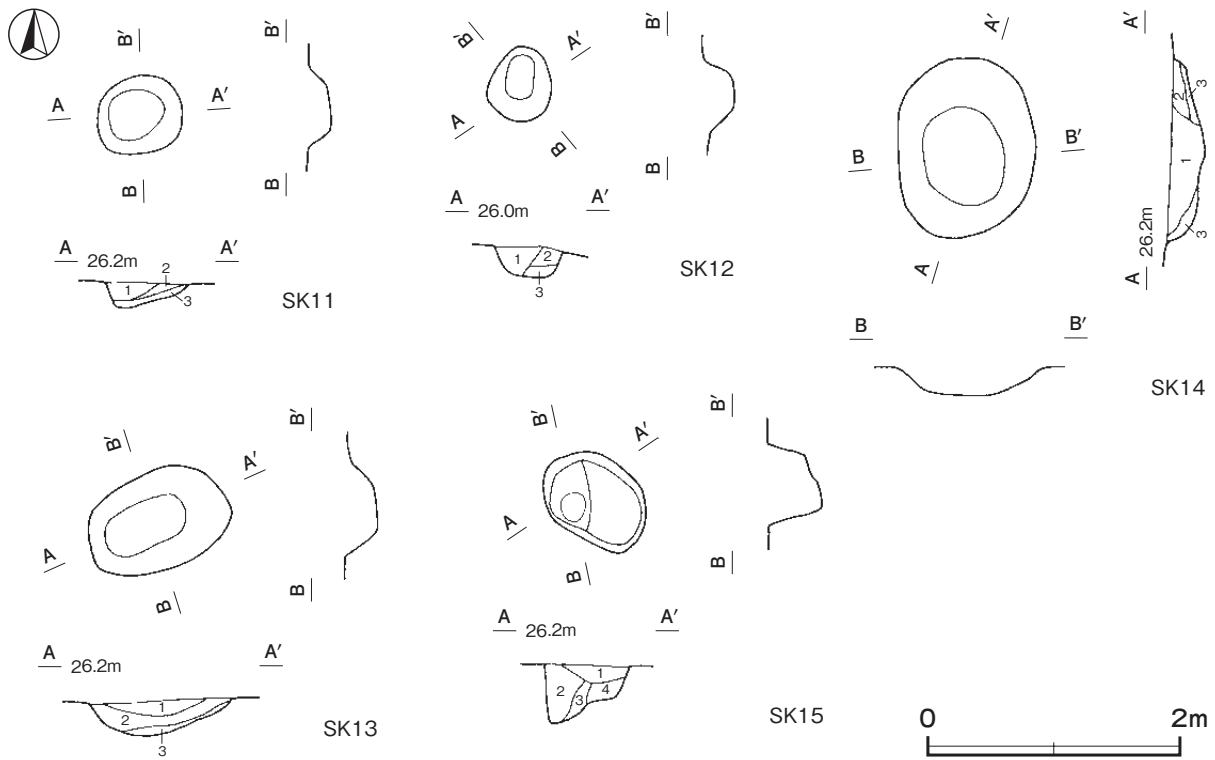
第45図 第1号井戸跡実測図

(2) 土坑 (第46・47図)

土坑の規模や形状等について、実測図、土層解説と一覧表を掲載する。



第46図 その他の土坑実測図(1)



第 47 図 その他の土坑実測図 (2)

第 1 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第 2 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 3 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 4 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第 5 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第 6 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 7 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第 8 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第 9 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 10 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 11 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第 12 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第 13 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

第 14 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 15 号土坑土層解説

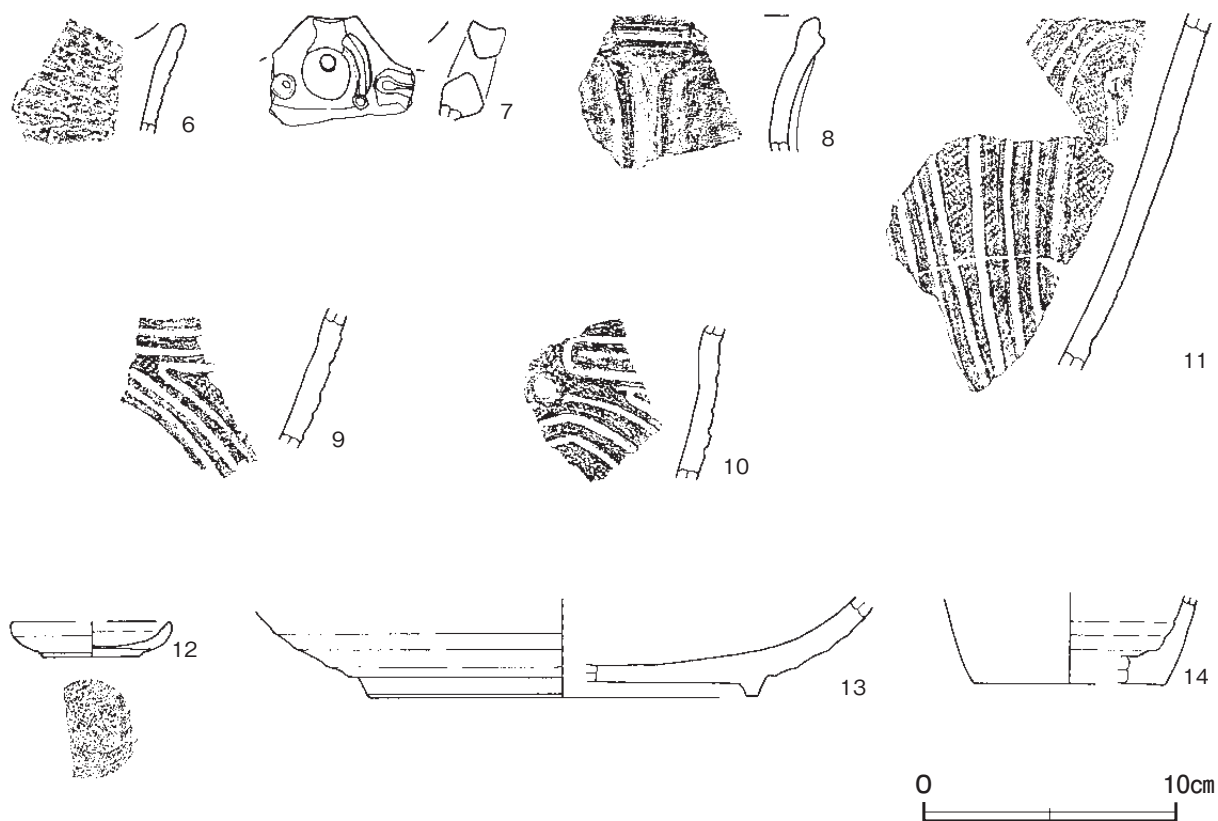
- 1 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

表5 その他の土坑一覧表

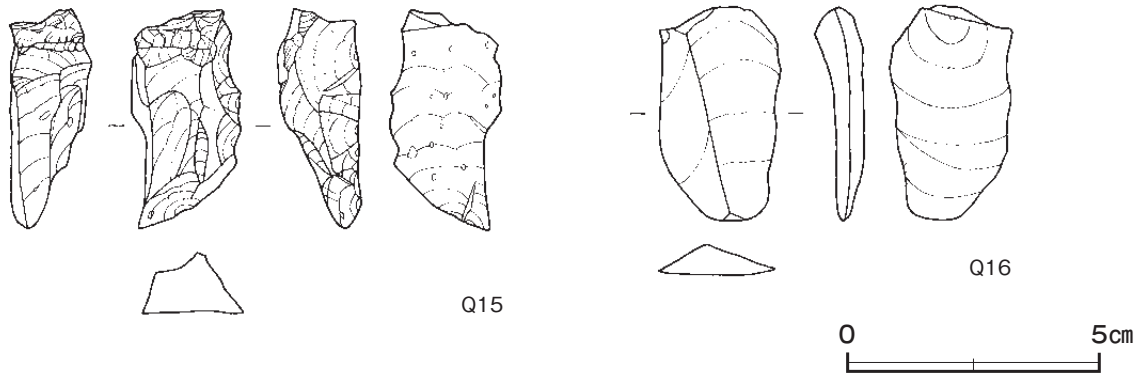
番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 1 a6	-	円形	1.15 × 1.05	70	外傾	平坦	人為	陶器	
2	B 2 d3	N-14°-W	楕円形	2.71 × 2.04	78	外傾・緩斜	平坦	人為		
3	A 1 j9	-	円形	0.56 × 0.52	14	緩斜	平坦	人為		
4	B 2 a4	N-8°-W	隅丸長方形	1.46 × 0.94	17	緩斜	平坦	自然		
5	B 1 a7	N-30°-E	楕円形	0.35 × 0.31	26	外傾	平坦	自然		
6	B 1 c0	N-15°-E	楕円形	0.65 × 0.58	25	外傾	平坦	自然		本跡→TM1
7	B 2 c1	N-75°-W	楕円形	0.74 × 0.54	13	外傾・緩斜	平坦	自然		本跡→TM1
8	B 2 c2	-	円形	0.64 × 0.59	11	外傾	平坦	自然		本跡→TM1
9	B 1 c0	N-17°-W	楕円形	0.65 × 0.59	21	外傾	平坦	自然		本跡→TM1
10	B 2 b3	-	円形	0.55 × 0.51	19	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→TM1
11	B 2 a2	N-46°-E	楕円形	0.73 × 0.64	16	外傾・緩斜	平坦	自然		本跡→TM1
12	A 2 j2	N-12°-E	楕円形	0.60 × 0.40	21	外傾・緩斜	平坦	人為	縄文土器	
13	A 1 j0	N-61°-E	楕円形	1.13 × 0.75	25	外傾・緩斜	平坦	自然		本跡→TM1
14	B 2 a2	N-5°-W	楕円形	1.42 × 1.09	21	緩斜	平坦	自然		本跡→TM1
15	A 2 j1	N-48°-W	楕円形	0.90 × 0.64	42	ほぼ直立	平坦	人為		本跡→TM1

(3) 遺構外出土遺物 (第48・49図)

遺構に伴わない遺物について、実測図及び観察表を掲載する。



第48図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 49 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第 48・49 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	半截竹管による横位の連続刺突文	表土	PL16 前期中葉
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	波状口縁 口唇部直下に円孔	表土	PL16 後期前葉
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部に横位の沈線文 胴部に縦位の隆帯貼り付け	表土	PL16 後期前葉
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文 R L 施文後、太沈線を施文	表土	PL16 後期中葉
10	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文 R L 施文後、横位の太沈線を施文	表土	後期中葉
11	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	単節縄文 L R 施文後、縦位の太沈線を施文	TM 1	PL16 後期中葉
12	土師質土器	小皿	[6.2]	1.4	3.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面ナデ 底部貼り付け後底部回転糸切り	表土	55% PL14

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
13	陶器	鉢	-	(3.9)	[15.6]	緻密・浅黄色／緑灰	内底面 5 条の波状沈線 緑釉流し掛け	黄釉・緑釉	美濃	表土	10% PL14
14	陶器	德利	-	(3.6)	[7.8]	緻密・にぶい赤褐	外底面露胎	鉄釉	瀬戸・美濃	表土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	剥片	4.4	2.2	1.6	15.22	黒曜石	前面に多方向からの細かい剥離	表土	PL16 高原山産。
Q 16	剥片	4.2	2.4	1.1	7.54	珪質頁岩	縦長剥片 前面に前段階の剥離面	表土	PL16

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

本跡は従来古墳として登録されていたが、今回の調査で寛永期に構築された塚であることが判明した。また、宝篋印塔や五輪塔が出土しており、塚構築以前には中世の墓域が存在していたことが考えられる。ここでは、各時代の様相について概観し、若干の考察を加えてまとめとする。

### 2 室町時代

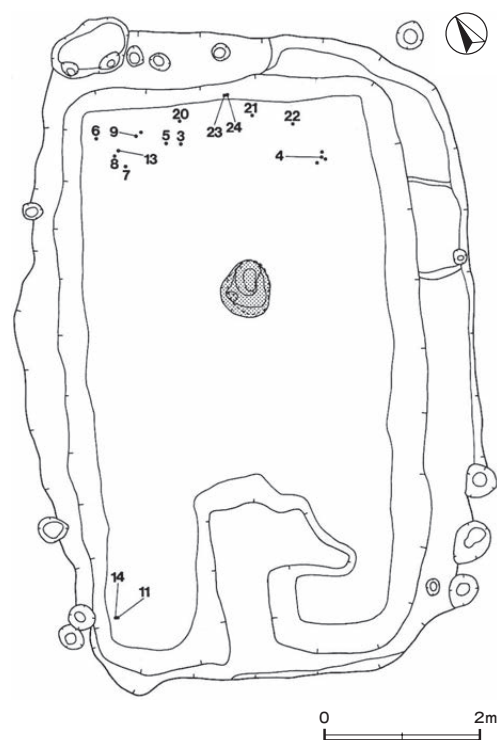
#### (1) 方形竪穴遺構

今回の調査で、方形竪穴遺構を1棟確認した。これは、長軸7.20m、短軸4.00mの隅丸長方形で、壁柱穴を持つ形状という、県内で確認される同時期の方形竪穴遺構とはやや異なる形状を示している。同様の規模を持つ中世の遺構として、龍ヶ崎市屋代城跡の第28・38号方形竪穴遺構が挙げられる<sup>1)</sup>。第28号方形竪穴遺構は、長軸8.34m、短軸5.82mの隅丸長方形で、炉を有し、入口と考えられる南西部にスロープが設けられている(第50図)。また等間隔ではないが、壁柱穴と考えられるピットが南西以外の壁に廻っている。第38号方形竪穴遺構は、後世の溝に掘り込まれており全体像は不明であるが、長軸7.5m、短軸4.5m程度の隅丸長方形と推測される。どちらも床面から土師質土器の小皿が複数枚出土しており、第38号方形竪穴遺構が13世紀後葉から14世紀前葉、第28号方形竪穴遺構が14世紀中葉から15世紀第1四半期に比定されている<sup>2)</sup>。報告書ではこれら遺物の出土状況から、「物置」または「集会所」的な機能を考えている。

当遺跡の方形竪穴遺構は16世紀後葉に位置づけられるので、同じ中世の範疇ではあるが年代は大きく異なる。一方で、遺物は土師質土器の小皿が主体を占めている点も類似しており、同様の目的で建てられた施設と考えてよいのではないかとと思われる。類例の増加を待って再検討したい。

#### (2) 塚から出土した石造物

第1号塚からは、宝篋印塔部材10点と五輪塔部材3点が出土している。宝篋印塔の笠部隅飾りの開き具合や、五輪塔空風輪の溝状区画や火輪の軒の形状などから、概ね16世紀代のもと考えられる。これらの部材は、塚の南側斜面地に集められた状況で確認されている。このような状況は土浦市下郷遺跡<sup>3)</sup>や、かすみがうら市戸崎中山遺跡<sup>4)</sup>でも確認されており、墓制の変遷に伴い前時代のものの処理を行ったものと考えられる。戸崎中山遺跡の中世墓は戸崎城跡の西側に位置しており、城との関係が考えられる。同様に当遺跡の南西約200mの位置に柴崎片岡上館跡が存在しており、当遺跡内にはそれに伴う墓域が存在していたことが考えられる。柴崎片岡上館跡では平成19年の調査で16世紀後半の堀と土塁が確認されて



第50図 屋代城跡第28号方形竪穴遺構実測図

おり、詳細は不明ながらそれ以前の堀や遺物も確認されている<sup>5)</sup>。また、17世紀以降の整地層や池跡も確認されており、江戸時代以降から現代に至るまで集落が形成されてきたことが判明している。柴崎片岡上館跡は、天正2(1574)年の土浦城の戦の際に小田方に参戦していた片岡治部左衛門の「金田郷中ノ館」<sup>6)</sup>で、片岡氏は小田氏滅亡後に帰農したものと考えられる。

### 3 江戸時代

第1号塚は、古墳として登録されておりその前提で調査を行ったが、周溝や埋葬施設が存在せず近世の塚であることが判明した。第1号塚からは、寛永6(1629)年の記銘がある大日如来像と寛文8(1668)年と思われる記銘がある如意輪観音像が出土している。

大日如来像は、墳頂付近から出土しており、この塚に祀られていたことが考えられる。浮彫されている大日如来は、その姿から胎蔵界大日如来とわかる<sup>7)</sup>。今回出土した胎蔵界大日如来像は、特徴的な様相から「寛永の大日如来」として知られており、徳原聰行氏らが調査報告を行っている<sup>8)</sup>。これによると「寛永の大日如来」は寛永3(1626)年から寛永8(1631)年の6年間に、茨城県南部及び西部で集中的に作られたようである。徳原氏らの調査では県内に50例確認されており、そのほか石岡市でも同様のものと考えられる石仏が報告されている<sup>9)</sup>。この中ではつくば市が21例と最も多く、次いで下妻市となり、分布の中心となっている(表6)。本跡出土の石仏はつくば市内で22例目となり、まだ未確認のものが存在している可能性もある。また、徳原氏は県内の古文書や絵図から「大日塚」を、また字名から大日信仰に関わるものを探している。その結果、当時この地域には村に必ず一つ大日塚があったのではないかと、という結論に至っている<sup>10)</sup>。県内でみられる大日塚に伴う大日碑には、「湯殿山大権現」の文字がみられるものがあり、大日塚は湯殿山信仰と関連が深いと考えられている。また、元和・寛永期(1615～1645年)に急速に広まる大日信仰は、戦乱が治まった後の社会の変革期に、湯殿山の先達・行人の関東進出が相まって起こった現象と考えられている<sup>11)</sup>。そうした中で「寛永の大日如来」の分布は、同一の行人が布教活動を行った範囲とも考えられる。その後寛文期(1661～1673年)まで盛行した大日塚築造も、再び社会の変化によって衰退していく。本跡のように字名だけにその記憶を残し忘れ去られてしまったものも少なくないようである。

如意輪観音像は十九夜待の主尊として、大日信仰の盛行後に多く造立されている。今回出土した如意輪観音像は、雲母片岩に浮彫されたもので石材としては珍しいものである。また、記銘が判然としないものの、寛文期に造立されたものとするれば、周辺地域の状況をもみてもかなり古い時期のものと考えられる<sup>12)</sup>。

表6 「寛永の大日如来」の確認数

市町村	確認数
稲敷市	2
龍ヶ崎市	2
牛久市	4
土浦市	2
つくば市	21
下妻市	10
石岡市	1
筑西市	1
つくばみらい市	1
常総市	4
坂東市	3
鹿沼市(栃木県)	1
総計	52

### 4 おわりに

中世においては、小田氏幕下片岡氏に関連すると考えられる墓域と、同時期に存在していたであろう方形竪穴遺構を確認した。近世においては、湯殿山大日信仰に伴う塚と、茨城県南部・西部に分布する「寛永の大日如来」を確認した。当遺跡から出土した、中世の石塔類がその役目を終わらせ次の時代に信仰の対象である塚に集積されている状況は、時代の変化を検討するための一つの事例と考えられる。それ以外に、溝の廃絶時に投棄されたり、土坑墓に埋められたりする事例も数多くみられる。同じつくば市内でも上野古屋敷



遺跡<sup>13)</sup>や梶内山遺跡<sup>14)</sup>、新牧田遺跡<sup>15)</sup>などが挙げられる。こうした事例との比較検討を行うことが、中世から近世への変化を考える上での課題の一つであると思われる。

#### 註

1) 報告書では「住居跡状遺構」として報告されている。

鈴木美治「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 15 屋代B遺跡Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第40集  
1987年3月

2) 川村満博「茨城県内出土の非ロクロ成形かわらけについて」『茨城県中世考古学の最前線 ～編年と基準資料～』茨城県考古学協会 2011年1月

3) 平石尚和「一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 下郷古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第167集 2000年3月

4) 浦和敏郎「戸崎中山遺跡 霞ヶ浦環境センター(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第218集 2004年3月

5) 間宮正光・平岡重明・石橋充「柴崎片岡上館跡-宅地造成事業に伴う発掘調査報告書-」島帆ハウス株式会社・有限会社 新成田総社・つくば市教育委員会 2007年7月

6) 小丸俊雄「小田氏十五代-豪族四百年の興亡-(下)」筑波書林 1979年3月

7) 大日如来は、摩訶毘盧遮那如来・大毘盧遮那如来ともいい、密教では全ての仏の上に立つ存在として位置づけられており、ほかの如来とは異なり宝冠や装飾具を着けた王者の姿で表されている。密教では、「大日経」と「金剛頂経」という二つの経典で世界を説いており、その胎藏界・金剛界それぞれの中心として位置づけられている。その姿は、胎藏界では左手の上に右手を重ね両親指の先を合わせる法界定印、金剛界では左手の人差し指を伸ばし、それを右手で包み込む智拳印を結んでいる。

大塚博・関口満・鈴木隆浩「土浦の石仏-新治地区編-」土浦市教育委員会 2014年3月

8) 徳原聰行「常総・寛永期の大日石仏」筑波書林 2003年3月

9) 黒沢彰哉「石岡の石仏」石岡市教育委員会 1996年11月

10) 前掲註8)に同じ

11) 山中正夫「民間信仰」『阿見町史』阿見町 1983年3月

12) 前掲註7)・9)に同じ

13) 三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月

14) 川村満博・島田和宏「梶内山遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)及び高速自動車国道常磐自動車道つくばジャンクション(仮称)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第199集  
2003年3月

15) 小川和博・佐藤政則・大淵淳志・遠藤啓子・石橋充「新牧田遺跡-大規模店舗建設事業に伴う発掘調査報告書-」エム・ケ一株式会社・有限会社日考研茨城・つくば市教育委員会 2014年3月

#### 参考文献

・日本石造物辞典編集委員会「日本石造物辞典」吉川弘文館 2012年12月

・千葉隆司「小田氏の仏教と中世墓-霞ヶ浦沿岸の古墳につくられた中世墓の分析をとおして-」『婆良岐考古』第27号  
2005年5月

・国史大辞典編集委員会「国史大辞典」第6巻吉川弘文館 1985年11月

写 真 图 版



PL1



遺跡全景（平成26年度調査前）



遺跡全景（平成27年度）

PL2



南西部調査区全景  
(平成28年度)



中央部調査区全景  
(平成26年度)



北東部調査区全景  
(平成27年度)

PL3

調査前風景  
(平成21年度)



第1号堀跡南西部  
(平成28年度)



第1号堀跡中央部  
(平成26年度)



PL4



第1号堀跡北東部  
(平成27年度)



第1号堀跡北東部  
(平成27年度)



第1号堀跡北東部  
(平成27年度)

PL5

第 1 号 堀 跡  
土 層 断 面  
( 平 成 27 年 度 )



第 1 号 堀 跡  
遺 物 出 土 状 況  
( 平 成 27 年 度 )



第 1 号 土 壘  
土 層 断 面  
( 平 成 26 年 度 )

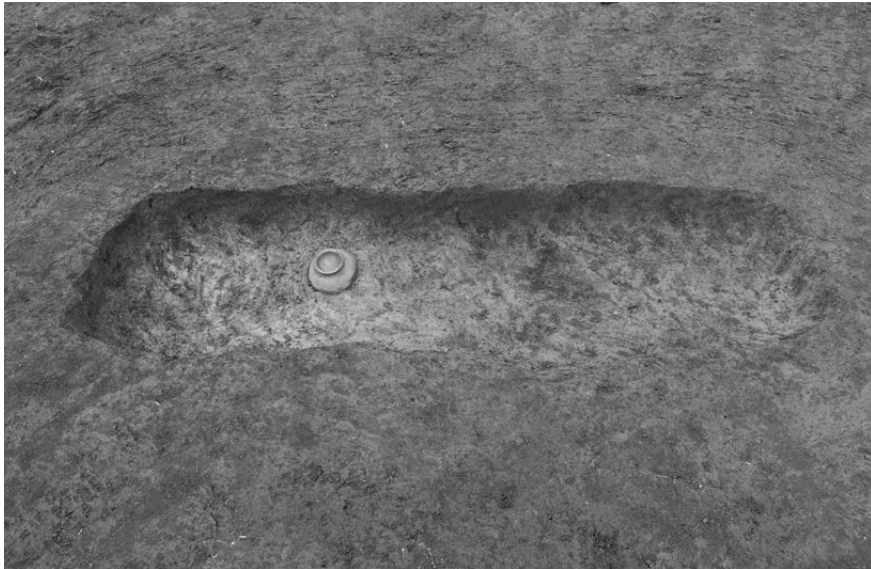




PL6



第 6 号 陷 し 穴



第 46 号 土 坑



第 27 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 況

PL7



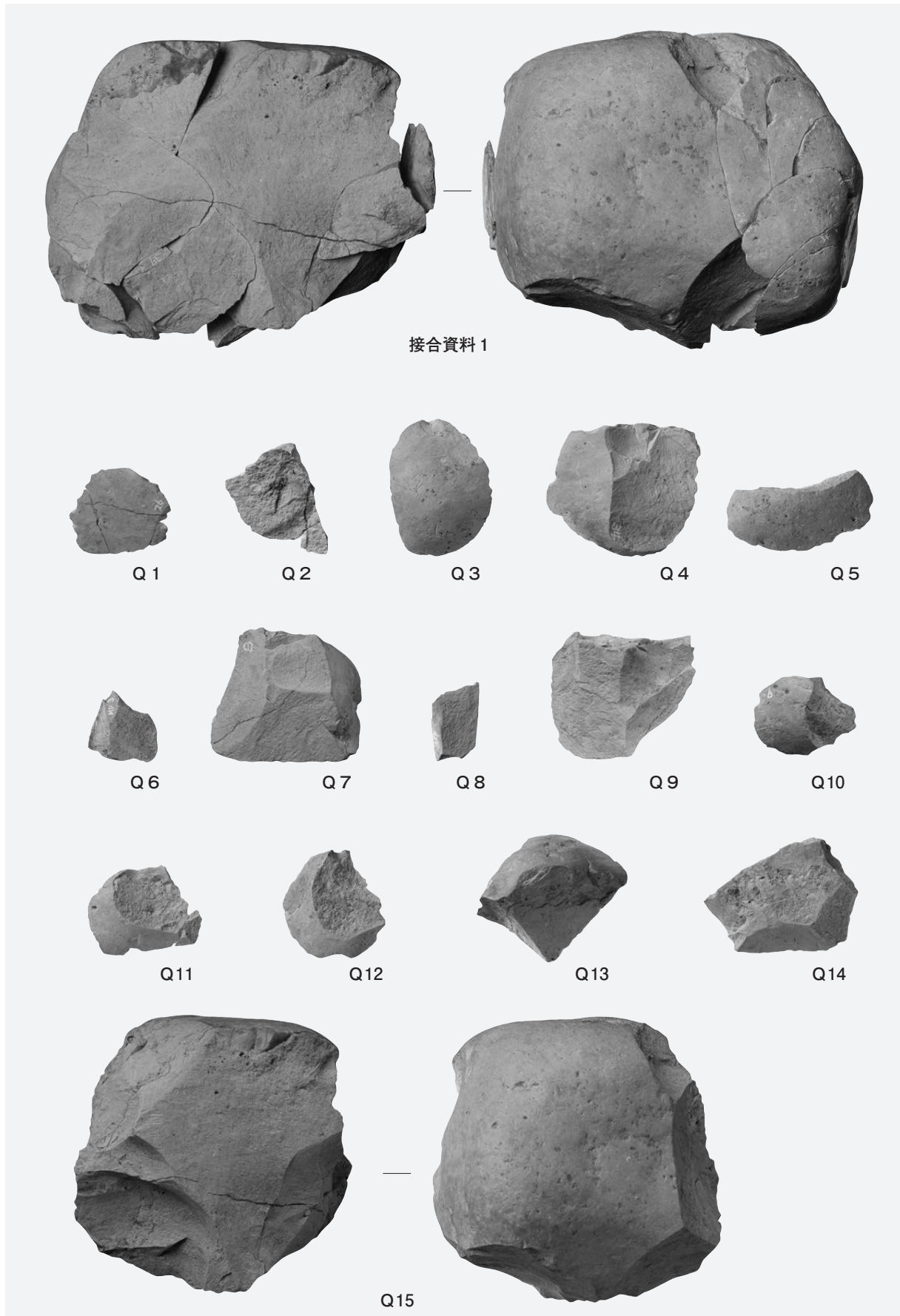
第 27 号 土 坑



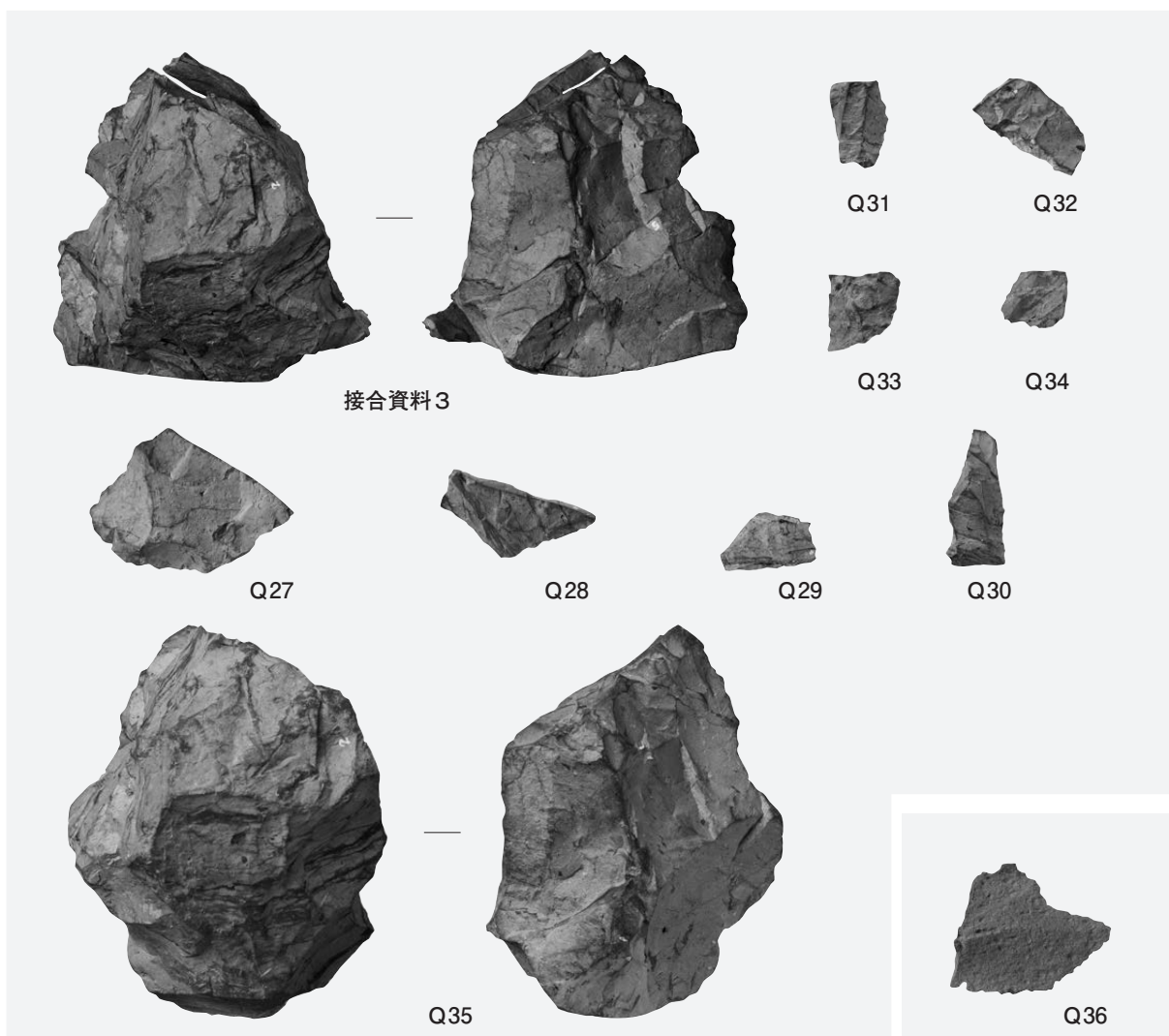
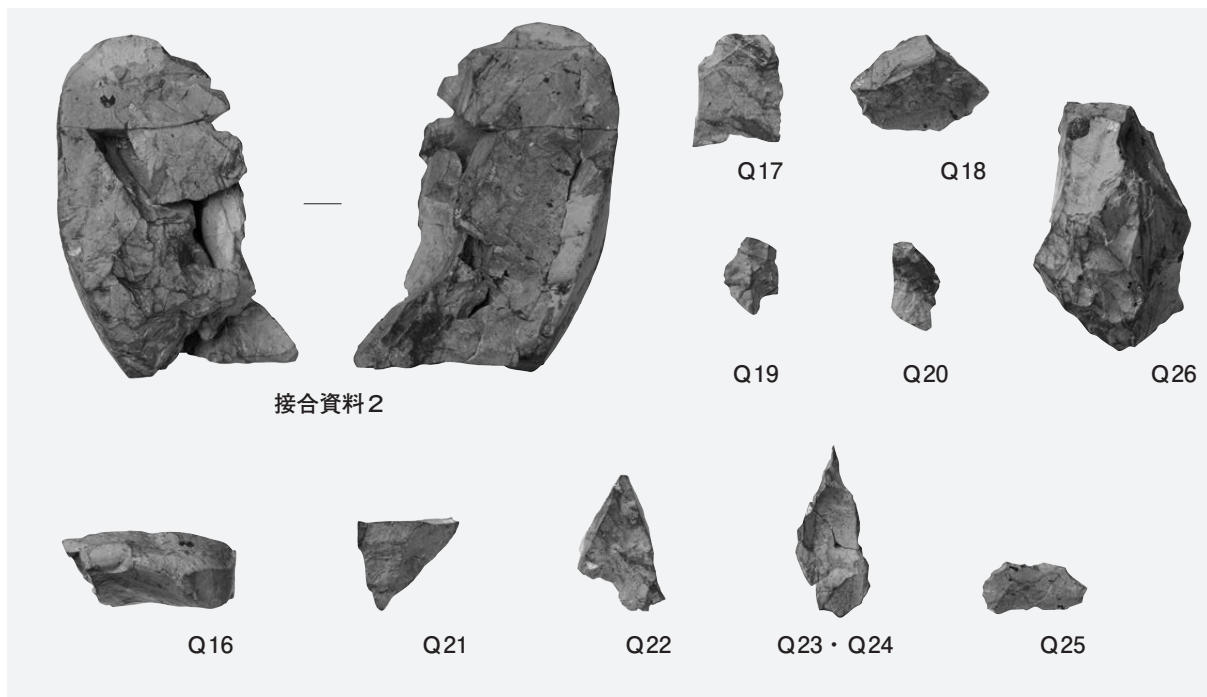
調 査 完 了 状 況  
( 平 成 26 年 度 )



調 査 完 了 状 況  
( 平 成 27 年 度 )



第1号石器集中地点出土遺物（1）



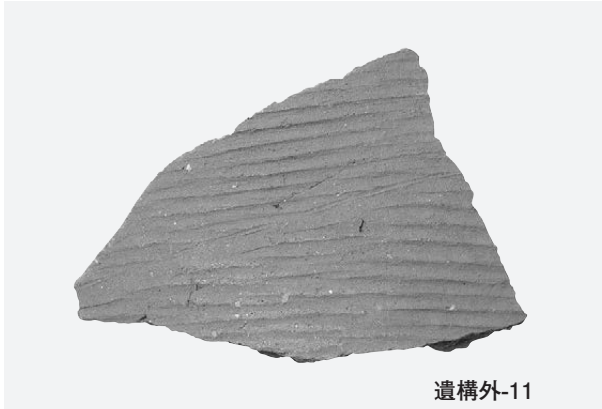
第1号石器集中地点出土遺物（2）

PL10



第1号掘跡，第27・46号土坑出土土器

PL11



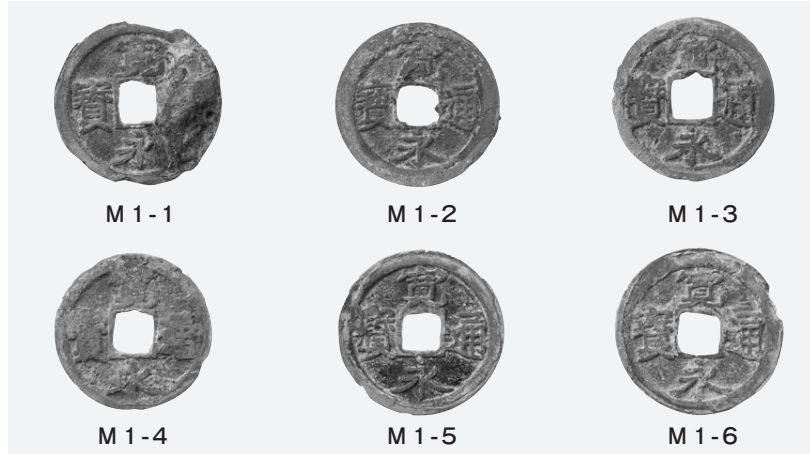
遺構外-11



遺構外-T1



SD1-M1



M1-1

M1-2

M1-3

M1-4

M1-5

M1-6



SK27-M2



遺構外-M3



遺構外-Q37



遺構外-Q38

第1号堀跡出土銭貨，第27号土坑出土鉄製品，遺構外出土土器・石器・椀状滓・瓦

PL12



第1号方形竖穴遺構  
第1号井戸跡



第1号塚  
検出状況



第1号塚  
遺物出土状況

PL13

第 1 号 塚  
石材出土状況



調査完了状況



第 1 号塚出土石仏





PL14

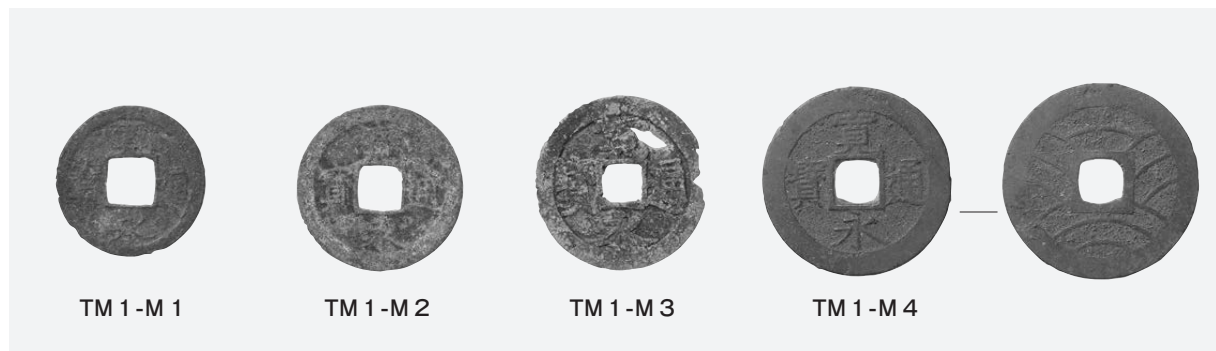


第1号方形竖穴遺構・第1号塚出土土器，第1号塚出土石製品，遺構外出土土器

PL15



第1号塚出土石製品



第1号方形竖穴遺構出土石器，第1号塚出土銭貨，遺構外出土土器・剥片

# 抄 録

ふりがな	しばさきおおほりいせき しばさきだいにちづか								
書名	柴崎大堀遺跡 柴崎大日塚								
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 XX								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 429 集								
著者名	盛野浩一 皆川貴之								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒 310 - 0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 - 225 - 6587								
発行日	2018 (平成 30) 年 3 月 15 日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
しばさきおおほりいせき 柴崎大堀遺跡	いばらきけん 茨城県つくば市柴崎 あざおおほり 字大堀 903-2 番地ほか	08220 - 493	36 度 6 分 11 秒	140 度 7 分 29 秒	26 m	20091001 ~ 20091031 20160202 ~ 20160331 20160901 ~ 20161130 20170901 ~ 20171118	92 m <sup>2</sup>  4,252 m <sup>2</sup>  5,253 m <sup>2</sup>  1,300 m <sup>2</sup>	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査	
しばさきだいにちづか 柴崎大日塚	いばらきけん 茨城県つくば市柴崎 あざだいにち 字大日 952 番地ほか	08220 - 492	36 度 6 分 28 秒	140 度 7 分 16 秒	27 m	20110901 ~ 20111031	758 m <sup>2</sup>		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
柴崎大堀遺跡	包蔵地	旧石器	石器集中地点	1 か所	石核、剥片		字名にもなっている「大堀」は、二つの谷津を繋ぐように造られた堀切で、戦国時代において台地上の通行を遮断するための防衛施設であったと考えられる。今回のような広範囲の調査事例は類例がなく、貴重な資料となる。		
	狩猟場	縄文	陥し穴	6 基	縄文土器 (深鉢)				
	その他	平安	土坑	1 基	土師器 (坏・高台付椀)、須恵器 (坏・鉢)、瓦 (平瓦)				
			室町	堀跡 土塁	1 条 2 条				
			江戸	土坑	1 基	土師質土器 (焙烙・甕)、陶器 (天目茶碗・丸碗・皿)、瓦質土器 (火鉢)、銭貨 (寛永通寶)			
時期不明		土坑 溝跡	46 基 7 条						
柴崎大日塚	集落跡	室町	方形竪穴遺構	1 棟	土師質土器 (小皿)、石器 (砥石)				
	塚	江戸	塚	1 基	石仏 (胎蔵界大日如来像・如意輪観音像)、石製品 (宝篋印塔・五輪塔)、銭貨 (寛永通寶)				
	その他	時期不明	井戸跡 土坑	1 基 15 基					
要約	<p>柴崎大堀遺跡は、旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明した。主体となるのは、室町時代から江戸時代にかけて使用された城郭関連遺構で、320 m 以上伸びる堀とそれに伴う土塁である。堀は、複数回にわたって形状を変えており、堀の変化を追うことができる資料である。また、江戸時代に入ってからはその底面が墓域として利用された可能性がある。</p> <p>柴崎大日塚は古墳と考えられていたが、調査の結果、江戸時代の塚であることが判明した。塚からは寛永期に当地方で深く信仰された胎蔵界大日如来像が出土しており、湯殿山大日信仰に関わる塚であることが分かった。その他、室町時代の宝篋印塔や五輪塔の部材が出土し、また同時期の方形竪穴遺構を確認しており、近隣にある柴崎片岡上館跡との関連が考えられる。</p>								

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Profession ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film Epson GT-X980
	図面類	RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L, 太ゴB101Pro
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第429集

### 柴崎大堀遺跡 柴崎大日塚

中根・今田台特定土地地区画整理事業  
地内埋蔵文化財調査報告書XX

平成30(2018)年 3月15日 印刷

平成30(2018)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社

〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松3115-3

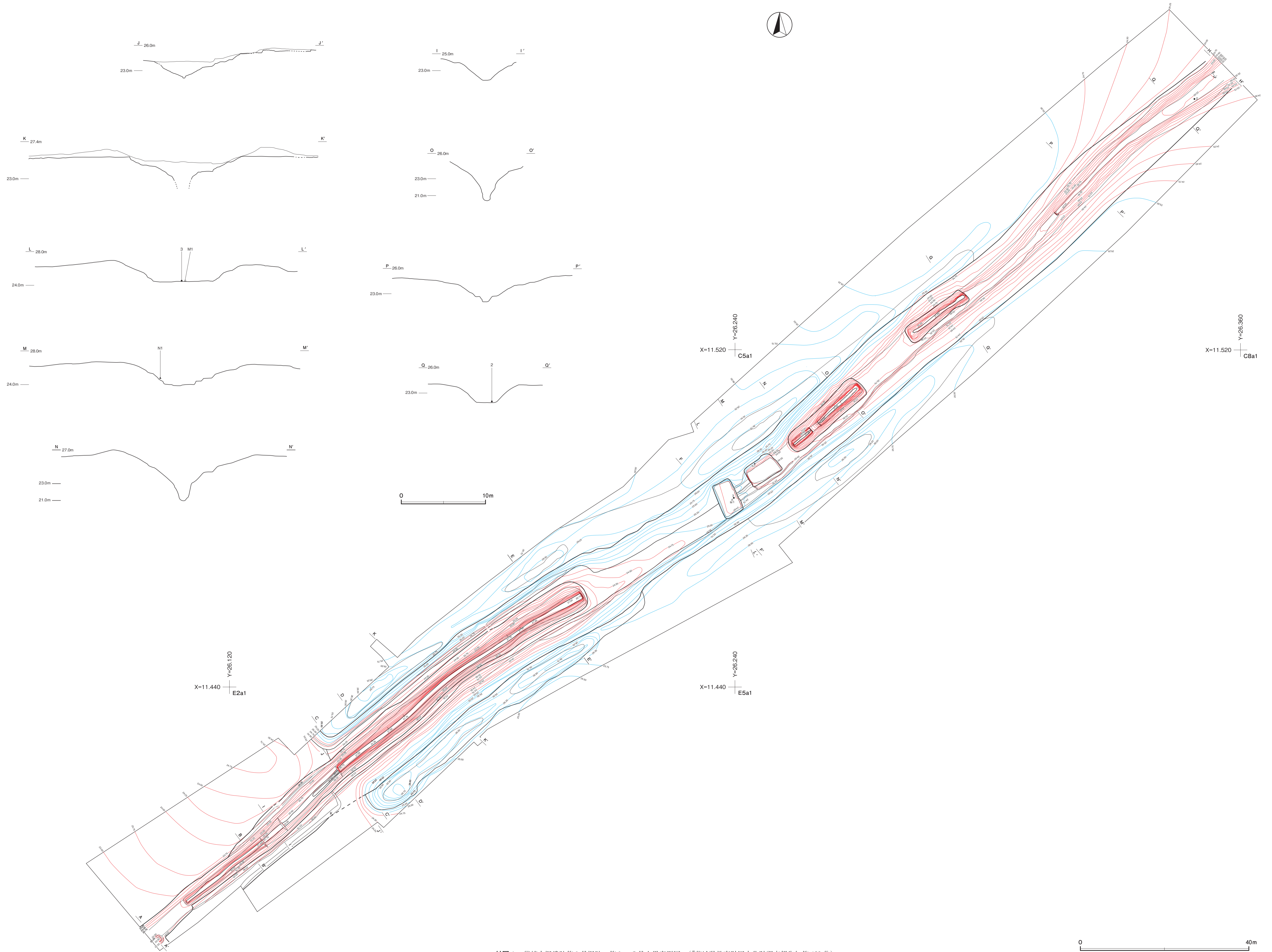
TEL 029-282-0370

# 付 図

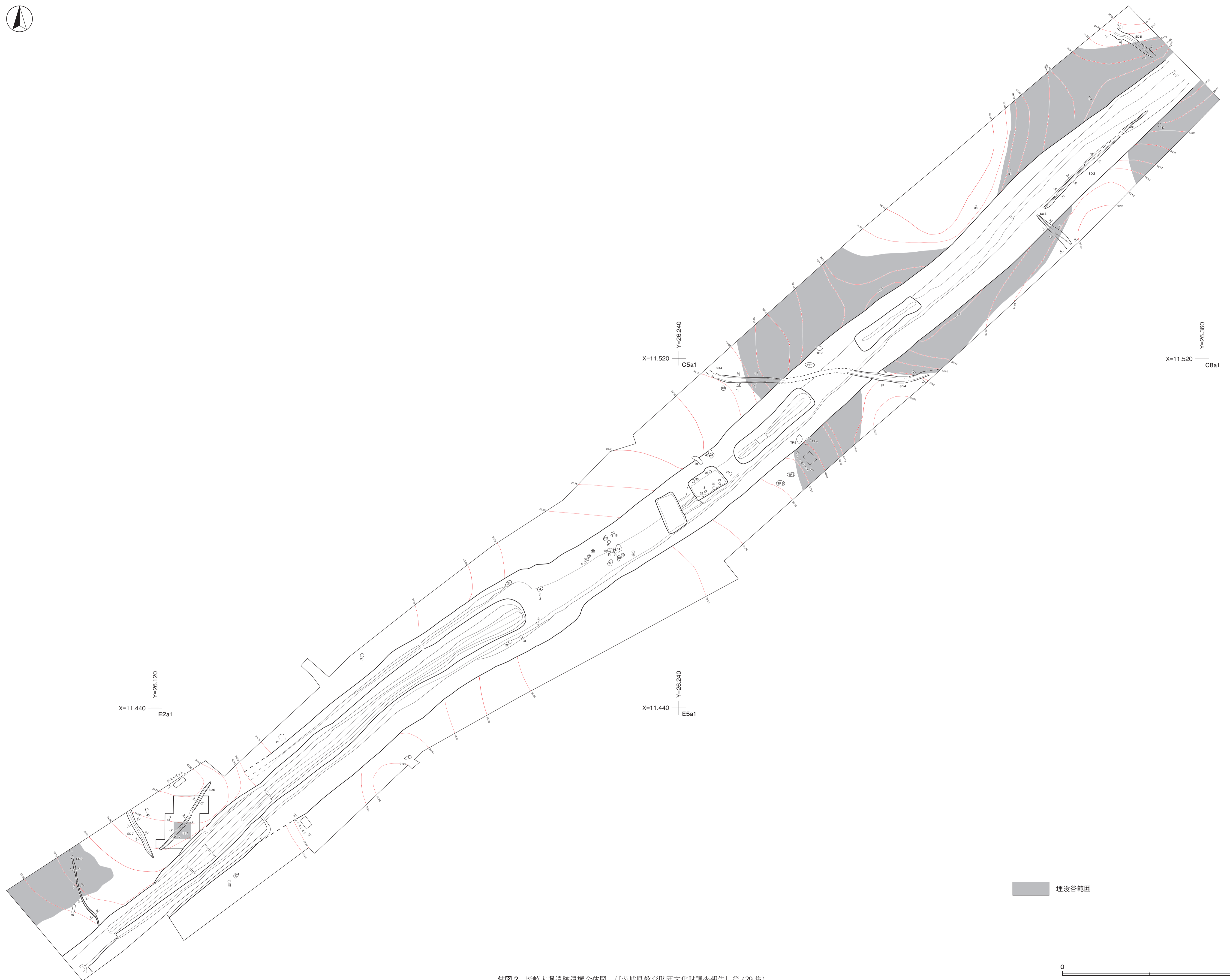
茨城県教育財団文化財調査報告第429集

付図1 柴崎大堀遺跡  
第1号堀跡・第1・2号土塁実測図

付図2 柴崎大堀遺跡遺構全体図



付図1 柴崎大堀遺跡第1号堀跡・第1・2号土塁実測図 (『茨城県教育財団文化財調査報告』第429集)



付図2 柴崎大塚遺跡遺構全体図 (『茨城県教育財団文化財調査報告』第429集)

0 40m



